

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第18号

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代

鹿児島県内における中世のトイレ遺構
—科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡

令和6年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2025. 10

『縄文の森から』第18号 目次

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター・・・・・・ 1

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代・・・・・・ 39

鹿児島県内における中世のトイレ遺構

—科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人・・・・・・ 45

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡・・・・・・ 61

令和6年度年報・・・・・・・・・ 69

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

Introduction of excavated materials at the Hoshizako site, Kajiki-cho, Aira City (2)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

H要旨

始良市加治木町に所在する干迫遺跡の発掘調査では、遺物ケース約 3,000 箱にも達する大量の遺物が出土した。報告書（文献 1）での掲載は限定的にならざるを得なかったことから、当センターでは遺跡の実態解明に資するためのさらなる基礎資料とするため、未発表の遺物についての情報を少しずつ整理・紹介していく作業を継続して実施しているところである（文献 2, 3）。今回は縄文時代後期中葉の市来式土器関連の資料を取り上げる。

キーワード 干迫遺跡, 市来式土器, 草野タイプ, 縄文時代後期中葉

はじめに

鹿児島県始良市加治木町日木山に所在する干迫遺跡は、九州自動車道と東九州自動車道に繋がる隼人道路の連結点である加治木ジャンクション建設に伴い、鹿児島県立埋蔵文化財センターによって発掘調査された遺跡である。

縄文時代後期中葉の遺構・遺物を中心とした膨大な出土品の情報について、これまで何回か整理・公開してきたがところであるが、まだまだ発表の機会を待っている資料が多く残されているのも事実である。

記録保存の精度を高め、干迫遺跡の実態解明につなげる資料とするため、今回は市来式土器について追加紹介することとしたい。

なお、発掘調査自体の経緯や経過、整理作業や報告書作成作業については、前回取り上げたのでここでは割愛させていただくこととする（文献 3 参照）。

1 紹介資料の概要

今回取り上げる市来式土器は、鹿児島県いちき串木野市市来町川上に所在する市来貝塚の出土資料を標式とする土器である。大正年間から学界に紹介され、九州を代表する縄文土器として古くから知られてきた（文献 4, 5）。

ちなみに、図 1 は市来式土器の概要資料をまとめたものである（文献 10）。

繰り返し述べるように、干迫遺跡からは膨大な量の出土品が発掘されたが、その中心はほぼ縄文時代後期中葉期のものであった。中でも全体の約 60% が市来式土器。それに後続すると考えられる前回取り上げた丸尾式土器を含めると全体の約 75% であった。

ここで、干迫遺跡の本報告書（文献 1）において示された出土土器の分類について、確認しておく。

報告書では縄文土器をまずⅠ～Ⅲ群に分類。第Ⅰ群が縄文時代早期から後期前葉の土器、第Ⅱ群が縄文時代後期中葉を中心とした磨消縄文系土器、そして第Ⅲ群が縄文時代

後期中葉の貝殻文系土器を中心とする一群とした。今回取り上げる市来式土器は第Ⅲ群で、関連する土器型式等も含め抜粋したものが以下の分類である。

- 第Ⅲ群第 1 類 ～ 市来式土器 1
- 第 2 類 ～ 市来式土器 2
- 第 3 類 ～ 市来式土器（無文）
- 第 4 類 ～ 草野式土器
- 第 5 類 ～ 丸尾式土器
- 第 6 類 ～ 台付皿形土器

これらのうち、今回は第 2～4 類と 5 類の一部について紹介する。遺物番号は前回からの通し番号である。

第Ⅲ群第 2 類（図 2～11 173～269）

口縁部がいわゆる「断面三角形」状を呈する市来式土器の深鉢の中で、文様が胴部まで施されるもので、河口貞徳氏の市来Ⅲ式土器（文献 6, 7）に該当する。

二枚貝の貝殻腹縁部を利用した貝殻刺突文をはじめ棒状施文による刺突文や沈線文等を組み合わせて文様を構成したものである。中には 256 や 264 のように山形口縁の頂部下位に把手状装飾部を貼付したものもある。

ちなみに第Ⅲ群第 1 類土器は、文様が胴部まで及ばない市来式土器である。

第Ⅲ群第 3 類（図 12～16 270～290）

口縁部形状が市来式土器の特徴を有しながら、文様が施されていない土器である。

第Ⅲ群第 4 類（図 17～29 291～391）

河口貞徳氏によって型式設定されたいわゆる草野式土器である（文献 8）。従来市来式土器に後続する土器型式として認識されていたが、本田道輝氏によって市来式土器のある段階と並行して存在したもの（文献 9）として捉え、ここでは市来式土器の中の草野タイプと呼称する。

第Ⅲ群第 5 類（図 30 392～400）

第 5 類は丸尾式土器である。市来式土器に後続する土器型式と考えられる丸尾式土器については、前回紹介したが、

今回掲載した9点は、口縁部が断面三角形状から「く」の字状に変遷する、まさにその過程の特徴を有するもので、丸尾土器としては最古段階のものと考えられる資料である。

2 出土分布状況から

図31は干迫遺跡の遺構配置図である。発掘調査では縄文時代後期中葉の堅穴住居（建物）跡や集石遺構・土坑などの遺構が多く検出されたが、調査区の中央部をほぼ東西に横切る自然河川（流路）跡（R1と略称）は特徴的であった。

R1は幅約15m、長さ約100mに渡ってゆるやかに蛇行するような形状で検出された。残念ながら、実際には高速道路高架橋の橋脚建設工事によって、調査区内のおおよそ半分は削平されていた。

このR1では多くの遺物が検出され、図32にあるように、今回紹介する市来式土器や草野タイプもF20区やG15区、H13区等のR1内で多く出土した。両者及び前回紹介した丸尾式土器の分布傾向に大きな違いは見られない。このことから、市来式期から丸尾式期にかけての生活エリアに大きな変化はなかったものと考えてよさそうである。

おわりに

以上、干迫遺跡の第Ⅲ群第2～4類土器：市来式土器（草野タイプを含む）と5類土器：丸尾式土器の追加資料を紹介した。

前述のように、干迫遺跡出土遺物については、今後も機会を作り、順次紹介していきたいと考えている。

【引用文献】

- 1 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997『干迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22
- 2 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『中原遺跡』第3分冊 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 54
- 3 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2024「姶良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介(1)」『研究紀要・年報 縄文の森から』17
- 4 山崎五十麿 1921「薩摩国日置郡西市来村貝塚に就て」『考古学雑誌』11-12 日本考古学会
- 5 三森定男 1938「先史時代の西部日本（上）」『人類学先史学講座』1 雄山閣
- 6 河口貞徳 1986「先史時代」『松元郷土誌』松元町郷土誌編さん委員会
- 7 河口貞徳 1991「市来貝塚―昭和36年の発掘について」『鹿児島考古』25 鹿児島県考古学会
- 8 河口貞徳 1957「南九州後期の縄文式土器」『考古学

雑誌』42-2 日本考古学会

9 本田道輝 1989「市来・一湊式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館

10 前迫亮一 2023「市来貝塚の市来式土器―昭和36年調査（河コレクション）の整理から―」『愛媛考古学』

27 愛媛考古学協会

（文責：前迫亮一）

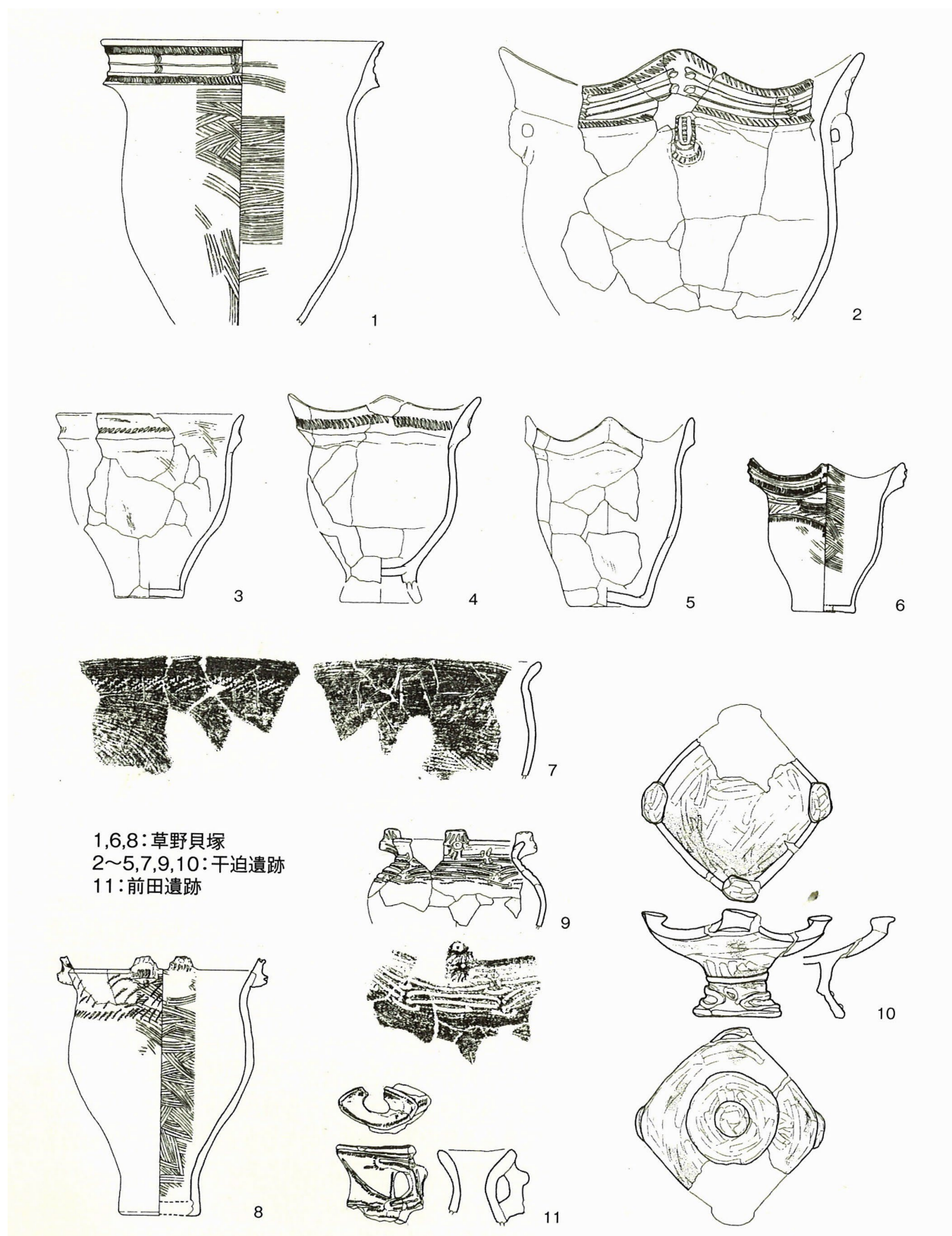


図1 市来式土器の概要

1~6: 深鉢 7~9: 深鉢（草野タイプ）
10: 台付皿（鉢）形土器 11: 舟形口縁壺形土器
（文献10より）

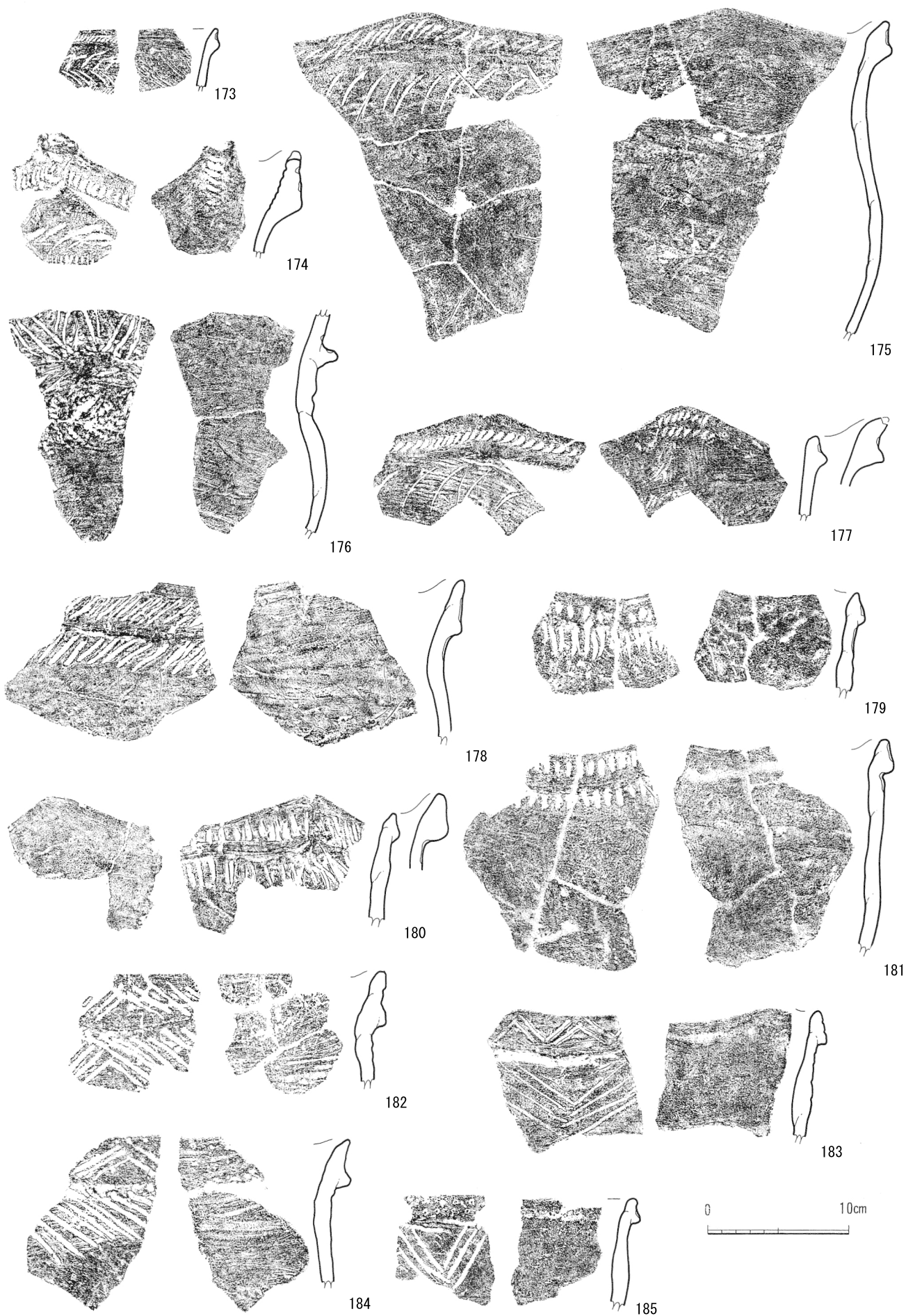


図2 縄文土器 (1)

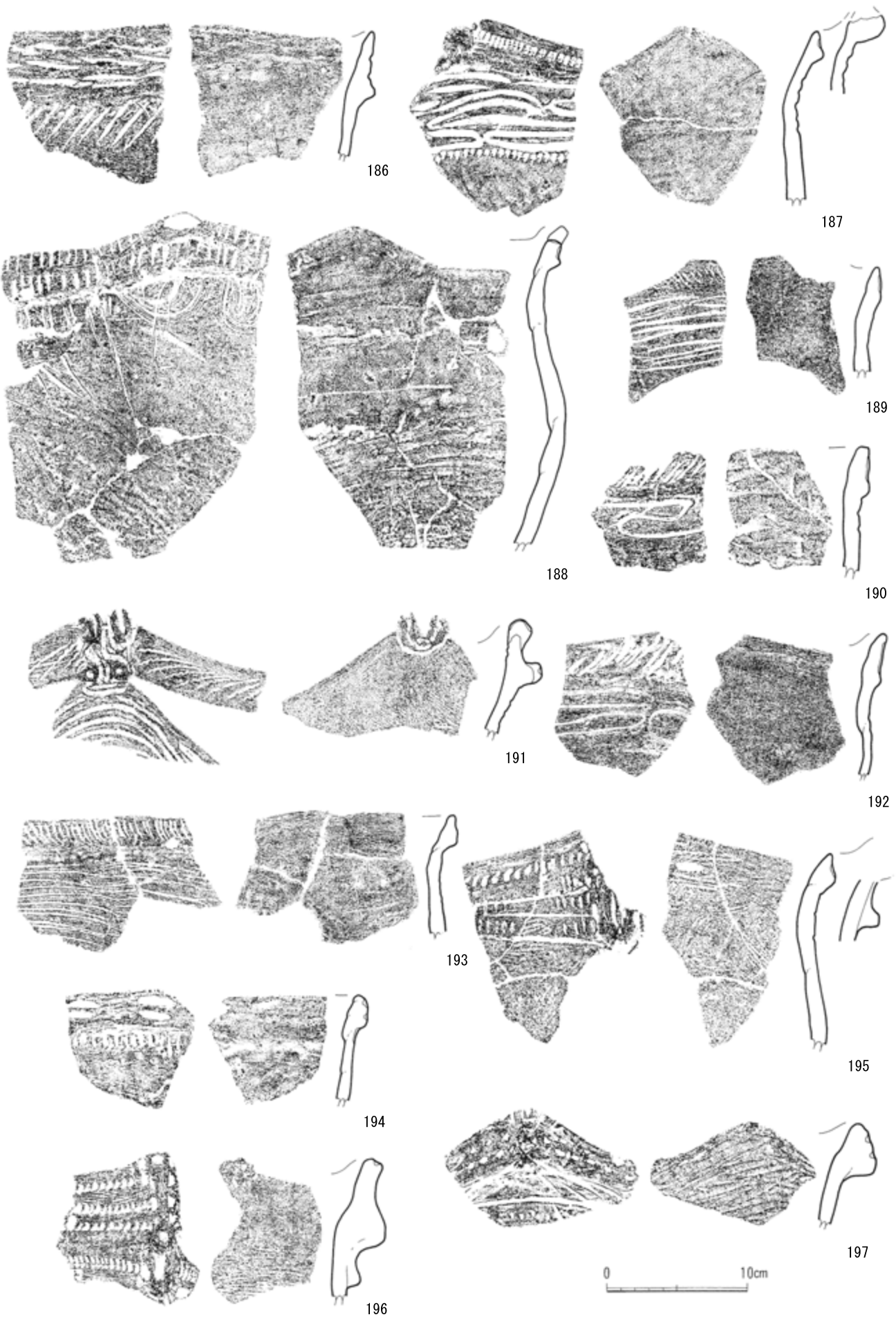


図3 縄文土器 (2)
-5-

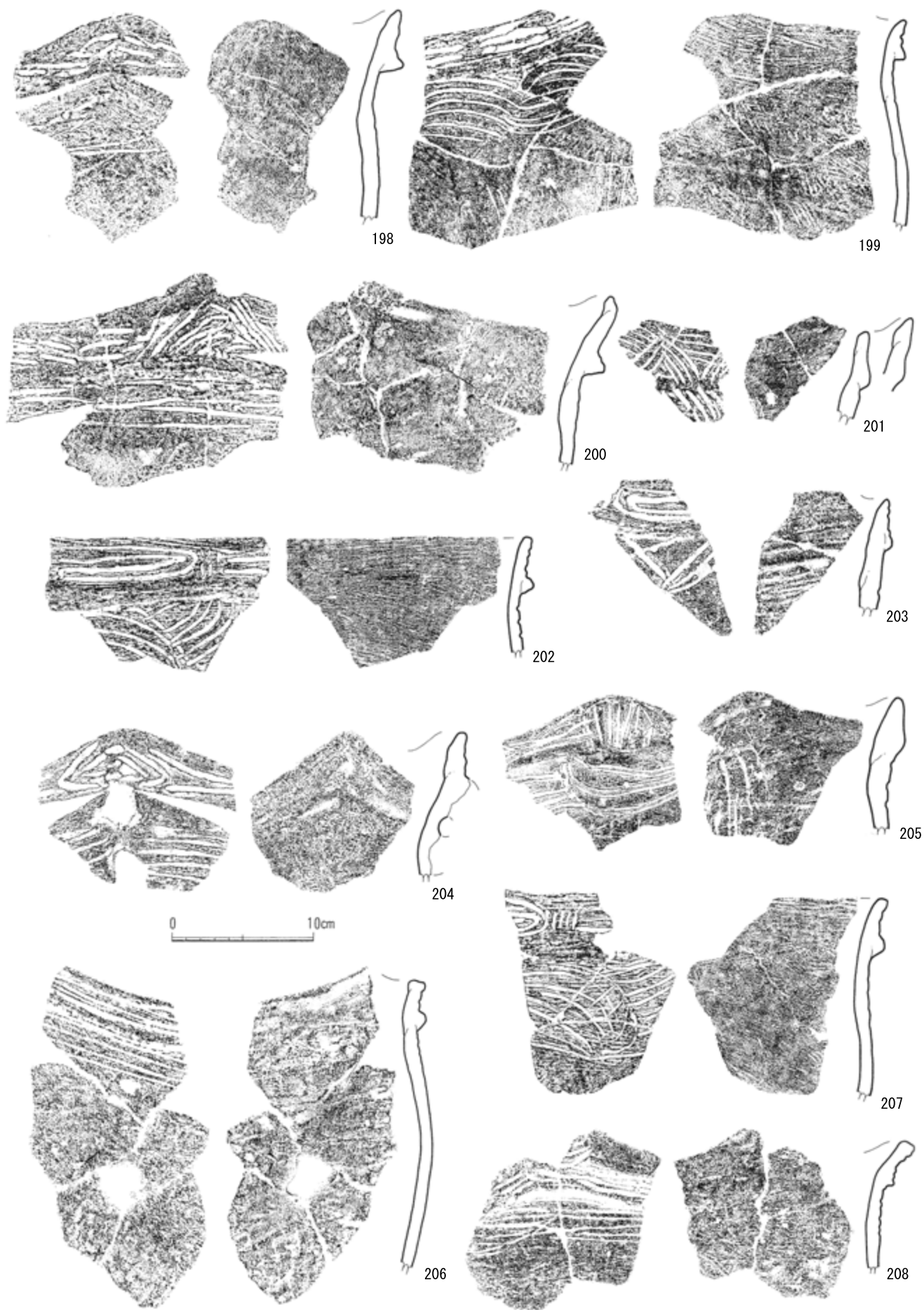


図4 縄文土器 (3)

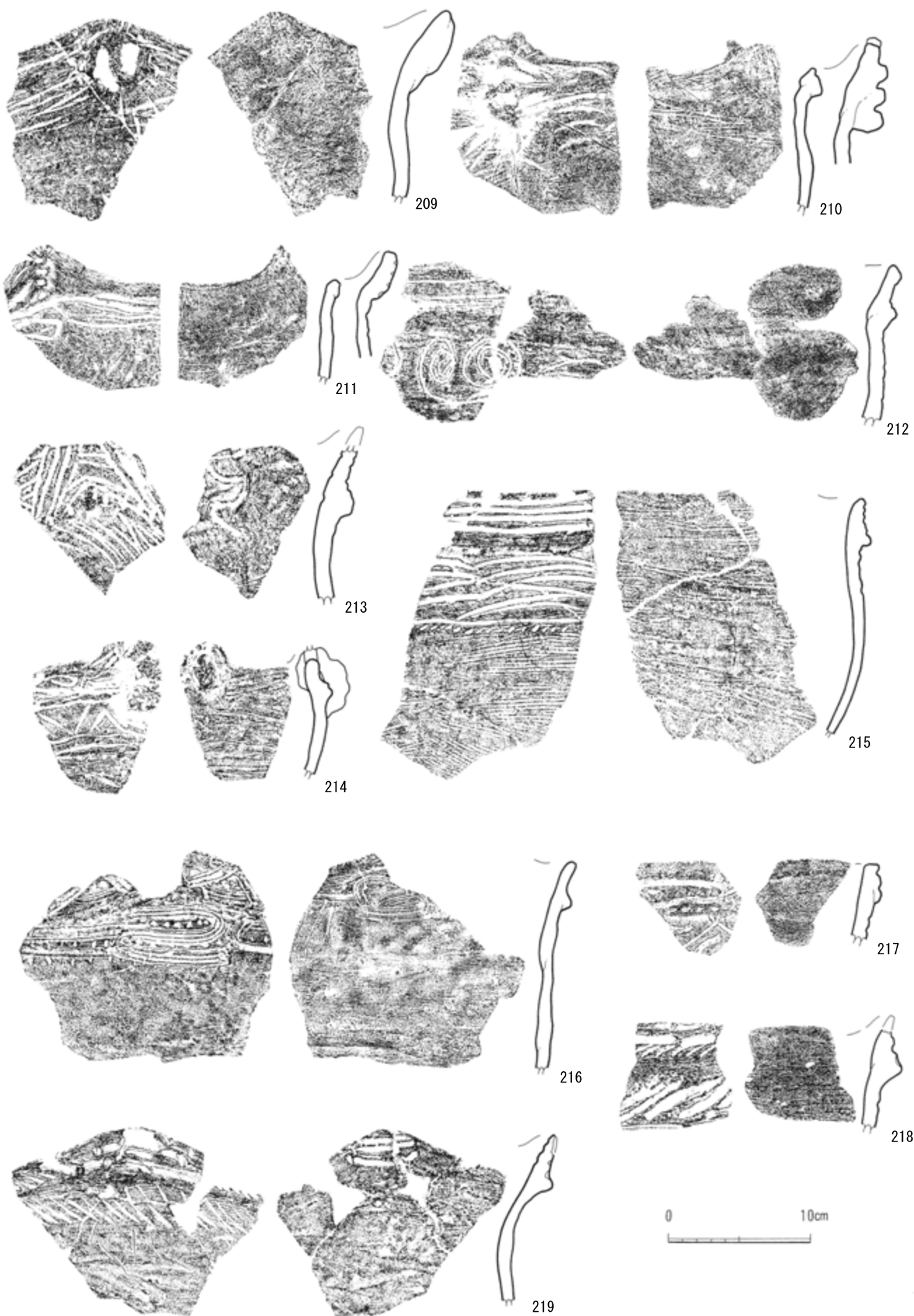


図5 縄文土器 (4)

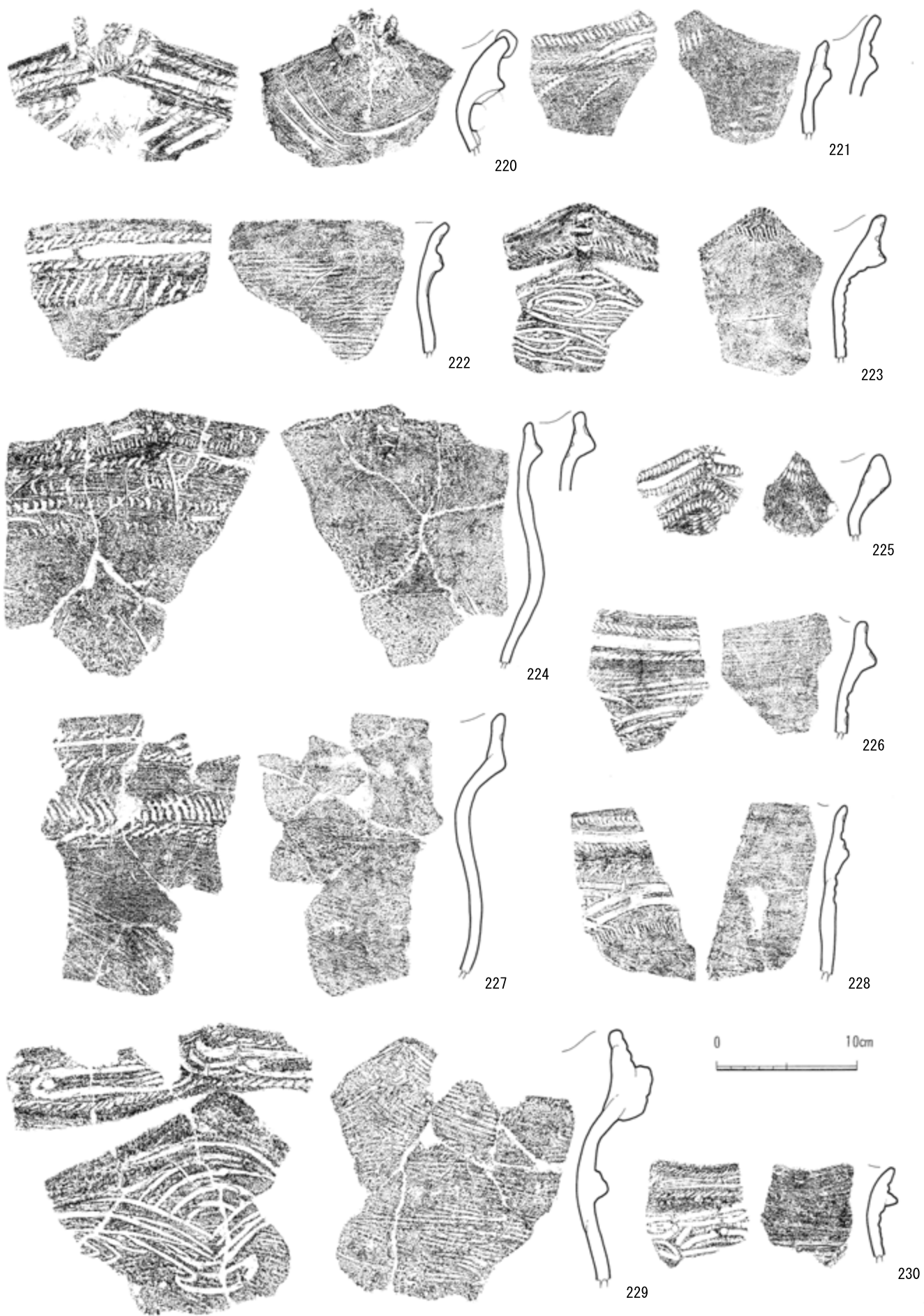


图6 绳文土器 (5)

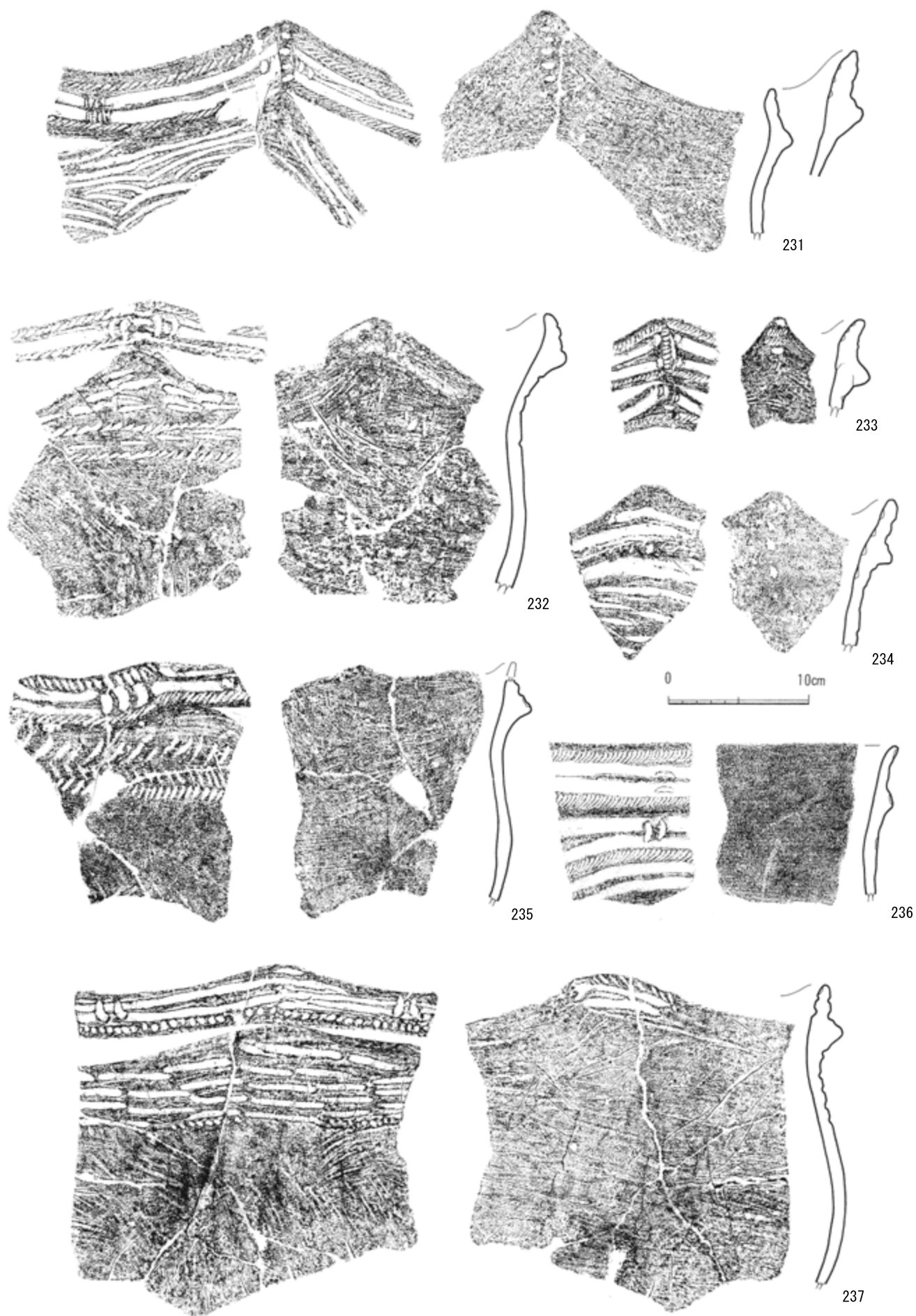


図7 縄文土器（6）

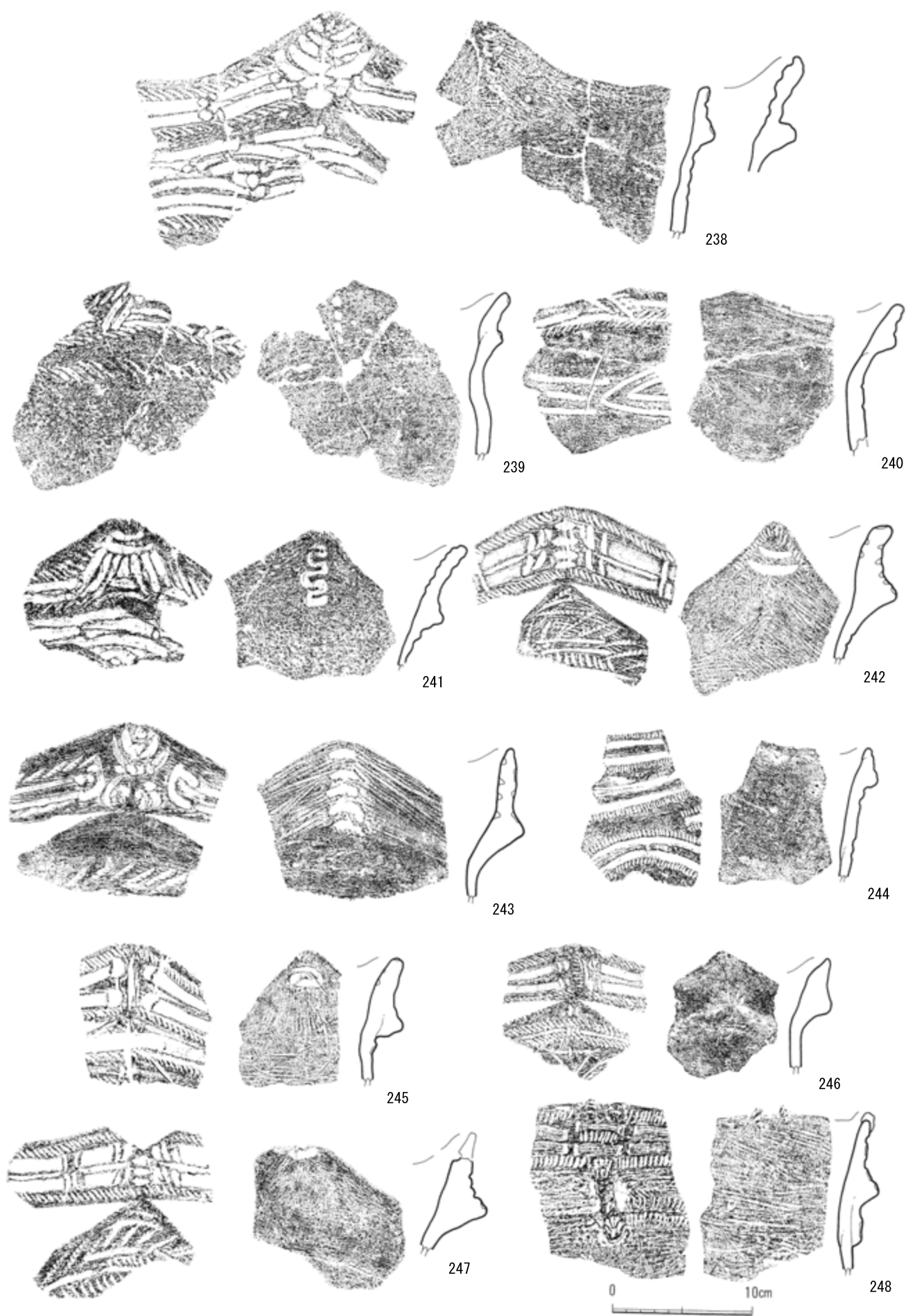


図8 縄文土器 (7)
-10-

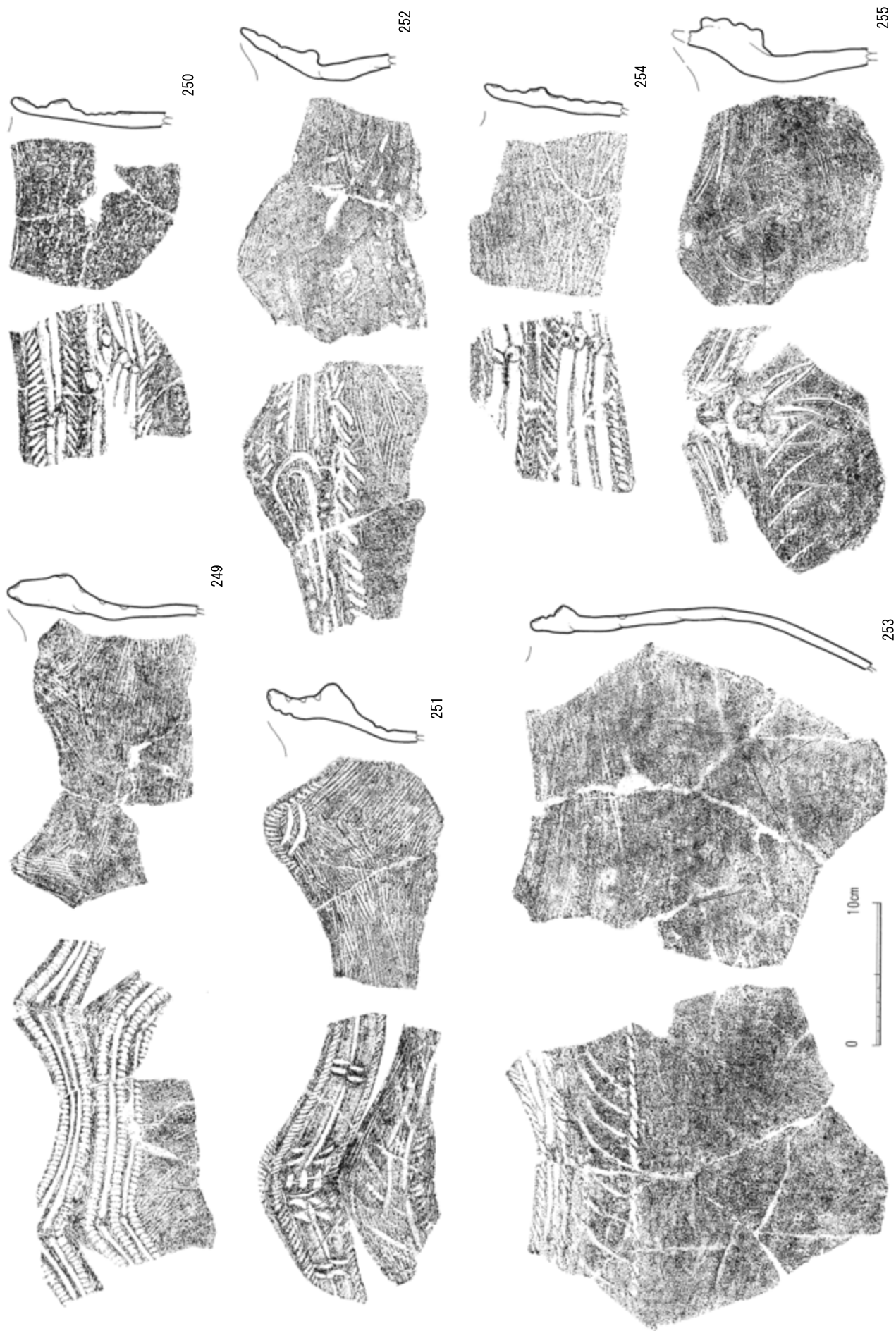


図9 縄文土器 (8)

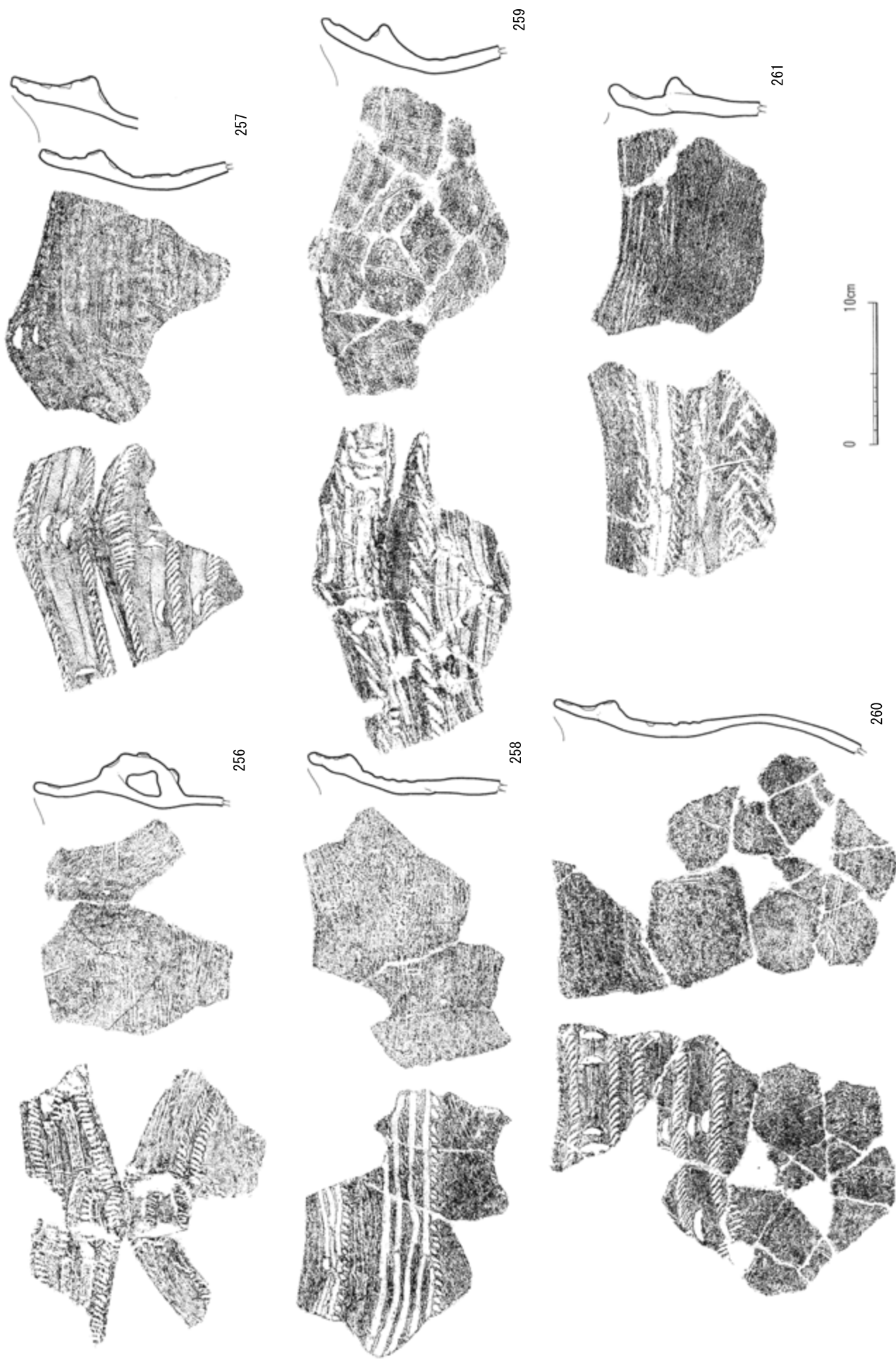


図10 縄文土器 (9)

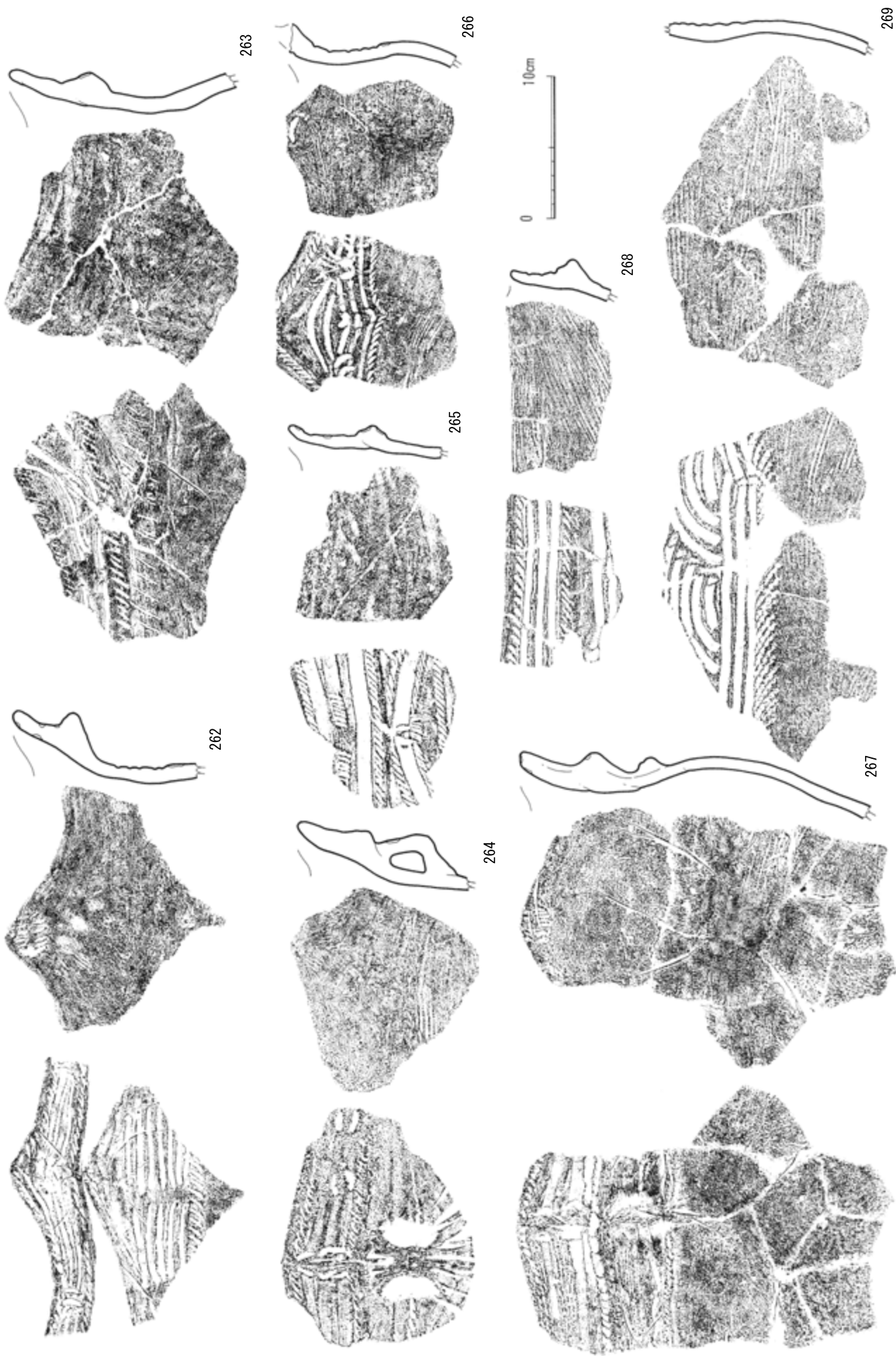
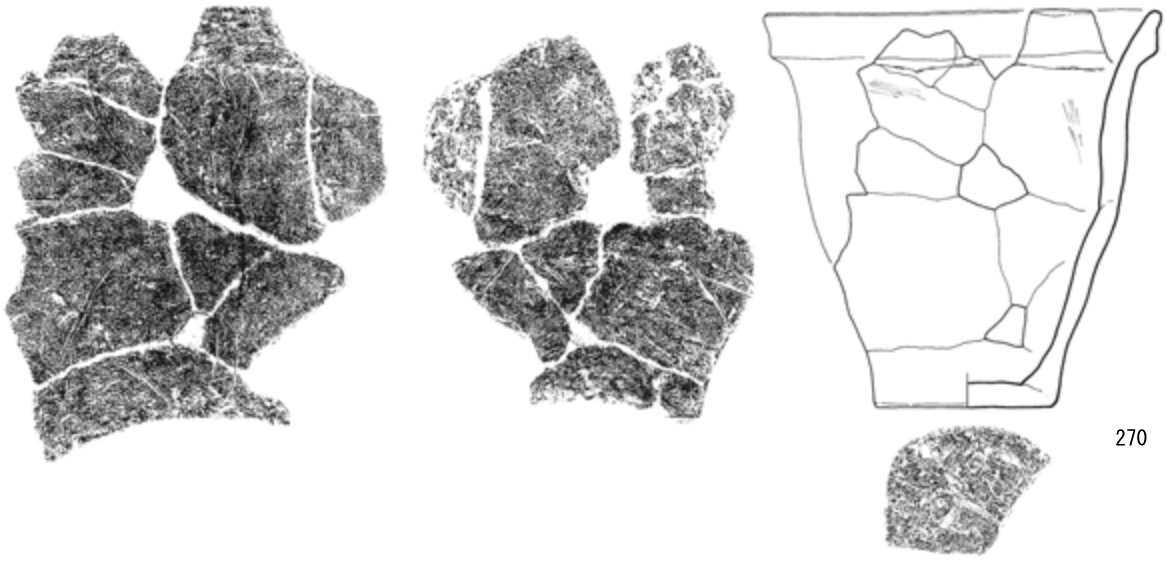
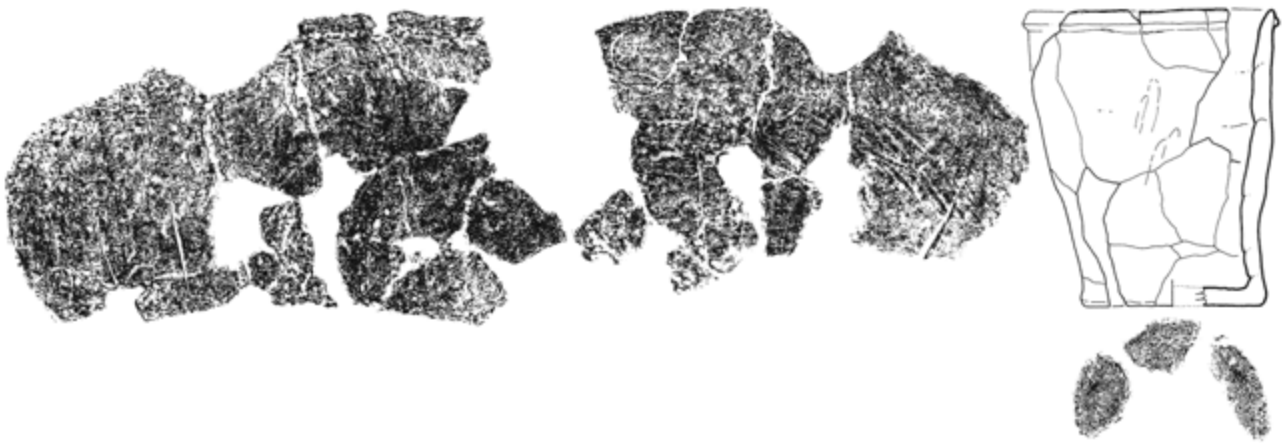


图11 縄文土器 (10)

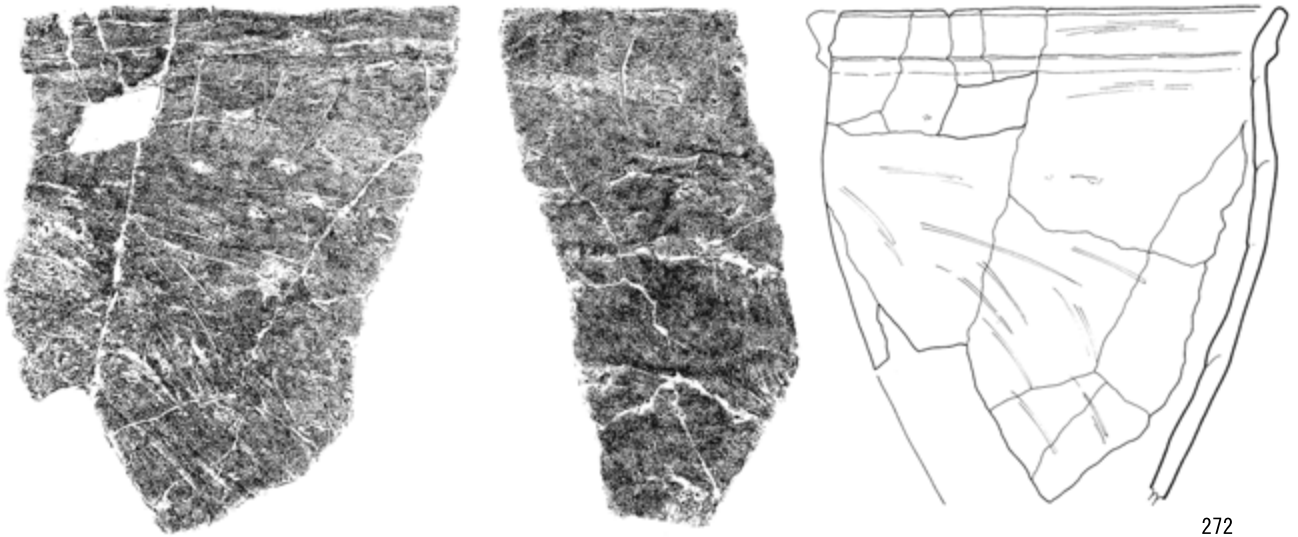


270



271

0 10cm



272

図12 縄文土器 (11)

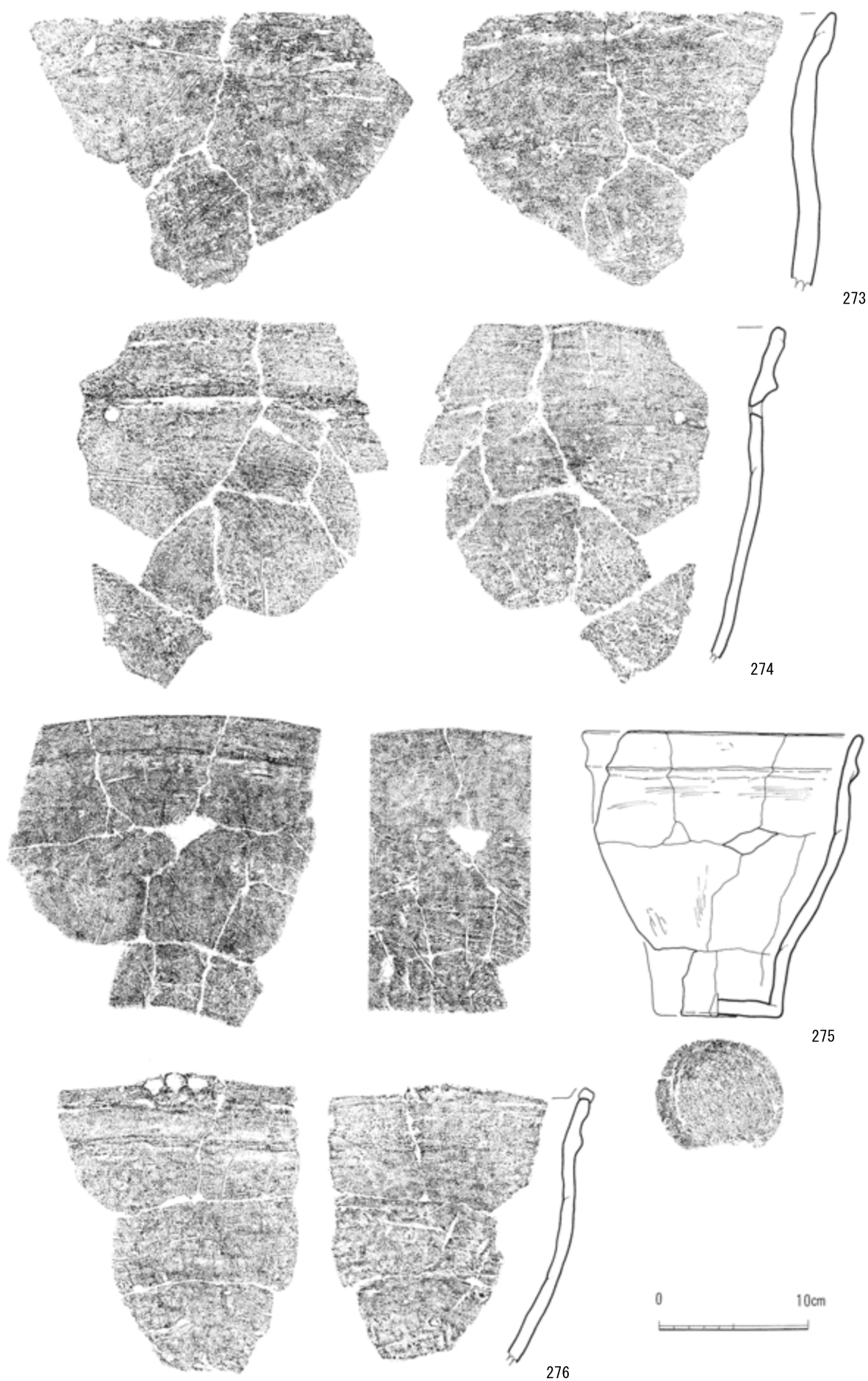


図13 縄文土器 (12)

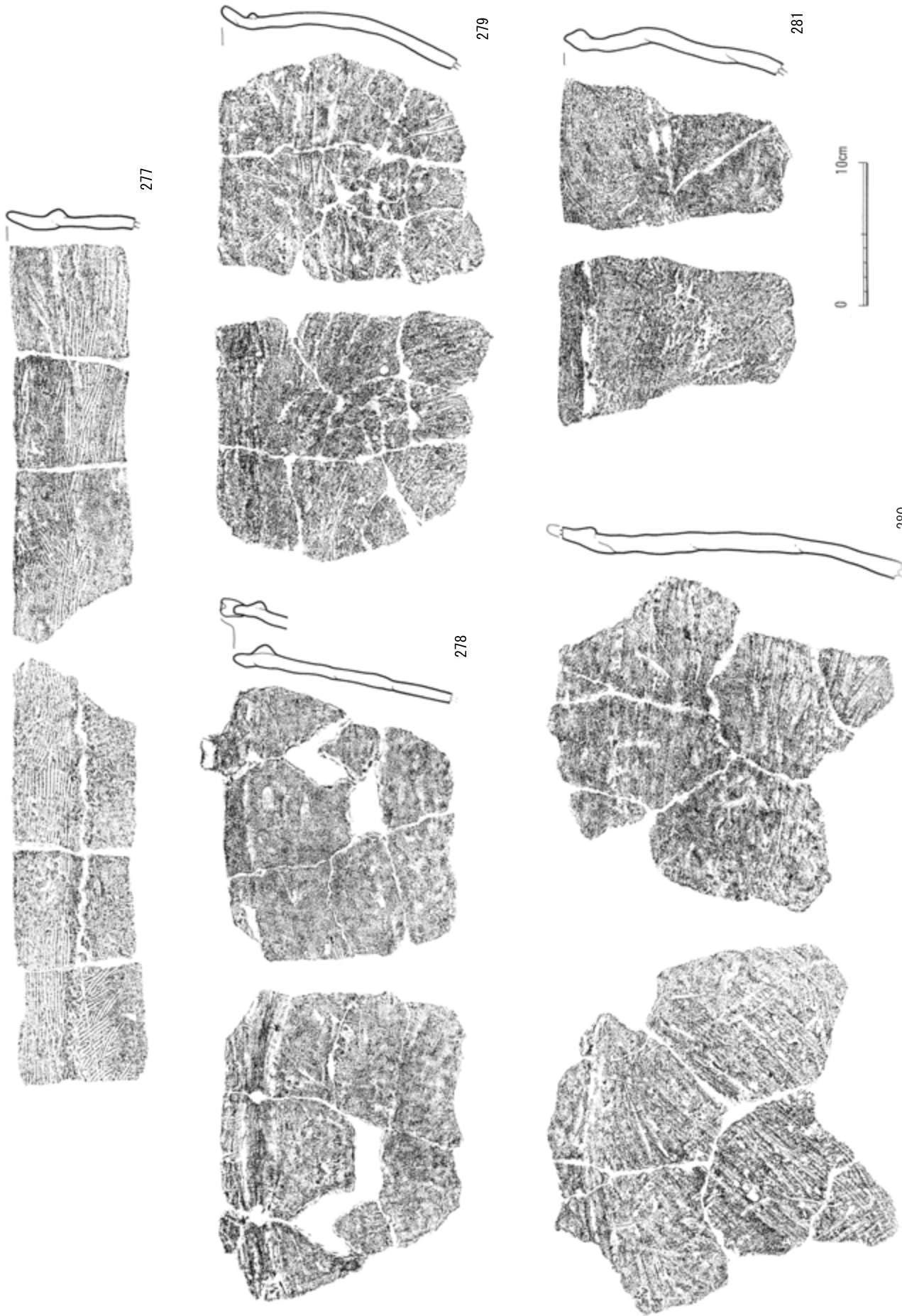


図14 縄文土器 (13)

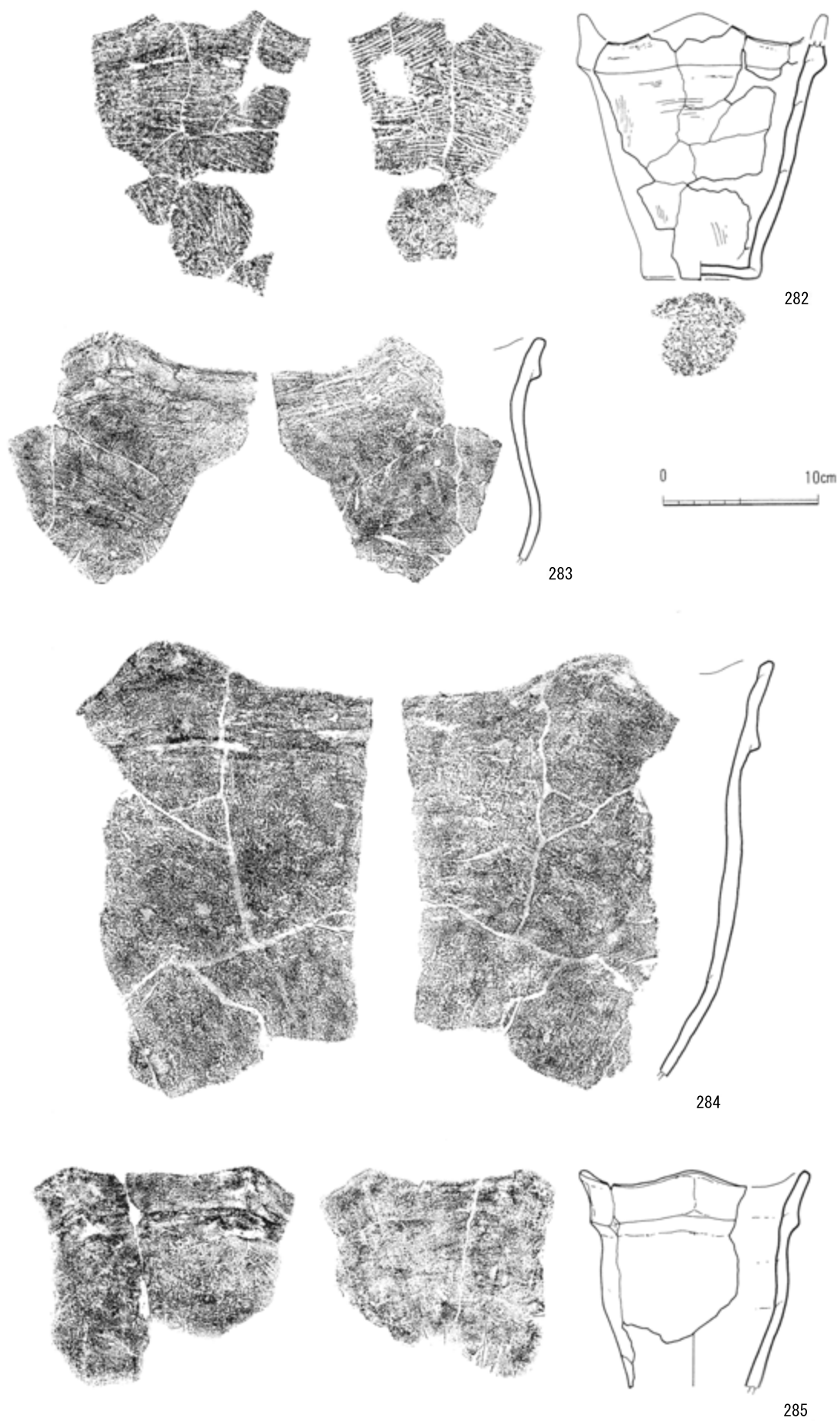


図15 縄文土器 (14)

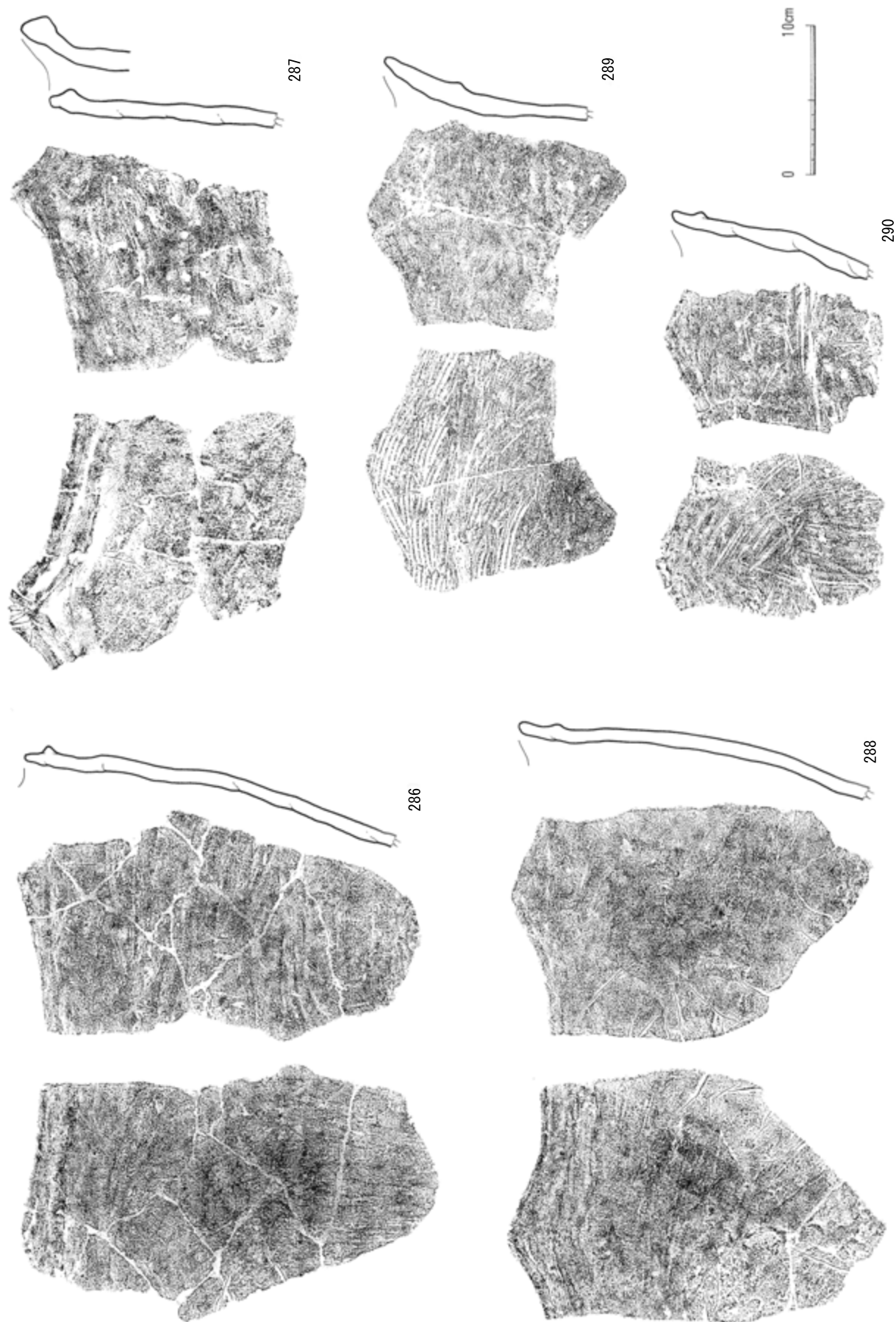


図16 縄文土器 (15)

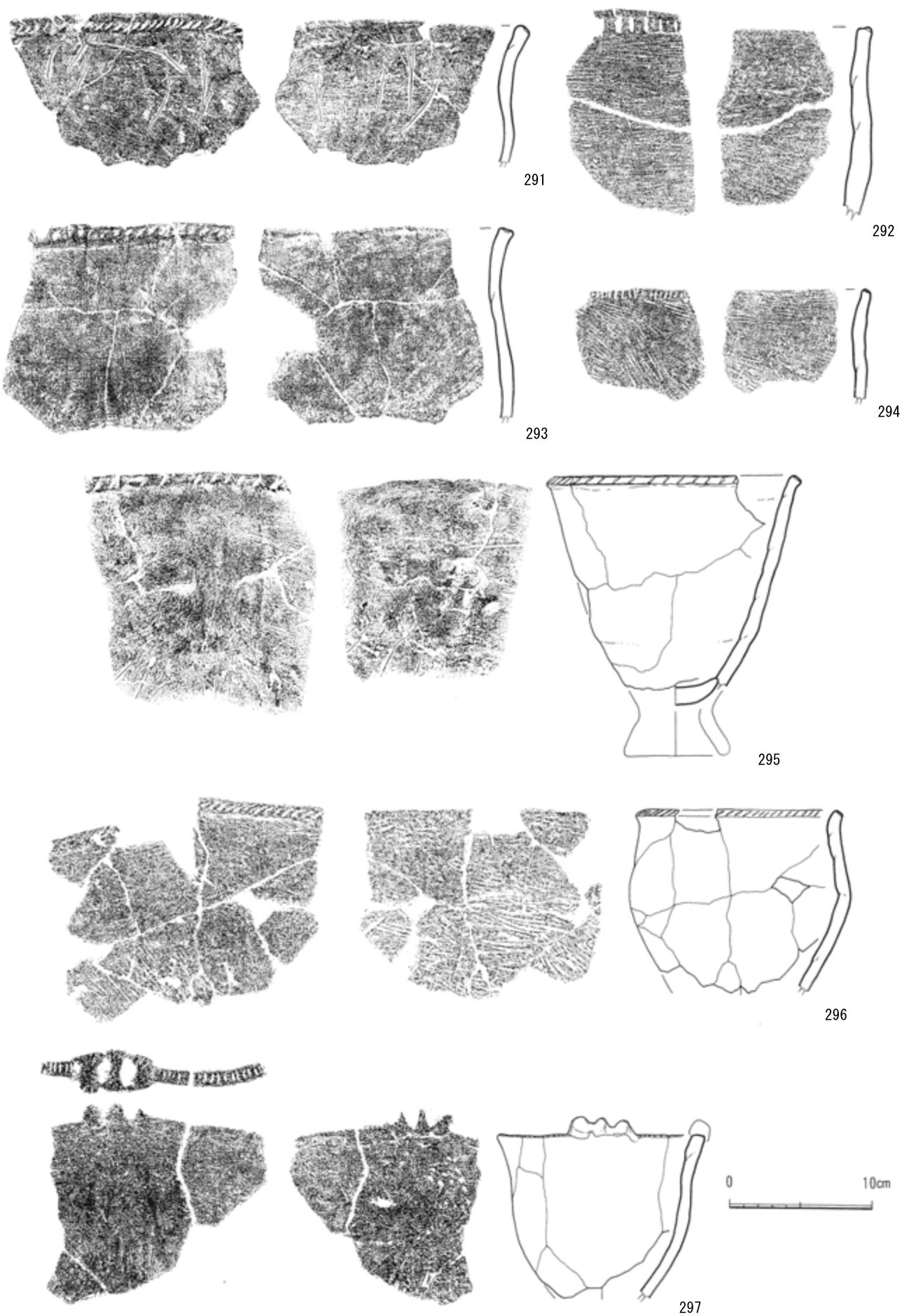


図17 縄文土器 (16)

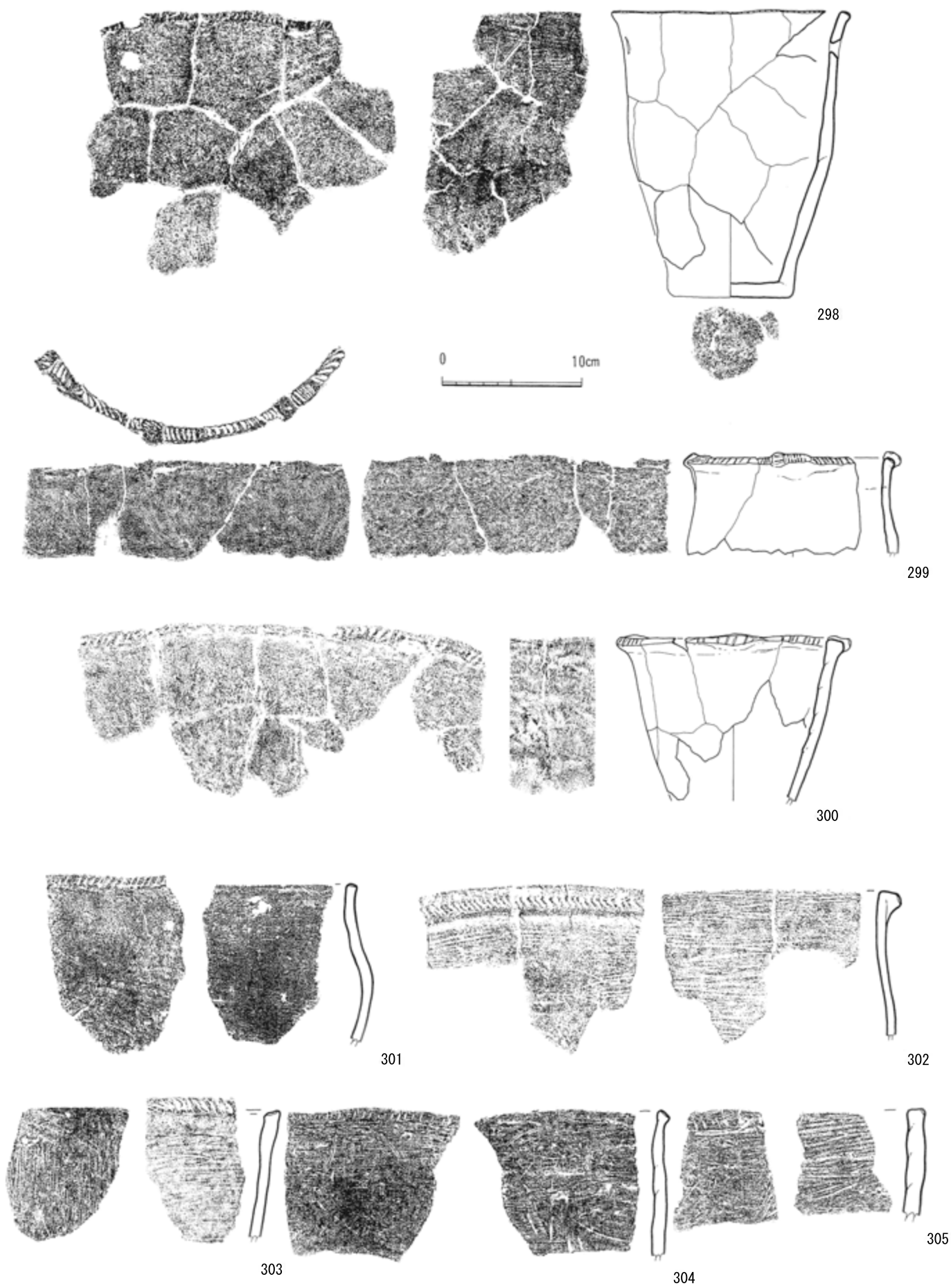


図18 縄文土器 (17)

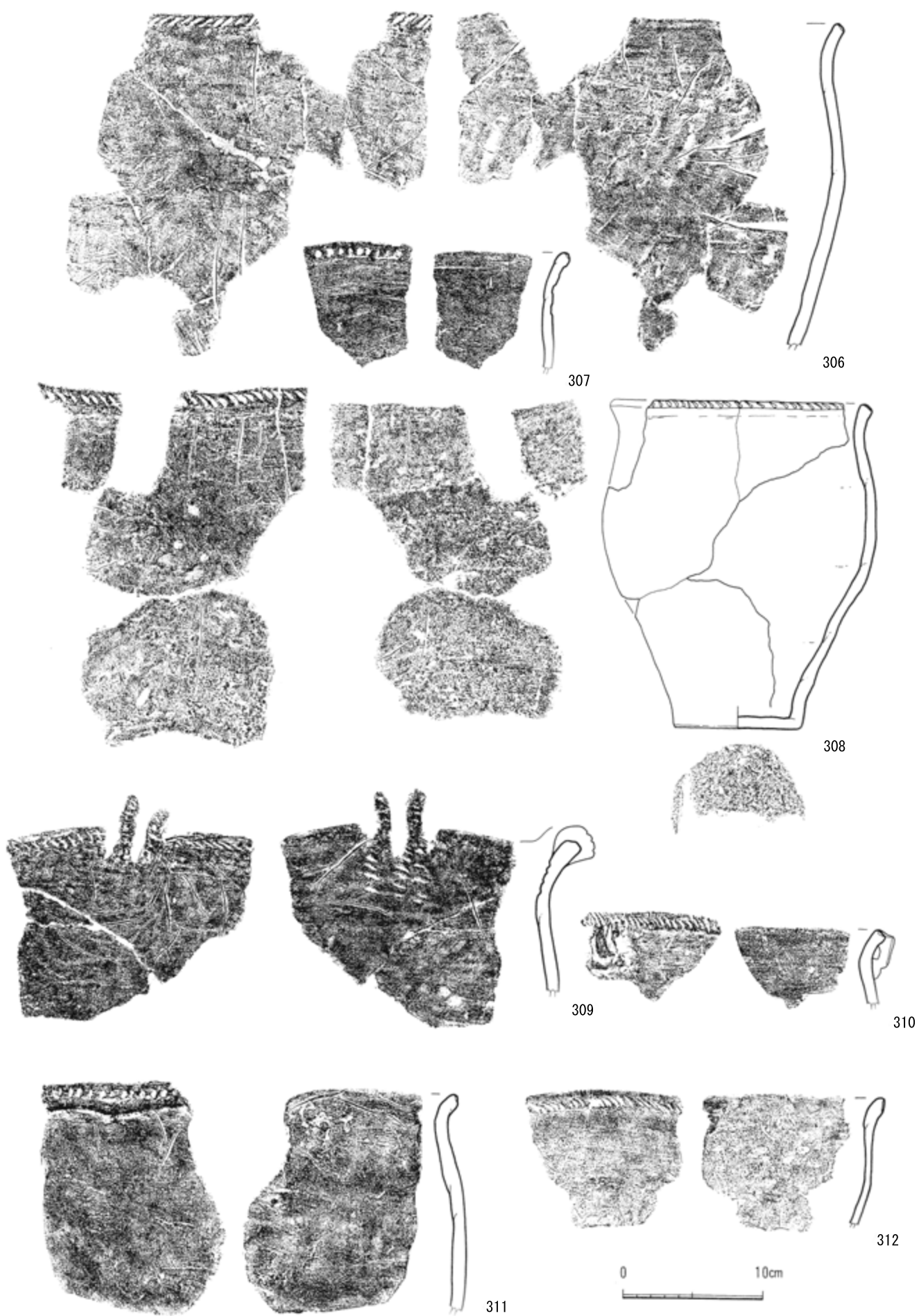


図19 縄文土器 (18)

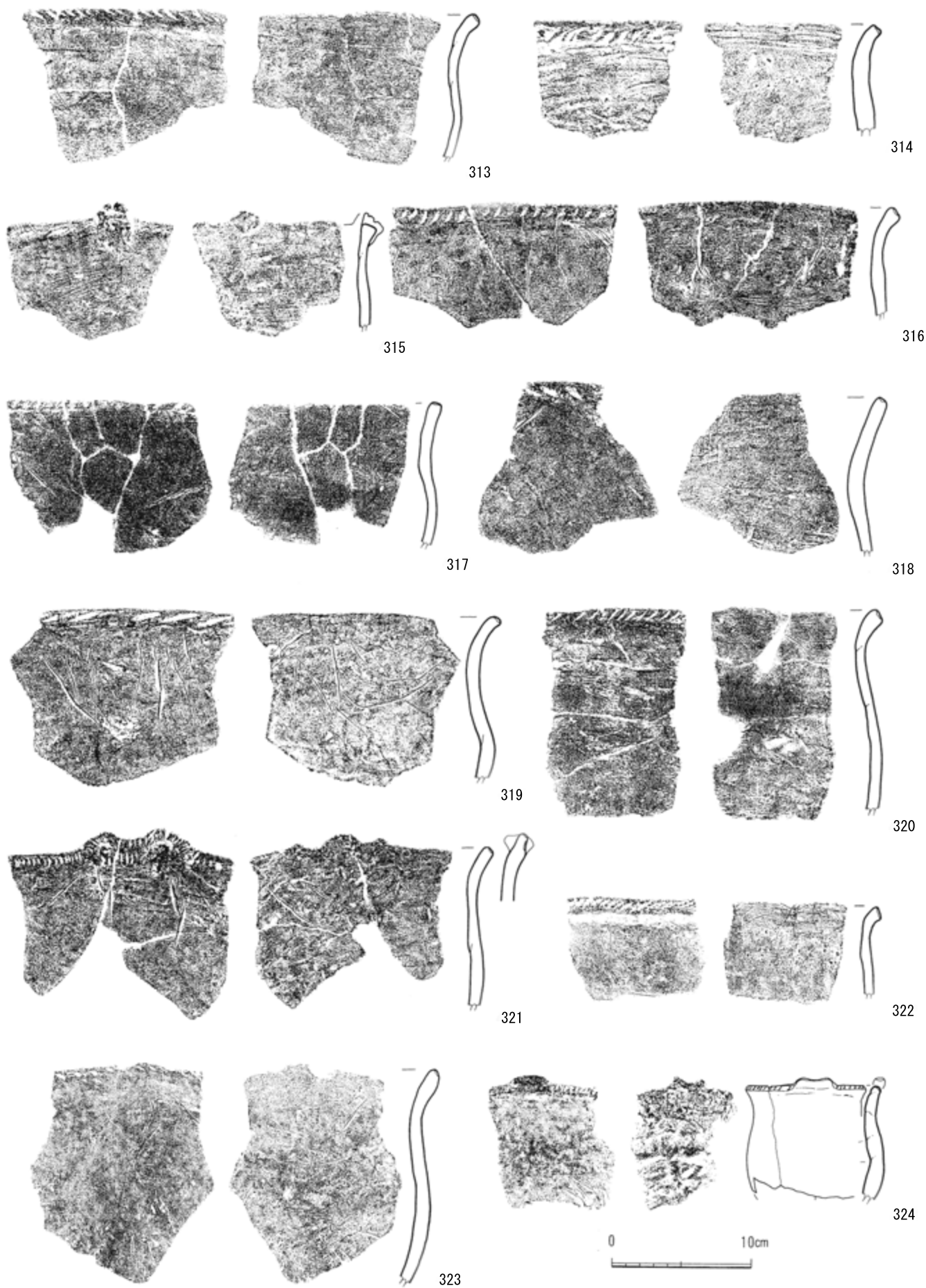


図20 縄文土器 (19)

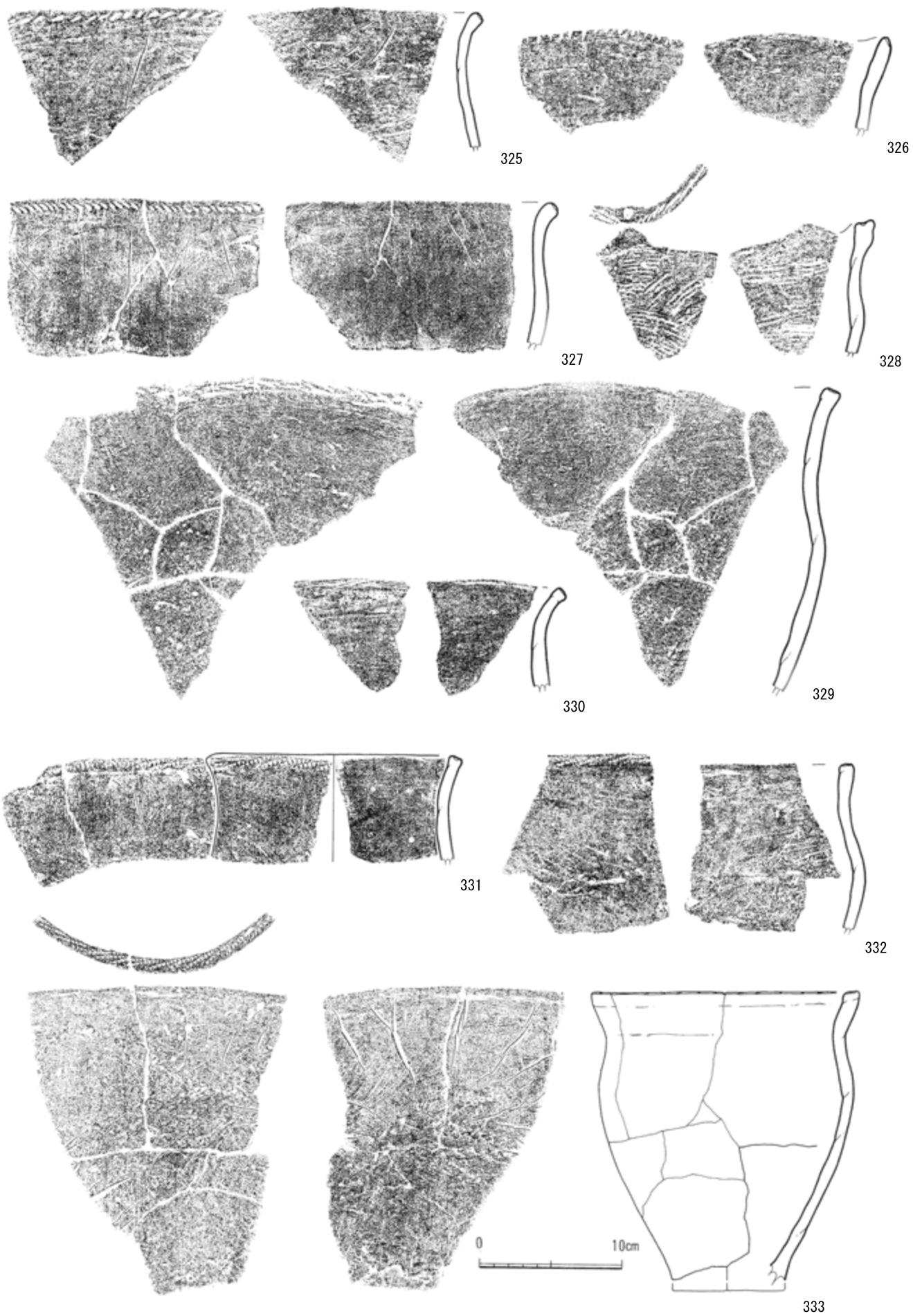


図21 縄文土器 (20)

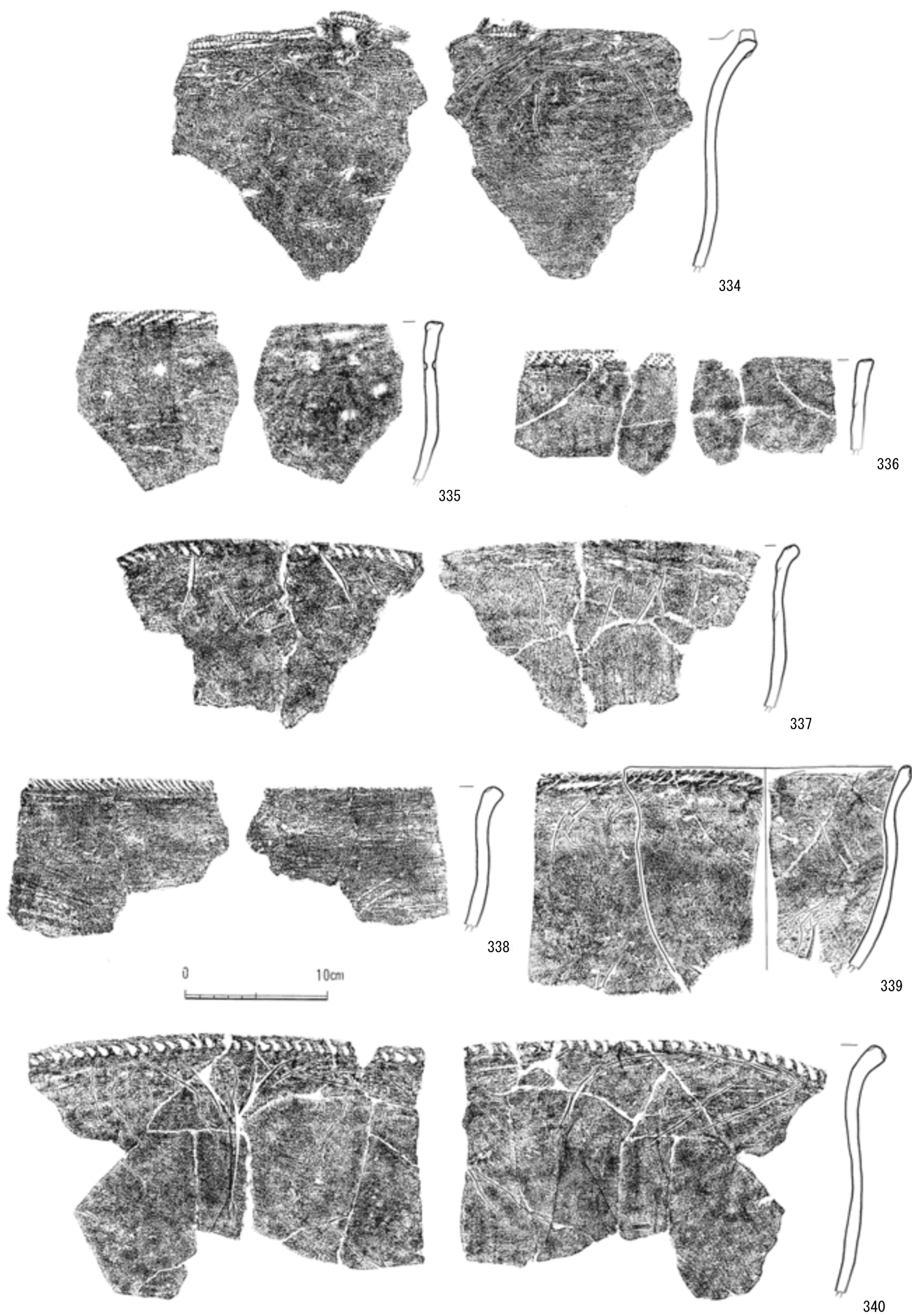


図22 縄文土器 (21)

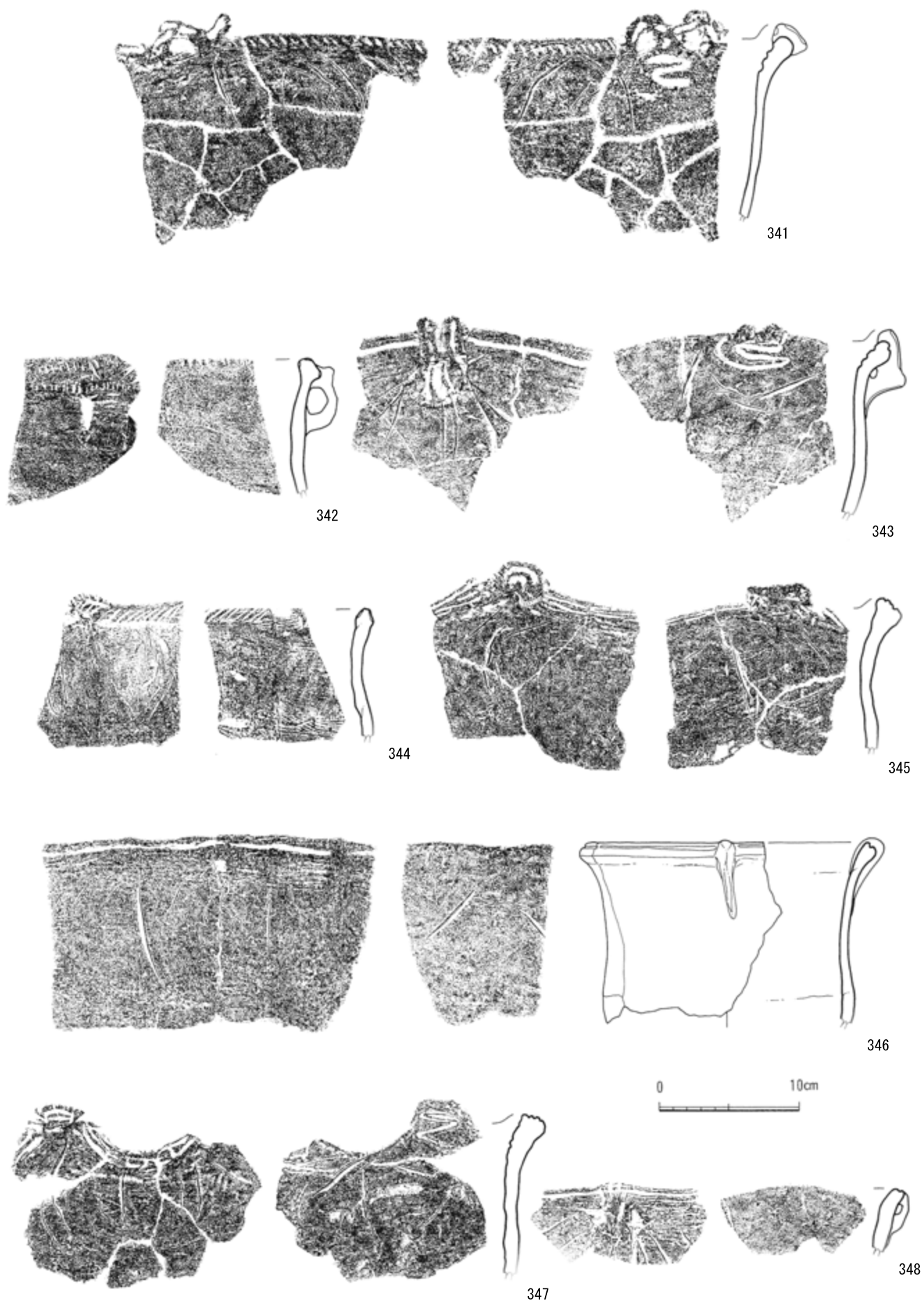


図23 縄文土器 (22)

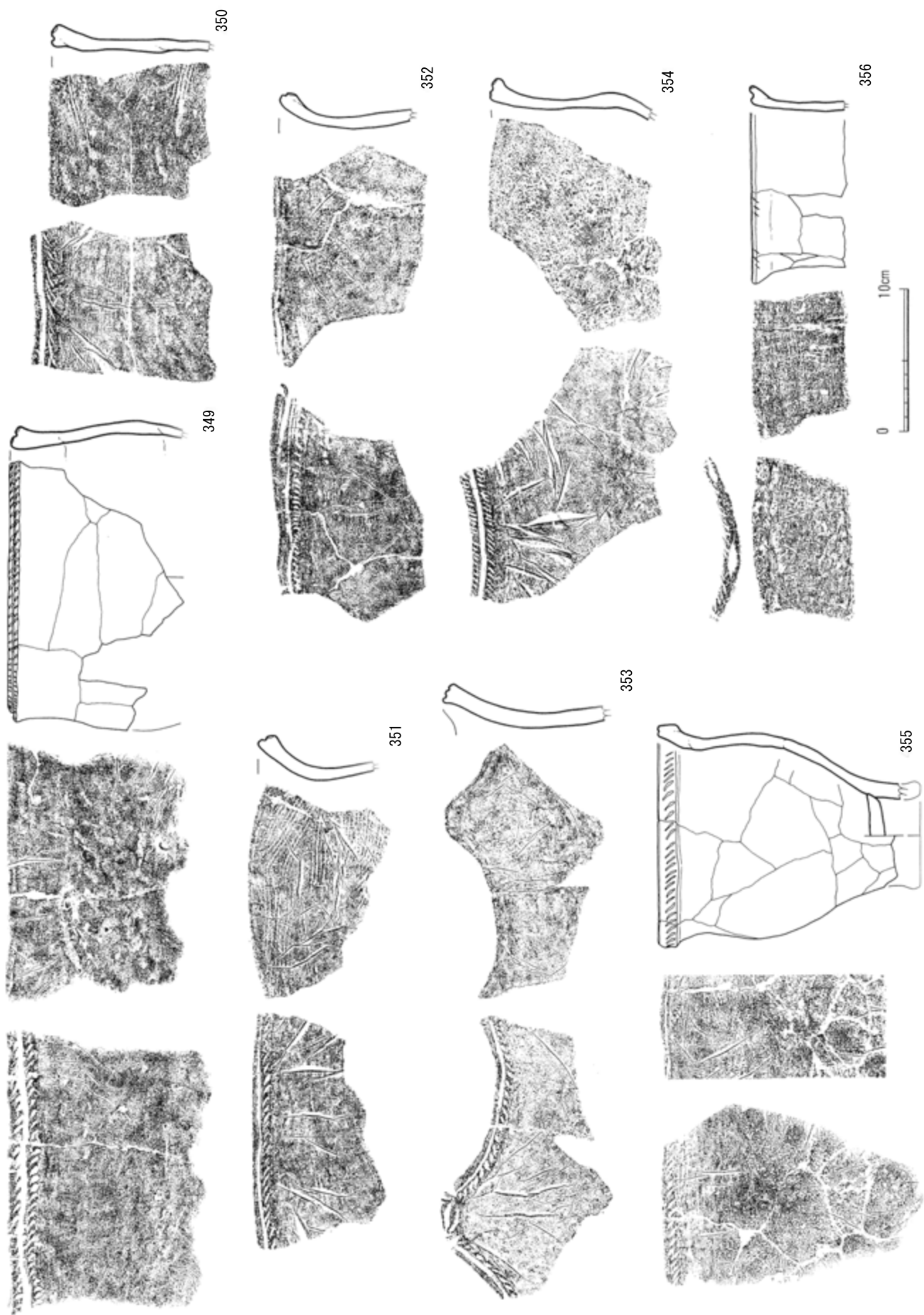


図24 縄文土器 (23)

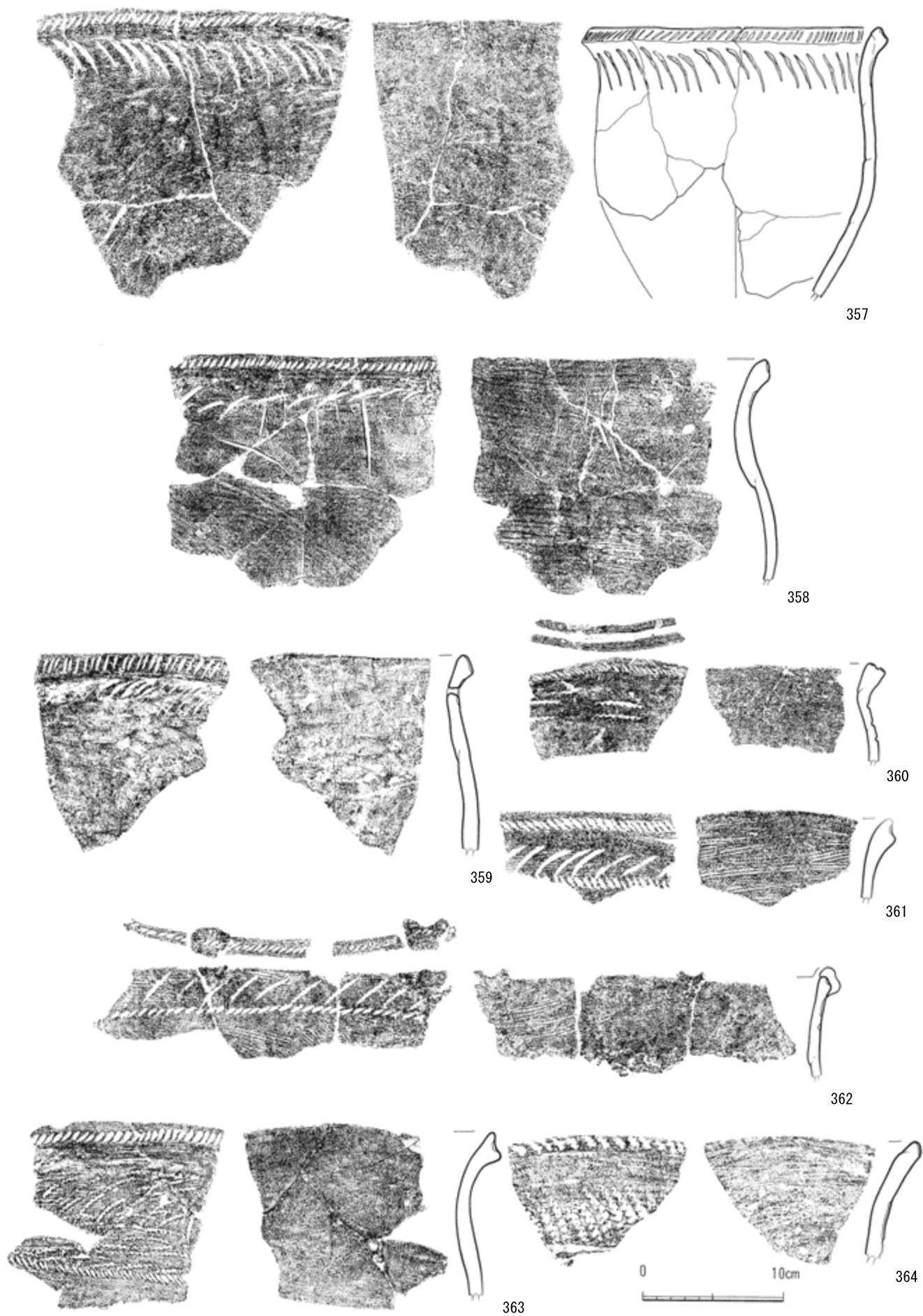
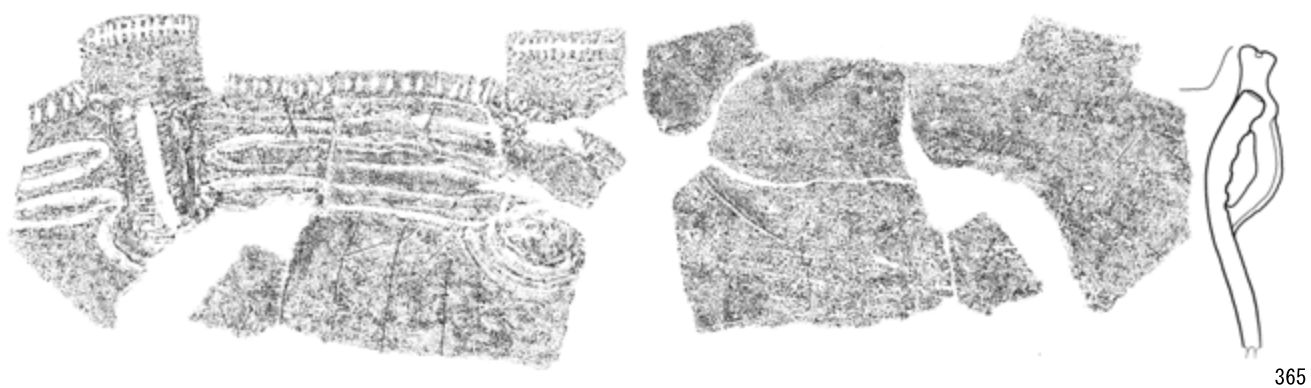
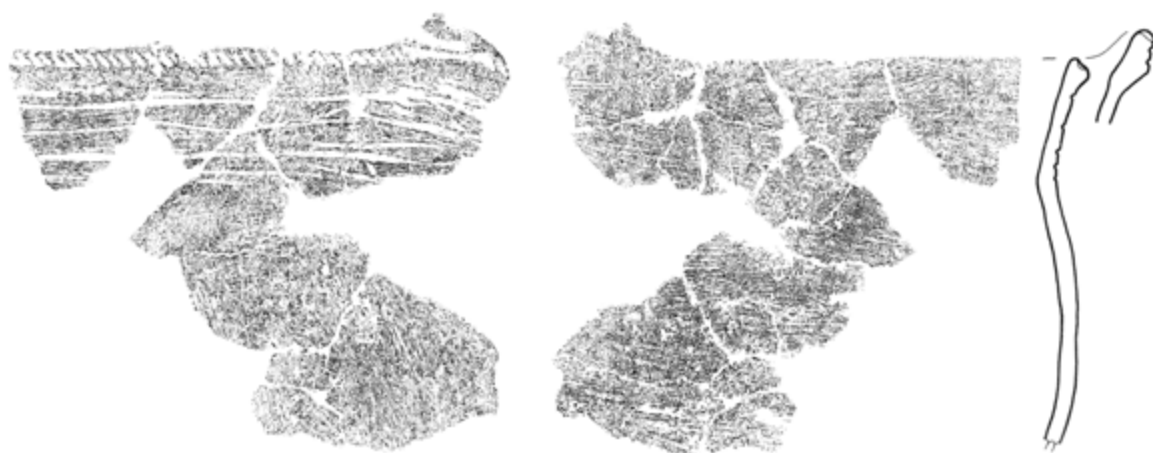


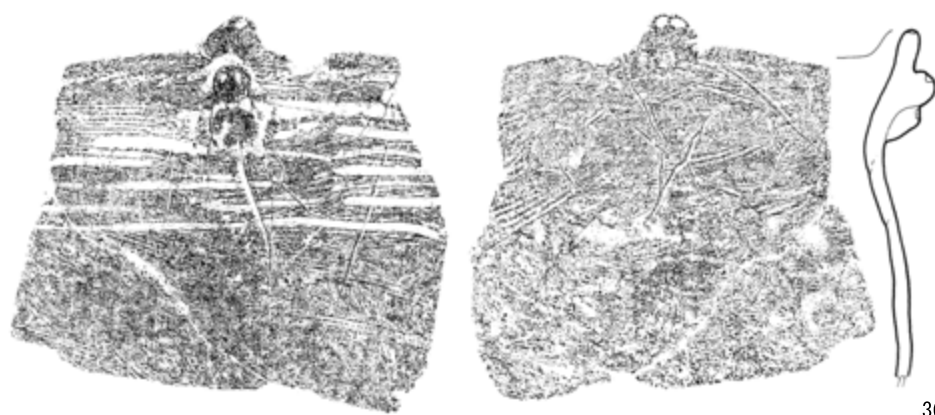
図25 縄文土器 (24)



365



366



367



369

368

図26 縄文土器 (25)

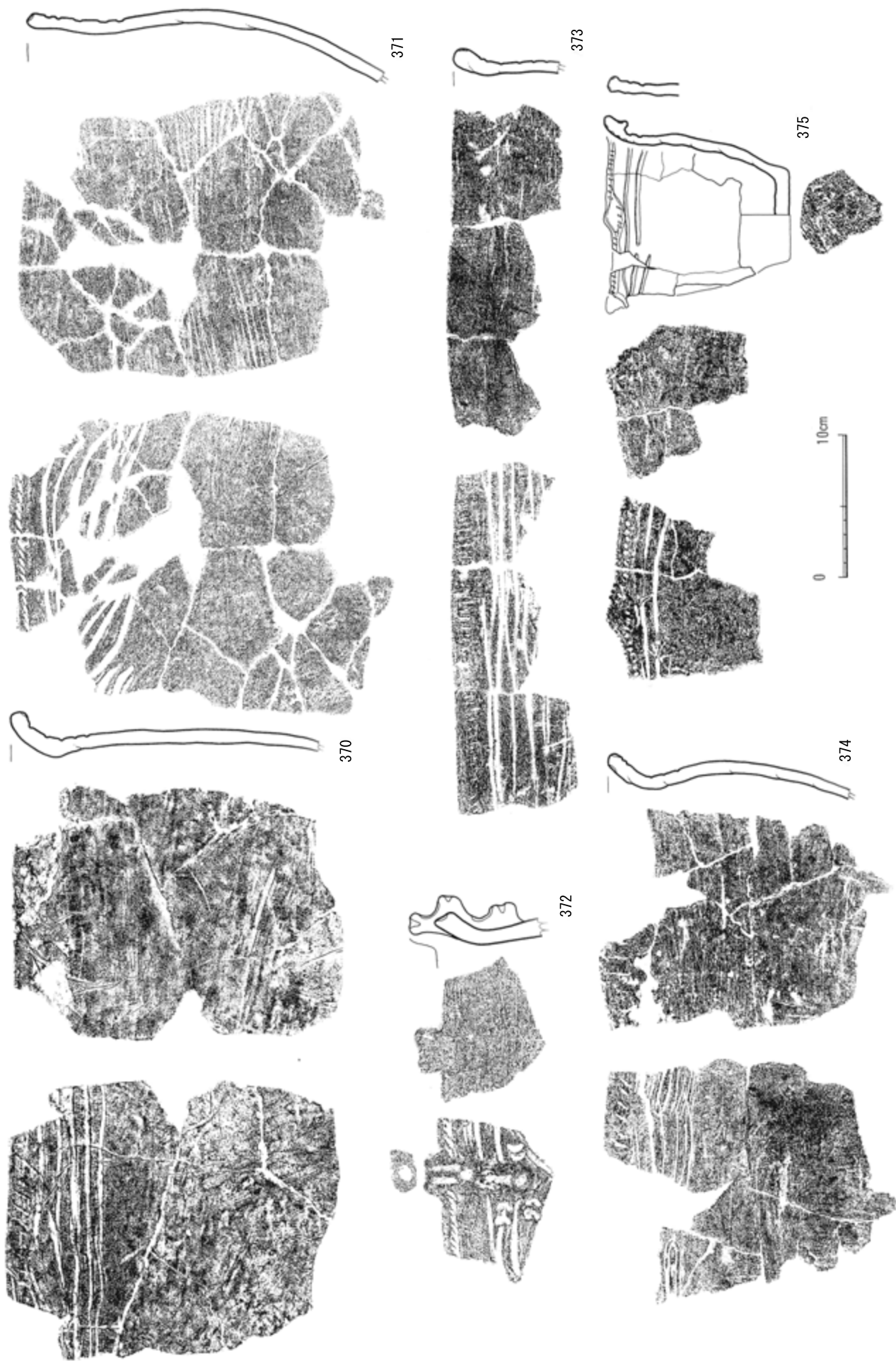


図27 縄文土器 (26)

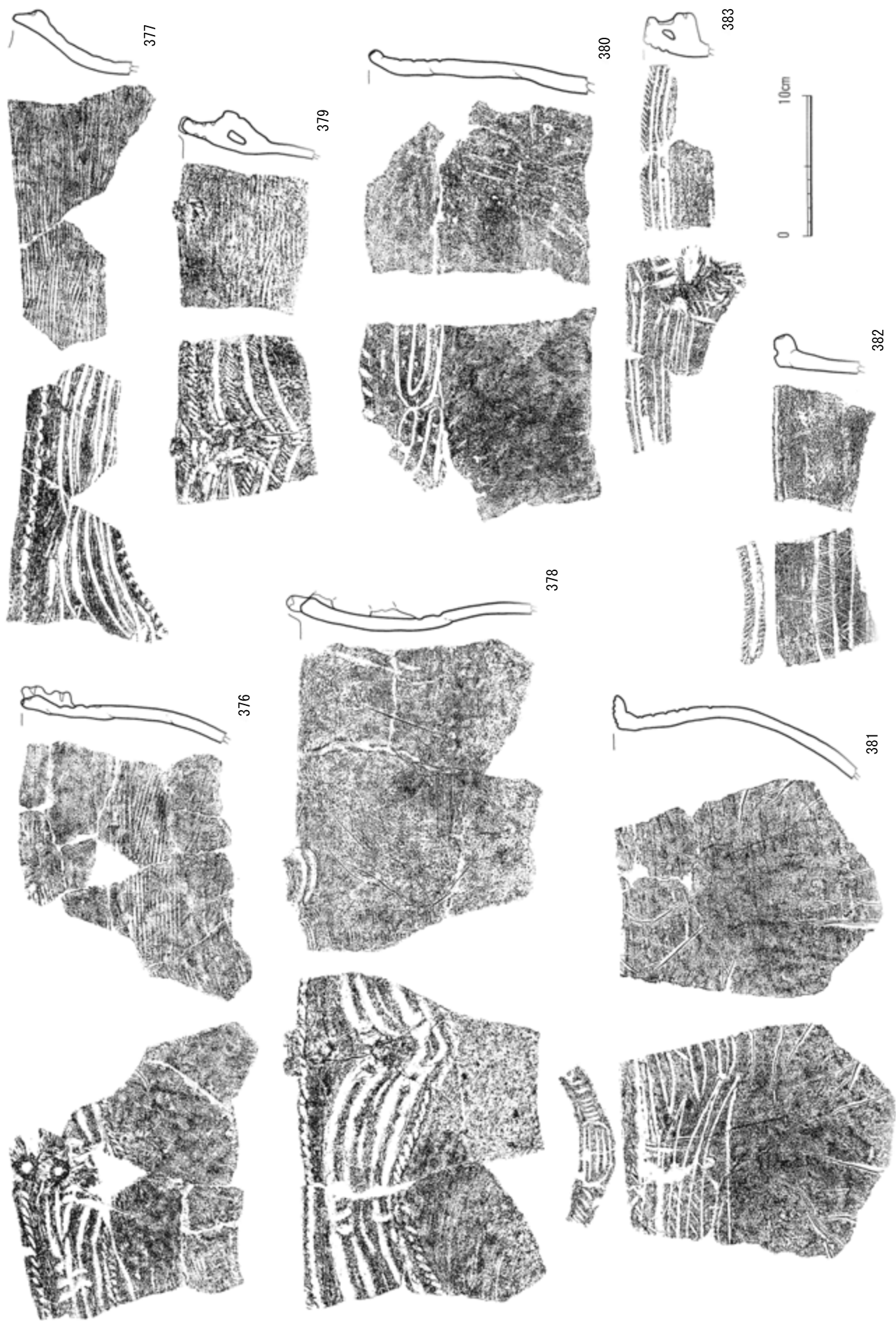


図28 縄文土器 (27)

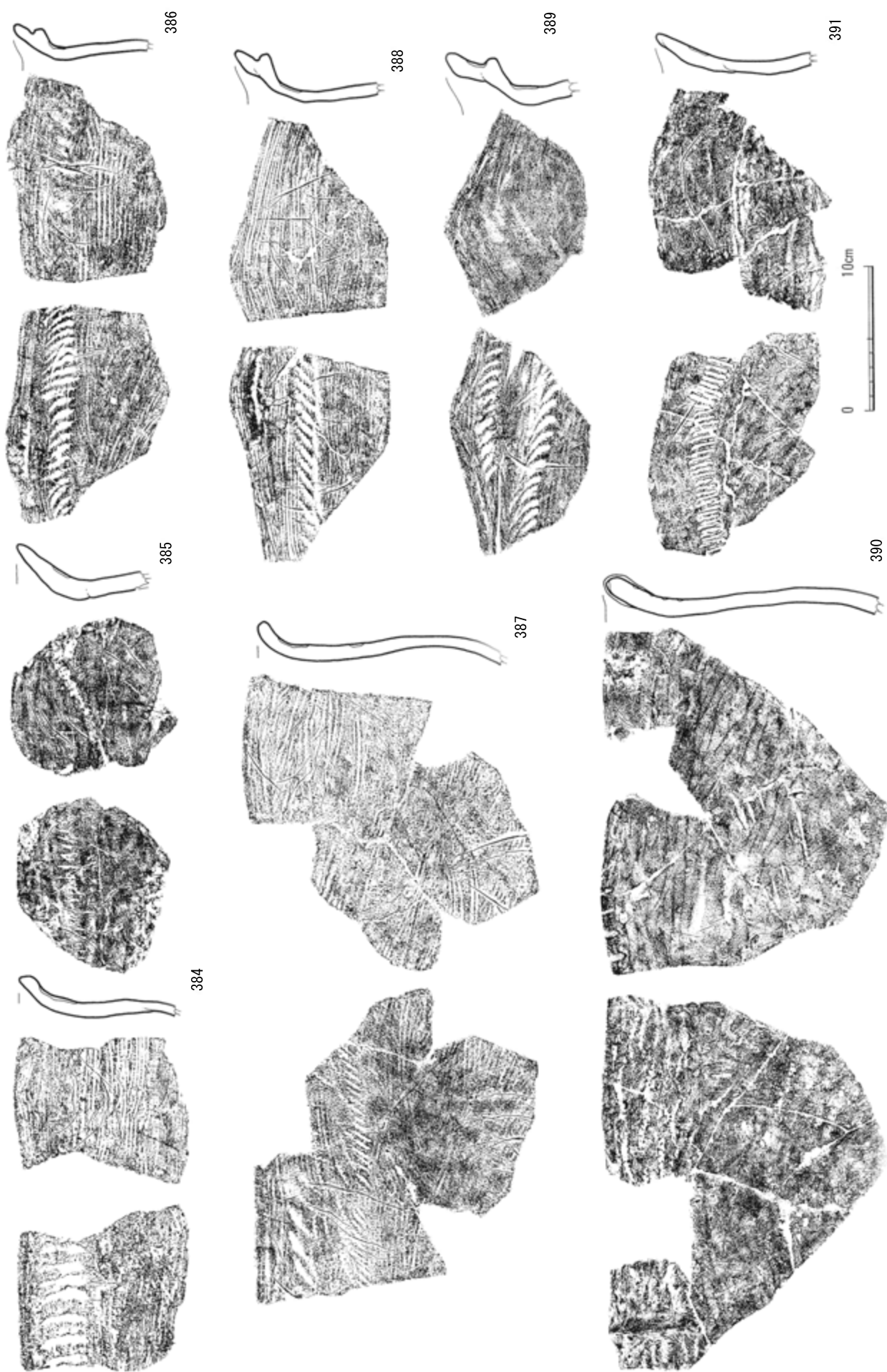


图29 縄文土器 (28)

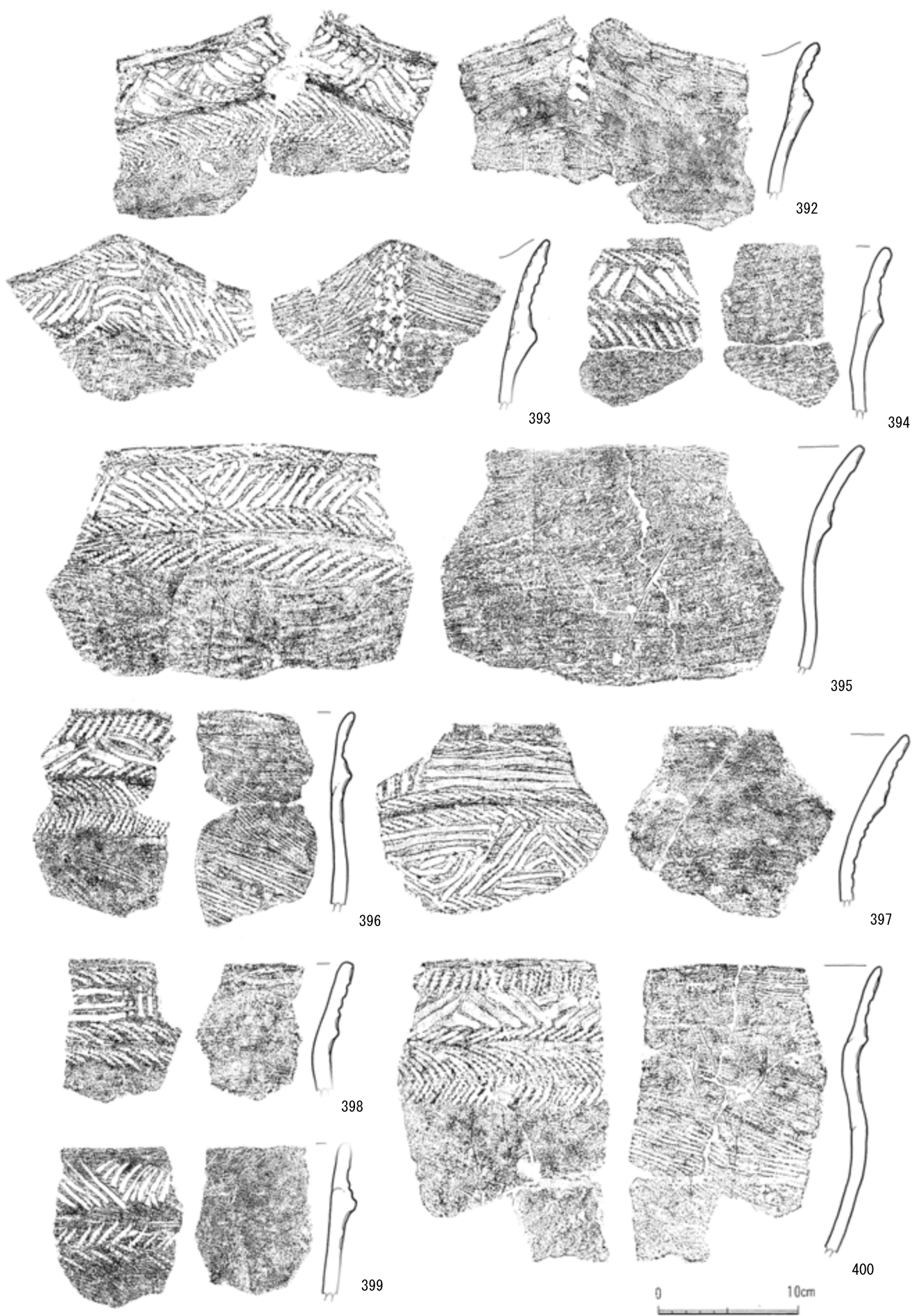


図30 縄文土器 (29)

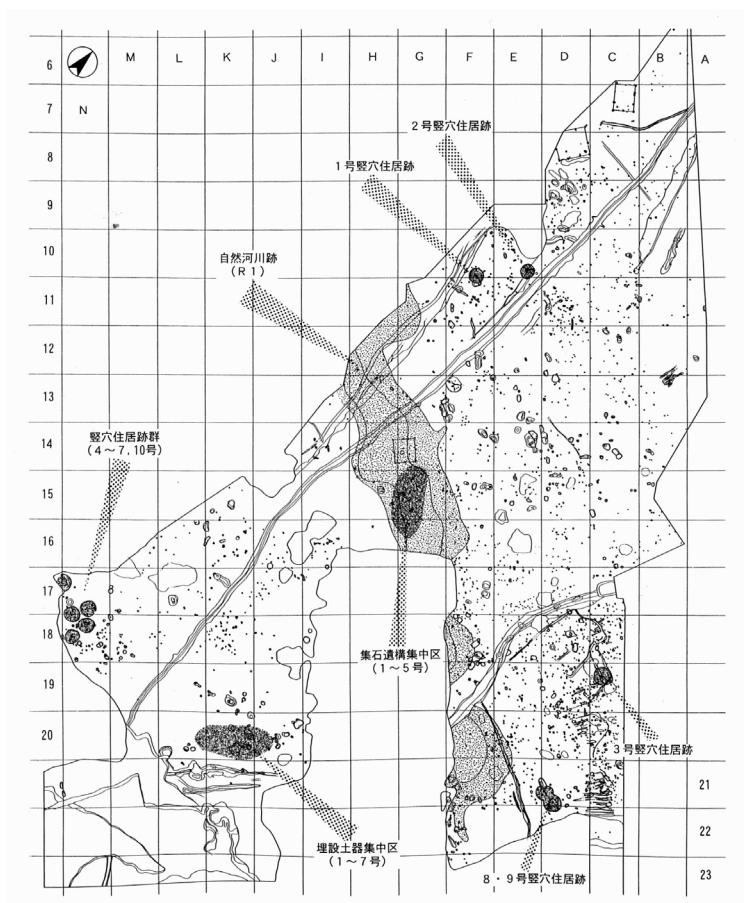


図31 干迫遺跡の遺構配置図（文献1より）
1グリッド：10×10m

市来式土器

6	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A
7															
8															
9															
10										1	1				
11								15	6						
12								77	21		1				
13						2	339	15	1						
14							149	133		2					
15							26	219	3	1					
16							2	25	13		1				
17	24									1	2		2		
18										25	7	15			
19		2								12	84	10			
20			1							110	38	6			
21	5	2			2					34	12	8			
22	17	87	63	1	76					4		10			
23	18	1	17	2	8				2						
24															

市来式土器：草野タイプ

6	O	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A
7															
8															
9															
10															
11								1							
12								9	2						
13							1	37	3						
14									4		1				
15									27						
16									6	1					
17	1														
18										1	1	5			
19											18				
20										10	4	1			
21										2					
22	1	8				8						1			
23	6	1			1	2									
24															

1グリッド：10×10m

図32 型式ごとの出土分布状況（太字数値は実測図掲載点数，網掛けはベスト5）

表 1 出土遺物観察表(1)

埴 園	番 号	種 類	類 別	型 式	器 種	部 位	出 土 区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		状態	胎土								焼 成	備 考
											内面	外面		石英	長石	角閃	金雲	白粒	茶粒	火G	他		
2	173	縄文土器	III2	市来	深鉢	口縁	21F37R1	37322			黒茶褐色		密	○	○				○			良	
	174	"	"	"	"	"	19E	VII	—		暗茶褐色	明茶褐色	密	○	○					W		良	内：スス付着
	175	"	"	"	"	口～胴	15G31R1	28227			明茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○		◎	◎				普	
	176	"	"	"	"	"	16G1R1	28496			淡茶褐色		密	○	○					W		良	
	177	"	"	"	"	口縁	22O9R2	38435			明茶褐色		密					○		W		良	外：Fe
	178	"	"	"	"	"	20F28R1	43172			淡褐色	淡茶褐色	密	○	○	○	○	○	○			普	外：Mn
	179	"	"	"	"	"	15G9R1	26583			暗茶褐色	淡茶褐色	砂多		○				○			普	内：Fe
	180	"	"	"	"	"	15G49R1	27717			暗茶褐色	明茶褐色	密					○	○			良	内：Mn
	181	"	"	"	"	口～胴	13H	V	22818	12.68	暗褐色	淡黄茶褐色	砂粒		○	○		○	○			普	内：Fe
	182	"	"	"	"	口縁	15GR1	—			明茶褐色		砂多		○	○		○	○			粗	
	183	"	"	"	"	"	16GR1	—			明茶褐色		砂多	○	○	○		○	○			普	
	184	"	"	"	"	"	13HR1	—			明茶褐色		砂多	○		○		○	○			黒粗	
	185	"	"	"	"	"	16F	V	23041	12.94	淡褐色	明茶褐色	砂多	○		○		○	◎		ob?	普	
3	186	"	"	"	"	"	12GR1	—			淡黄茶褐色	明褐色	砂多		○	○	○	○				普	内外：Mn
	187	"	"	"	"	"	13HR1	—			暗茶褐色	暗褐色	砂多		○	○	◎	◎				良	
	188	"	"	"	"	口～胴	20F46R1	40903			黒褐色	暗茶褐色	砂多	○	○	○		○	○			黒粗	
	189	"	"	"	"	口縁	14G49R1	26291			黒褐色	明茶褐色	密		◎	○				W		良	内：Mn・Fe
	190	"	"	"	"	"	14E	VII	41180	13.73	淡褐色		砂多		○	○		○	○			黒普	外：Fe
	191	"	"	"	"	"	15G14R1	28252			明茶褐色		砂多	○	◎			○		W		良	
	192	"	"	"	"	"	15G37R1	27437			淡褐色		砂粒	○	○			○				良	
	193	"	"	"	"	"	14G	V	22295	12.93	明茶褐色	淡茶褐色	密	○	○	○				W		良	内：Fe
	194	"	"	"	"	"	21D80R2	37472			黒褐色	淡黄茶褐色	砂多		○	○			○			普	内外：Fe・Mn
	195	"	"	"	"	口～胴	19E	VII	41672	13.52	淡茶褐色		砂多	○	○	○			○			普	外：Mn
	196	"	"	"	"	口縁	15GR1	—			淡茶褐色	淡褐色	砂粒	○	○		◎	○				黒良	内：Mn
	197	"	"	"	"	"	12HR1	—			明茶褐色		砂多		○	○		○	○			良	
4	198	"	"	"	"	口～胴	12G	V	6374	12.90	明黄茶褐色	明茶褐色	砂多		○	○		○				黒普	外：Fe, №200と同一個体
	199	"	"	"	"	"	16GR1	—			黒茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	◎			○				普	外：Fe
	200	"	"	"	"	"	12G	V	6374	12.90	淡茶褐色	明茶褐色	砂多		○	○		○				黒普	外：Fe, №198と同一個体
	201	"	"	"	"	口縁	16G27R1	26012			黒褐色		砂多		○			○	○			普	外：Fe
	202	"	"	"	"	"	16G24R1	26736			明茶褐色		砂粒	○	○			○	◎			黒良	№207と同一個体か？
	203	"	"	"	"	"	16GR1	—			淡黄茶褐色	暗褐色	砂粒	○	○	○		○	○			黒普	
	204	"	"	"	"	"	19E	VII	41167	13.62	明茶褐色	黒褐色	砂多		◎		◎	◎				普	外：Mn
	205	"	"	"	"	"	12H24R1	28034			淡黒褐色	淡茶褐色	砂多	○	○			◎	○			黒普	
	206	"	"	"	"	口～胴	22N36R2	38213			暗茶褐色		砂粒	○	○	○		○				黒普	内：Mn, 外：Fe
	207	"	"	"	"	"	16G22R1	28475			明茶褐色	淡黄茶褐色	砂粒	○	○			○	◎			黒良	№202と同一個体か？
	208	"	"	"	"	口縁	22NR2	—			明茶褐色		砂多	○	○			◎				普	内：Mn, 外：Fe
	209	"	"	"	"	"	12H	V	—		淡黄茶褐色		密	○	○	○		○	○			普	内外：Fe多量
5	210	"	"	"	"	"	15G82R1	27751			淡褐色	淡黒褐色	砂多		○			○				黒普	外：Fe, 一部加工の可有
	211	"	"	"	"	口縁	15G57R1	28201			淡黄茶褐色	淡黒茶褐色	密	○	○	○				W		黒良	
	212	"	"	"	"	口～胴	15G80R1	27745			黒褐色	暗茶褐色	砂多		○	○		◎	○			黒普	内：Mn
	213	"	"	"	"	口縁	21D	VI	39523	13.54	暗黄茶褐色	明茶褐色	砂多	○	○			◎	○			普	内：Mn
	214	"	"	"	"	"	13HR1	—			暗褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	○		○	○			黒良	
	215	"	"	"	"	口～胴	13HR2	—			暗褐色		砂多		○		◎	○				良	
	216	"	"	"	"	"	13H24R1	26793			淡褐色	暗褐色	砂多		○	○		○				黒普	内：Fe, 外：Mn
	217	"	"	"	"	口縁	22N56R2	38673			黒褐色		密						○			良	内：Mn, 外：Fe・Mn
	218	"	"	"	"	"	22N67R2	38683			明茶褐色	暗茶褐色	砂多		○		◎	◎				良	外：Mn
	219	"	"	"	"	"	12G93R1	27343			淡黄茶褐色	暗褐色	砂粒	○	◎		○	○				普	内：Mn, 外：Fe
	220	"	"	"	"	"	13H36R1	28605			淡黄茶褐色		砂多	○	○				◎	W		良	外：Mn
6	221	"	"	"	"	"	15GR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○			○	○	B		黒良	
	222	"	"	"	"	"	13HR1	—			淡褐色	暗褐色	砂粒	○	○	○		○				良	
	223	"	"	"	"	"	13HR1	—			淡茶褐色	暗茶褐色	砂粒	◎	◎			○	○	W		黒良	
	224	"	"	"	"	口～胴	22K	V	34655	11.93	明黄茶褐色		砂多	○	○		○			W		黒普	内外：Fe
	225	"	"	"	"	口縁	unknown	—			暗褐色	明茶褐色	砂粒	○	○			○				黒良	内：Mn, 外：Fe
	226	"	"	"	"	"	14HR1	—			明茶褐色	暗褐色	砂多		○		◎	○		B		黒良	
	227	"	"	"	"	口～胴	22K	V	34735	11.92	暗黄茶褐色	暗褐色	砂多	○	○		○	○				黒良	内外：Fe
	228	"	"	"	"	口縁	18F94R1	33910			明茶褐色		砂多	○	○			○	○			黒良	
	229	"	"	"	"	口～胴	19E	VI	41227	13.61	淡茶褐色	暗茶褐色	砂多		○	○	◎	◎				黒良	外：Mn
	230	"	"	"	"	口縁	13H94R1	20842			淡茶褐色		砂多		○	○	◎	○				良	
	231	"	"	"	"	"	19E	VII	41148	13.69	淡褐色	暗茶褐色	砂多		○		◎	◎				良	外：Fe
	232	"	"	"	"	口～胴	20E	VII	41648	13.50	淡茶褐色		砂多	○	○		◎	◎				黒良	外：Mn・スス付着

表2 出土遺物観察表(2)

埴 園	番 号	種類	類別	型式	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		胎土										焼 成	備考
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	金雲	白粒	茶粒	火G	他			
7	233	縄文土器	III2	市来	深鉢	口縁	14GR1	—			明茶褐色		砂粒	◎			○		○			黒	良	内外：Mn少量
	234	〃	〃	〃	〃	〃	23O25R2	38731			淡褐色		砂多	○	○	○		○			黒	良	外：Mn	
	235	〃	〃	〃	〃	口～胴	15GR1	—			明茶褐色		砂多	○	○			○	○		黒	普		
	236	〃	〃	〃	〃	口縁	13HR1	—			明茶褐色	黒褐色	砂多	○	○		◎	◎			良	加工の可有		
	237	〃	〃	〃	〃	口～胴	13HR1	—			淡茶褐色	暗茶褐色	密	○	○			○		WB	黒	良	外：スス付着	
8	238	〃	〃	〃	〃	口縁	18E	VI	33551	13.50	暗茶褐色		砂多	○	○		◎	◎			良	内：Fe		
	239	〃	〃	〃	〃	口～胴	21F2R1	37414			明茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○		○	○	○		普	外：Mn・スス付着		
	240	〃	〃	〃	〃	口縁	15G73R1	27741			淡褐色	淡黄茶褐色	砂粒	○	○	○			◎		黒	良	外：Mn・Fe	
	241	〃	〃	〃	〃	口縁	15G7R1	27416			明褐色	暗褐色	砂多		○		◎	◎			良			
	242	〃	〃	〃	〃	〃	15G	V	21894	12.67	明褐色	明茶褐色	砂多	○	○	○	○	○			良			
	243	〃	〃	〃	〃	〃	12G93R1	27343			明褐色	暗茶褐色	砂多	○	○	○		○			良	外：Fe・Mn		
	244	〃	〃	〃	〃	〃	22M暗茶褐色	—			明褐色	淡茶褐色	密	○	○						黒	良	外：Fe	
	245	〃	〃	〃	〃	〃	16G43R1	26391			暗褐色	明茶褐色	密	○	○	○					黒	良		
	246	〃	〃	〃	〃	〃	13H27R1	27904			淡黄茶褐色		密		○	○			○		黒	良		
	247	〃	〃	〃	〃	〃	12H48R1	28696			明茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○			○		WB		普		
	248	〃	〃	〃	〃	〃	16G55R1	26134			淡黄茶褐色	暗褐色	砂多	○	○			○	○	W	黒	良	内：赤色顔料？	
9	249	〃	〃	〃	〃	〃	22M暗茶褐色	—			暗茶褐色		密	◎	○	○		○			黒	良	内：Fe, 外：Mn	
	250	〃	〃	〃	〃	〃	15G36R1	28221			明茶褐色	暗茶褐色	砂多		○		◎	○			良			
	251	〃	〃	〃	〃	〃	15G93R1	28163			明茶褐色	暗茶褐色	砂多	◎	○					W	良	外：Mn		
	252	〃	〃	〃	〃	〃	12H	V	18315	12.81	明茶褐色	暗茶褐色	密								普	内外：Fe多（器面が見えない）		
	253	〃	〃	〃	〃	口～胴	15GR1	—	13.47		明茶褐色	淡茶褐色	砂多	◎	○	○	◎	◎			黒	普		
	254	〃	〃	〃	〃	口縁	18E	VI	32651			明茶褐色	暗黒茶褐色	砂多		○		◎	◎	○		普	内：Mn, 外：スス少量付着	
10	255	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1	—			明淡茶褐色		砂多	○	○	○	◎	◎			黒	良	一部加工の可有	
	256	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1	—			暗茶褐色	暗黄茶褐色	砂多		○			○	○		黒	良		
	257	〃	〃	〃	〃	〃	15GR1	—			淡茶褐色		砂多				◎	◎			黒	良		
	258	〃	〃	〃	〃	〃	23KR2	—			淡茶褐色	明茶褐色	砂多		○		◎	○			黒	良		
	259	〃	〃	〃	〃	〃	13H23R1	26446			淡褐色	明茶褐色	砂多		○	○	◎	◎			黒	普	外：Mn	
	260	〃	〃	〃	〃	口～胴	14GR1	—			淡茶褐色		砂粒		○		◎	◎			黒	良		
11	261	〃	〃	〃	〃	口縁	12H60R1	28700			淡茶褐色	暗褐色	砂多	○	○		◎	○			黒	良		
	262	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1	—			淡茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○		◎	○		B	黒	良		
	263	〃	〃	〃	〃	〃	12H24R1	27359			暗茶褐色	明茶褐色	密	○		◎		○			黒	良	内：Mn, 外：スス少量付着	
	264	〃	〃	〃	〃	〃	14GR1	—			明茶褐色		砂多	○	◎		◎	◎			黒	普	一部加工の可有	
	265	〃	〃	〃	〃	〃	16G82R1	28422			明茶褐色	暗褐色	砂多		○		○	◎			良	一部加工の可有		
	266	〃	〃	〃	〃	〃	14HR1	—			黒褐色	淡褐色	砂粒		○		◎	○			黒	良	内：Fe・スス付着	
	267	〃	〃	〃	〃	口～胴	unknown	—			暗茶褐色		砂多		○		◎	◎	◎		普			
	268	〃	〃	〃	〃	口縁	13HR1	—			黒褐色	暗茶褐色	砂多				◎	○			良	内：スス少量付着		
	269	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F56R1	38830			淡褐色	淡茶褐色	砂粒	○	○		◎	◎			黒	良		
12	270	〃	III3	〃	〃	完形	20F28R1	43169			黒褐色	明茶褐色	密	○	○	○		○			良	網代底？		
	271	〃	〃	〃	〃	完形	20D	VI	40228	13.54	暗茶褐色		砂多	○	○	○		◎			粗	外：Mn		
	272	〃	〃	〃	〃	口～胴	13I3R1	26847			淡褐色		砂多		○			◎	○		普	外：Mn少量		
13	273	〃	〃	〃	〃	〃	21F12R1	37252			淡褐色	暗褐色	砂多			○		○			黒	普	外：Mn	
	274	〃	〃	〃	〃	〃	18D	VI	33021	13.59	淡黄茶褐色	明茶褐色	砂粒		○	◎					黒	普	補修孔有, 外：Fe	
	275	〃	〃	〃	〃	完形	unknown	—			暗茶褐色	明茶褐色	密		○	○				W	良			
	276	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F54R1	40939			淡黄茶褐色	淡茶褐色	砂粒		○	○		○		WB	黒	良		
14	277	〃	〃	〃	〃	口縁	13HR1	—			淡黄茶褐色	淡茶褐色	密		○	○				W	黒	良	内外：Mn少量	
	278	〃	〃	〃	〃	口～胴	22N87R2	38698			暗茶褐色		密	○	○	○					黒	普	内外：Fe・Mn	
	279	〃	〃	〃	〃	〃	22N46R2	38658			暗褐色		砂粒	○	○			○			黒	普	外：Mn	
	280	〃	〃	〃	〃	〃	20F56R1	38830			暗茶褐色		砂多	○	○	○		◎			黒	普	外：Mn少量	
	281	〃	〃	〃	〃	〃	12HR1	—			淡茶褐色		砂多	○	○	○		○			黒	良		
15	282	〃	〃	〃	〃	完形	13I5R1	27274			淡褐色		密		○			○			良	外：Mn少量		
	283	〃	〃	〃	〃	口～胴	14G	V	22530	12.98	暗褐色	暗茶褐色	密	○	○	○		○			黒	良	外：Fe	
	284	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VII	41438	13.69	淡褐色	暗褐色	密	○	○	◎		○		WB	黒	普	外：Mn	
	285	〃	〃	〃	〃	口～胴	22K74R2	38603			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○			○		W	良	内：Mn少量, 外：Mn		
16	286	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VII	41750	13.38	淡黄茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○		○			黒	普	外：Mn少量	
	287	〃	〃	〃	〃	〃	13H25R1	26792			淡灰褐色		砂多		○	○		◎	○		黒	普	外：Mn・スス付着	
	288	〃	〃	〃	〃	〃	18D	VI	33052	13.51	淡黄茶褐色	淡明茶褐色	密	○	○	○		○		W	黒	良	内：Mn	
	289	〃	〃	〃	〃	〃	16F91R1	26713			淡褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○		○	○		良			
	290	〃	〃	〃	〃	〃	18D	VI	32919	13.59	黒茶褐色	明茶褐色	砂多		○			○	○		良	内：Fe少量		
17	291	〃	III4	草野	〃	〃	22K48R2	38579			暗茶褐色		密	○	○					WB	良	内：Mn		
	292	〃	〃	〃	〃	〃	20F9R1	43132			暗茶褐色	淡茶褐色	砂多		○	○	○	○			黒	良		
	293	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VII	41360	13.59	淡褐色	暗褐色	密	○				○			黒	良	内：Mn	

表3 出土遺物観察表(3)

採 取 地	番 号	種 類	類 別	型 式	器 種	部 位	出 土 区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		胎土										焼 成	備 考	
											内面	外面	状態	石英	長石	角閃	金雲	白粒	茶粒	火G	他				
17	294	縄文土器	III4	草野	深鉢	口～脚	15G86R1		28171			淡茶褐色		密	○	○		○					黒	良	外：Mn
	295	〃	〃	〃	〃	〃	18D	VI	32948	13.56	黒褐色	暗茶褐色	砂粒		○			○					良	外：Mn・Fe，内：Fe少量	
	296	〃	〃	〃	〃	〃	13H7R1		27887		淡茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○	○	◎	○					普	外：Mn少量	
	297	〃	〃	〃	〃	〃	22N57R2		38672		黒褐色	明茶褐色	密	○	○							黒	良	外：Mn多量，口縁近赤顔料	
18		〃	〃	〃	〃	〃	22N67R2		38683		黒褐色	明茶褐色	密	○	○							黒	良	外：Mn多量，口縁近赤顔料	
	298	〃	〃	〃	〃	完形	19E	VII	41445	13.62	暗茶褐色	明茶褐色	砂多		○	○		◎				黒	普	外：Mn少量	
	299	〃	〃	〃	〃	口～胴	22KR2	—			淡茶褐色		密	○	○	○						黒	普	内外：Mn	
	300	〃	〃	〃	〃	〃	15G35R1		28222		淡褐色	淡茶褐色	砂多		○	○		○	○			黒	普	外：Mn	
	301	〃	〃	〃	〃	〃	13H5R1		27889		淡黄褐色	黒茶褐色	砂多			○		○	○			黒	良	外：Mn	
	302	〃	〃	〃	〃	〃	16G66R1		28435		明褐色	暗褐色	砂多	○		○		○					良	松山式の可有	
	303	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VI	41276	13.51	明黄茶褐色		密		○	○						黒	良	内：Mn，外：貝庄?，赤顔料?	
19	304	〃	〃	〃	〃	〃	15G67R1		26967		暗褐色	淡褐色	密	○	○	○				W		黒	良	内外：Fe	
	305	〃	〃	〃	〃	口縁	unknown	—			明黄茶褐色		密			○	○	○					良	内：Fe	
	306	〃	〃	〃	〃	口～胴	17N	谷	—		黒褐色	淡茶褐色	砂多		○				◎			黒	普	内：Fe	
	307	〃	〃	〃	〃	〃	unknown	—			淡褐色		密	○	○							黒	良	岩崎上層式の可有，浅沈線?	
	308	〃	〃	〃	〃	完形	13HR1	—			明茶褐色	淡茶褐色	砂多		○	○		○	○			黒	良		
	309	〃	〃	〃	〃	口～胴	19E	VII	41687	13.50	淡茶褐色	暗茶褐色	密	○	○							黒	良	外：Fe	
	310	〃	〃	〃	〃	口縁	20F39R1		43196		淡褐色		密		○	○	○					黒	良		
20	311	〃	〃	〃	〃	口～胴	13HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○			○				黒	良		
	312	〃	〃	〃	〃	〃	15G44R1		27720		黒褐色		砂粒	○	○	○	○	○					良	外：Mn少量	
	313	〃	〃	〃	〃	〃	23KR2		38797		黒褐色	黒茶褐色	砂多	○	○	○				W		良			
	314	〃	〃	〃	〃	口縁	23L黒褐色落ち	—			淡黄茶褐色		砂粒	○			◎	○				黒	良		
	315	〃	〃	〃	〃	〃	23O22R2		38456		黒褐色	暗黄茶褐色	密	○				○		W		良	内外：Fe		
	316	〃	〃	〃	〃	〃	14G35R1		26342		淡褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○			○			黒	普	外：Fe	
	317	〃	〃	〃	〃	口～胴	16G44R1		26122		暗茶褐色		砂粒	○	○			○		WB	黒	良	外：Mn		
	318	〃	〃	〃	〃	〃	21F13R1		37256		暗茶褐色	黒褐色	砂粒	○	○			○		WB	黒	良	内：Mn，外：スス少量付着		
	319	〃	〃	〃	〃	〃	12GR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○				WB	黒	良			
	320	〃	〃	〃	〃	〃	13H29R1		29597		淡褐色		密		○	◎		○				黒	良		
	321	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1	—			淡茶褐色	暗褐色	密	○	○		○	○		WB	黒	良	内外：Mn		
	322	〃	〃	〃	〃	口縁	19E	VII	41630	13.52	黒褐色	淡褐色	密	○	○					WB	黒	良	内：スス少量付着，外：Mn		
	323	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F56R1		38930		黒茶褐色	淡茶褐色	密	○	○	○		◎		WB	黒	良	内：スス少量付着，外：Mn		
324	〃	〃	〃	〃	〃	15G93R1		27438		淡茶褐色		砂多		○			○				良	内外：Mn			
21	325	〃	〃	〃	〃	口縁	15G64R1		28189		明茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○		◎	○	WB	黒	良	外：Mn		
	326	〃	〃	〃	〃	〃	23N98?R2		38715		淡褐色	淡茶褐色	砂粒		○	○		○				良	内：Fe，外：Mn		
	327	〃	〃	〃	〃	口～胴	12HR1	—			暗茶褐色	明茶褐色	密		○	○				WB多	黒	良	内：スス付着，外：Mn		
	328	〃	〃	〃	〃	〃	23KR2	—			明茶褐色		砂粒	○	○	○	◎					黒	良		
	329	〃	〃	〃	〃	〃	18D	VI	32947	13.60	暗茶褐色		砂粒	○	○			○		WB多	普	内：Fe・Mn			
	330	〃	〃	〃	〃	口縁	12HR1	—			淡褐色	暗褐色	密	○	○			○		WB多	黒	良	内：Mn少量		
	331	〃	〃	〃	〃	〃	22N48R2		38663		暗黄茶褐色	暗茶褐色	密	○	○	○					黒	良	内：Mn，外：Fe少量		
	332	〃	〃	〃	〃	口～胴	13H67R1		27953		淡褐色	明茶褐色	密	○		○			○	WB多	良	外：Mn			
	333	〃	〃	〃	〃	口～底	15G21R1		27704		淡黄褐色		密	○	○	○		○		WB	黒	良	内：Mn		
22	334	〃	〃	〃	〃	口～胴	R1	—			淡褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○			○		WB多	良				
	335	〃	〃	〃	〃	〃	11HR1	—			淡褐色	淡茶褐色	密	○						WB多	黒	良			
	336	〃	〃	〃	〃	口縁	13H37R1		28604		暗褐色	明茶褐色	密			○				WB	良				
	337	〃	〃	〃	〃	口～胴	13H7R1		27887		黒褐色		砂多	○	○	○		○		WB	普	内：スス多量付着			
	338	〃	〃	〃	〃	〃	13H35R1		27917		淡褐色	淡茶褐色	密	○	○	○	○	○		WB	良	内：Fe少量，外：Mn			
	339	〃	〃	〃	〃	〃	20FR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○					WB多	普	外：Fe・スス少量付着			
	340	〃	〃	〃	〃	〃	23O1R1		38716		暗茶褐色		砂粒		○					WB多	普	内：Mn			
23	341	〃	〃	〃	〃	〃	22K75R2		38602		暗茶褐色		砂多	○	○			○		WB多	普	内：Mn			
	342	〃	〃	〃	〃	口縁	13HR1	—			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒	○				○		WB多	良				
	343	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G54R1		28204		淡黄茶褐色	暗褐色	砂多	○		○		○			黒	良	外：スス付着		
	344	〃	〃	〃	〃	〃	13H41R1		27205		淡黄茶褐色	淡明茶褐色	密	○				○	◎	WB多	良	内：Mn			
	345	〃	〃	〃	〃	〃	18D	VI	33648	13.49	黒褐色	淡茶褐色	砂多	○	○			○		WB	良	外：Mn			
	346	〃	〃	〃	〃	〃	20E	VII	43278	13.38	黒褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○			○	○			良	内：Mn		
	347	〃	〃	〃	〃	〃	13H73R1		27230		黒褐色	淡茶褐色	密	○	○			○			黒	良	内：スス付着		
	348	〃	〃	〃	〃	口縁	13HR1	—			明茶褐色		砂多	○				○	○		黒	良	内外：Mn少量		
24	349	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G51R1		27049		淡茶褐色	明茶褐色	砂粒	○	○		○				良	外：Mn・Fe少量			
	350	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VII	41968	13.58	暗褐色	淡黄茶褐色	密			○				WB	良	内：Mn・Fe，外：Mn			
	351	〃	〃	〃	〃	口縁	unknown	—			黒褐色	明茶褐色	密	○	○							良	外：Fe		
	352	〃	〃	〃	〃	〃	18E	VI	32309	13.65	明黄茶褐色	淡茶褐色	密	○	○	○				WB	良	内：Mn，口縁内部赤色顔料?			
	353	〃	〃	〃	〃	〃	20E落ち込み	—			黒茶褐色	明茶褐色	砂多	○				○		WB多	良	内：スス少量付着，外：Mn			

表4 出土遺物観察表(4)

採 掘 場 所	番 号	種 類	類 別	型 式	器 種	部 位	出 土 区	層	遺物番号	標高 (m)	色調		状態	胎土								焼 成	備 考
											内面	外面		石英	長石	角閃	金雲	白粒	茶粒	火G	他		
24	354	縄文土器	Ⅲ4	草野	深鉢	口～胴	22K55R2		38138		黒茶褐色		密								WB多	良	内：Fe，外：Mn
	355	〃	〃	〃	〃	口～脚	15GR1		—		淡褐色	明茶褐色	密	○	○	○		○				良	与市来式
	356	〃	〃	〃	〃	口～胴	19E	VII	41352	13.56	淡褐色	明茶褐色	密	○	○	○						良	内外：Mn
25	357	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1		—		暗茶褐色	明茶褐色	砂多	○	○			○	○		黒	良	外：スス少量付着
	358	〃	〃	〃	〃	〃	23O11R2		38718		明茶褐色	暗茶褐色	砂多				◎	◎				良	外：スス付着
	359	〃	〃	〃	〃	〃	13H22R1		26795		明灰茶褐色	明茶褐色	砂多	○				○			黒	良	補修孔有，外：Mn少量
	360	〃	〃	〃	〃	口縁	14G	V	22404	12.86	灰茶褐色	暗茶褐色	砂多		○	○		○		WB	普	外：Fe	
		〃	〃	〃	〃	口縁	14G44R1		26673		灰茶褐色	暗茶褐色	砂多			○	○	○		WB	普	外：Fe	
	361	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1		—		暗茶褐色		砂多	○	○			○		WB多	普		
	362	〃	〃	〃	〃	〃	〃	15G52R1		28206		黒褐色	明茶褐色	砂多			◎		○			良	内：スス付着，外：Mn
		〃	〃	〃	〃	〃	〃	18F92R1		33260		黒褐色	明茶褐色	砂多			◎		○			良	内：スス付着，外：Mn
	363	〃	〃	〃	〃	口～胴	13HR1		—		明茶褐色		砂多	○	○	○		○			黒	普	
	364	〃	〃	〃	〃	口縁	12H80R1		27997		明茶褐色		砂多	○	○		○	○	○			良	
26	365	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G94R1		28245		明茶褐色		砂粒	○	○			○		WB多	黒	良	内：Mn
26	366	〃	〃	〃	〃	〃	22O20R2		38712		暗茶褐色	暗黒茶褐色	砂多		○		○	◎	○			粗	外：Fe・Mn
	367	〃	〃	〃	〃	〃	15GR1		—		淡茶褐色	暗茶褐色	砂多				◎	○			黒	普	
	368	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1		—		明茶褐色	淡褐色	砂多	○	○		◎	○			良		
	369	〃	〃	〃	〃	口縁	19E	VII	41599	13.48	黒茶褐色	暗茶褐色	砂多	○			○	○			黒	良	外：Mn
27	370	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G51R1		27461		黒褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○	○				粗	外：Mn	
	371	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VII	—		明茶褐色	暗茶褐色	砂多		○		◎	◎			普		
	372	〃	〃	〃	〃	口縁	22KR2		—		明茶褐色	黒褐色	砂多	○	○	○				WB	黒	良	内：Fe，外：Mn
		〃	〃	〃	〃	口縁	19E	VII	—		明茶褐色	黒褐色	砂多	○	○	○				WB	黒	良	内：Fe，外：Mn
	373	〃	〃	〃	〃	口縁	20D	VI	40280	13.57	淡茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○	○		○	○		黒	良	内：Fe・Mn
	374	〃	〃	〃	〃	口～胴	19E	VII	41359	13.58	黒褐色		砂多	○		○	○	○	○			普	内：Fe，外：Fe・Mn
	375	〃	〃	〃	〃	完形	13H59R1		27046		黒褐色	淡茶褐色	密	○	○							普	外：Mn少量
28	376	〃	〃	〃	〃	口～胴	13GR1		—		淡茶褐色	淡明茶褐色	砂粒	○	○	○		○		WB	普	内：Mn	
	377	〃	〃	〃	〃	口縁	22N77R2		38296		明茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○	○		○			黒	良	内：Fe，外：Fe・Mn，与市来式
	378	〃	〃	〃	〃	口～胴	16GR1		—		暗黄茶褐色	暗茶褐色	砂多	◎	◎			◎				粗	
		〃	〃	〃	〃	口～胴	16FR1		—		暗黄茶褐色	暗茶褐色	砂多	◎	◎			◎				粗	
	379	〃	〃	〃	〃	口縁	16G81R1		28423		暗茶褐色	明黄茶褐色	砂多	◎	○		○	○			普	内：スス付着	
	380	〃	〃	〃	〃	口～胴	12G	V	6442	12.89	淡茶褐色	暗茶褐色	砂多			○	○	○			黒	良	外：Fe・Mn
	381	〃	〃	〃	〃	〃	13HR1		—		黒褐色	暗茶褐色	砂粒	○	○	○		○			良	外：Fe少量，与鐘崎式	
	382	〃	〃	〃	〃	口縁	15G26R1		28233		明茶褐色		密	○	○			○		WB	良		
29	383	〃	〃	〃	〃	〃	20F	排土	—		淡褐色		密	○	○			○		WB	普		
	384	〃	〃	〃	〃	口～胴	13HR1		—		明茶褐色	暗茶褐色	砂多		○		◎	◎				良	内：Mn少量
	385	〃	〃	〃	〃	口縁	16G26R1		26108		暗茶褐色	淡黄茶褐色	砂多		○	○					黒	普	加工の可有，内：Mn少量
	386	〃	〃	〃	〃	〃	15GR1		—		暗茶褐色		砂粒	○	○	○		○		WB	良		
	387	〃	〃	〃	〃	口～胴	13HR1		—		明茶褐色		砂多	○	○			◎	◎		黒	普	
	388	〃	〃	〃	〃	〃	22N48R2		38663		明茶褐色	黒茶褐色	密	○	○	○					黒	良	内：Mn，外：Mn・Fe・スス付着
	389	〃	〃	〃	〃	〃	12HR1		—		明茶褐色	黒茶褐色	砂多	○	○		○	◎				良	
	390	〃	〃	〃	〃	口～胴	12HR1		—		淡黄茶褐色	淡褐色	砂粒	○	○	○		○			良	内：Mn少量	
30	391	〃	〃	〃	〃	口縁	12H67R1		26879		淡黒茶褐色	淡茶褐色	砂粒	○		○	○	○			普	内外：Mn少量	
	392	〃	〃	Ⅲ5	丸尾	〃	22N58R2		38236		暗茶褐色	暗褐色	砂多	○	○		◎	◎			良	内：Mn，外：Fe少量	
	393	〃	〃	〃	〃	〃	19E	VI	41423	13.62	明茶褐色	暗茶褐色	砂多		◎			◎			良	内：Mn	
	394	〃	〃	〃	〃	〃	12H67R1		27297		淡褐色	明茶褐色	砂多	○	○		◎	◎				良	
	395	〃	〃	〃	〃	口～胴	21F13R1		37253		淡茶褐色	明茶褐色	砂多	○	○		◎	◎	○		黒	良	外：Mn少量
	396	〃	〃	〃	〃	〃	20F65R1		38852		淡茶褐色	黒茶褐色	砂多	○	○	○	◎	◎				良	内：Mn少量
	397	〃	〃	〃	〃	口縁	20FR1		—		淡茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○		◎	◎				良	加工の可有，内：Mn少量
	398	〃	〃	〃	〃	〃	21E94R1		35579		淡褐色	淡茶褐色	砂多	○	○	○	○	◎			黒	良	内外：Fe少量
	399	〃	〃	〃	〃	〃	15G7R1		26906		淡褐色	暗茶褐色	砂多	○	○	○	◎	◎			黒	良	加工の可有，内：Mn少量，外：Fe・スス
	400	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F74R1		38897		明茶褐色	暗茶褐色	砂多	○	○	○	◎	◎			黒	良	

【表凡例】

- 遺物番号は，文献3からの継続番号である。
- 類別は，文献1による分類を踏襲したものである。
- 胎土状態の「砂粒」は鉋物以外の内容を指し，「砂多」は砂粒が比較的量が多いこと，「密」は粘土の粒が細かく緻密な状態を示している。
- 胎土の「○」は含有状況を指し，「◎」は比較的量が多いことを示している。
- 胎土の「火G」は「火山ガラス」を指し，「W」は白色透明系，「B」は黒色系のことである。
- 胎土他の「黒」は黒色の粒子を指している。

鹿屋市小牧遺跡で出土した駿河湾系土器について

北園 和代

The Suruga Bay-type pottery fragments excavated from the Komaki site in Kanoya City

Kitazono Kazuyo

要旨

鹿屋市小牧遺跡では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の駿河湾系土器片が出土した。この土器は、九州でも類例が少なく、南九州で出土した初例のため重要な資料である。静岡県東部および九州の土器編年・研究から年代や型式について考察した。併せて九州での出土例を紹介する。

キーワード 弥生時代後期後半～古墳時代前期、菊川式土器、雌鹿式土器、大廓式土器

1. はじめに

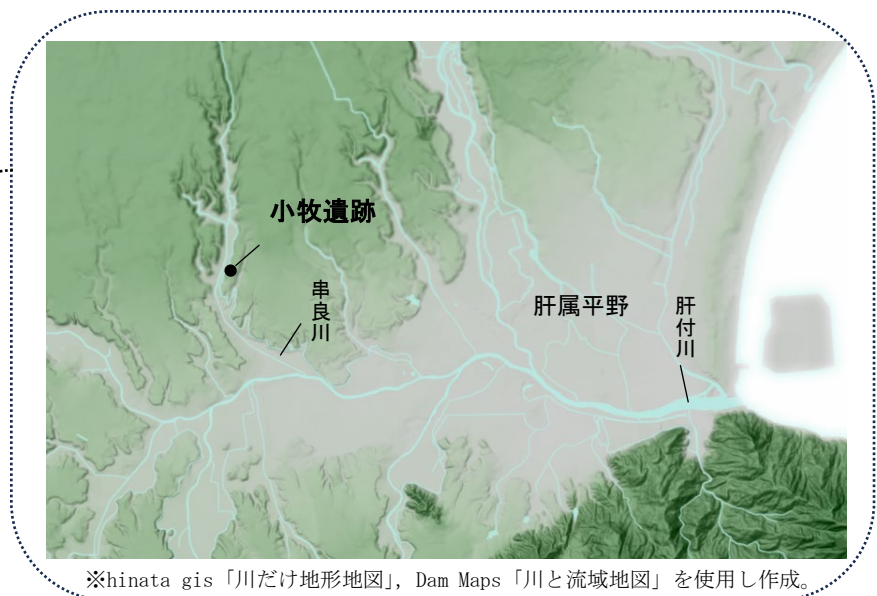
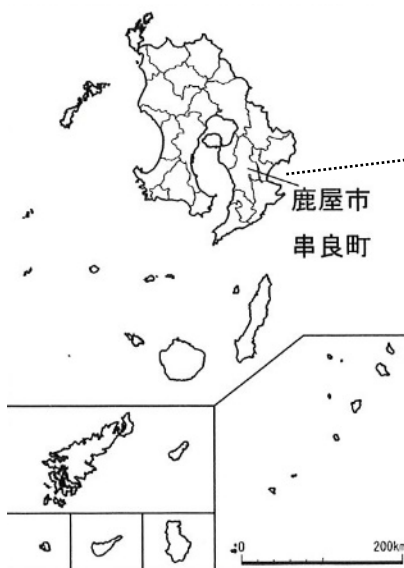
小牧遺跡は、鹿屋市串良町細山田に所在する。笠野原台地の東南端部に位置する串良川左岸の台地上に位置する（第1図）。遺跡の標高は約65mで、志布志湾から約10km遡上した内陸部の遺跡である。旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であり、東九州自動車道建設に伴って平成27年度～29年度に発掘調査が行われた。

筆者は平成30年度・令和2～4年度に小牧遺跡の整理・報告書作成作業に携わる機会をいただいた。報告書は時代ごとに4冊にわたる。そのうち『小牧遺跡3 弥生時代～古墳時代編』に掲載した駿河湾系の土器片（報告書掲載番号：65）について、刊行後に得た情報も踏まえて本稿により詳細に報告したい。

2. 土器の出土状況と特徴

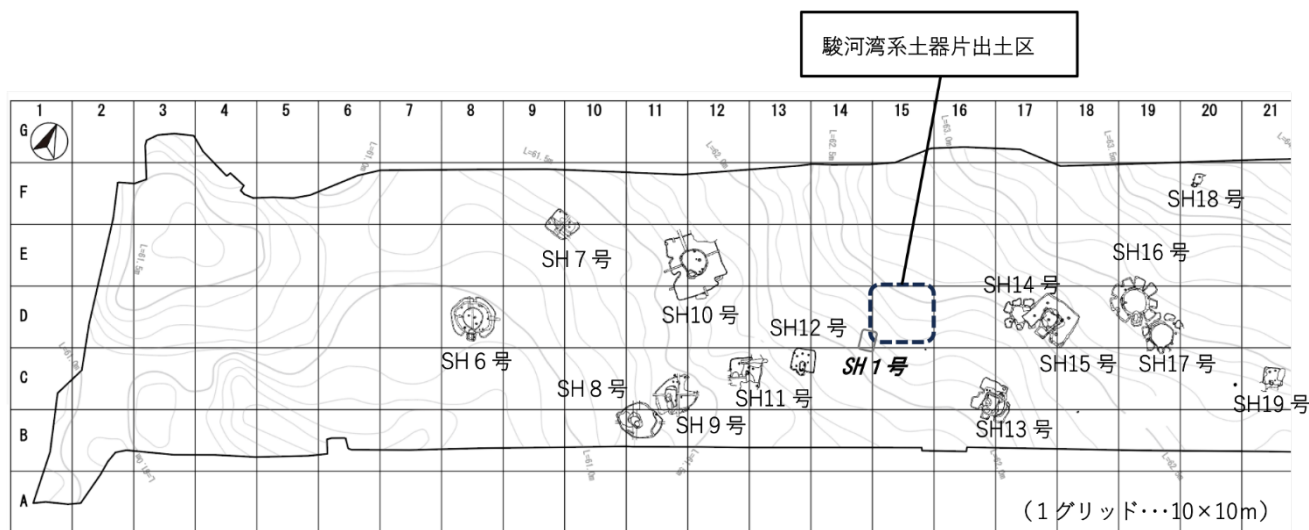
対象の土器はD-15区のIVb層から出土した（第2図）。小牧遺跡においてIVb層はアカホヤ火山灰（約7,300年前）層であるV層直上にあり、縄文時代後期前半から古墳時代後期の遺物を包含する。土器の存在には報告書作成時に気付いた。

この土器片は大きく外傾する口縁部片（第3図）で、内面に結節縄文が施されていたため、初見時は縄文土器の可能性を考えた。しかし、口縁部の内側に縄文が施される例は南九州にはほとんどみられず、ラップ状に大きく開き、口唇部には平坦面がつくられ、端部はわずかに下垂していた。形態は東海地方に分布する弥生時代～古墳時代のいわ



※hinata gis「川だけ地形地図」、Dam Maps「川と流域地図」を使用し作成。

第1図 小牧遺跡の位置



※堅穴建物跡=SH と表記し、斜体は弥生時代に、ほかは古墳時代前期に帰属する。

第2図 小牧遺跡 駿河湾系土器出土状況

ゆるパレス・スタイル土器の壺を想定させた。口唇部は平たく、棒状の浮文が1つ確認できた。また、軽石を含む明るい黄褐色の胎土は焼成もよく硬質で、本遺跡で出土した縄文土器の特徴とは大きく異なった。

そしてこの土器は報告書作成における遺物指導を通じ、形態・施文法・胎土の特徴から、静岡県駿河湾周辺の弥生時代後期～古墳時代前期の土器に該当する可能性を知った。具体的には駿河湾東部の菊川式土器（弥生時代後期）と、同じ系統で時期の下大廓式土器（古墳時代前期）で器種は壺である。なお以下の文中では型式名より「土器」を略する。

この土器の出土地点の周辺には弥生時代の堅穴建物跡1号と古墳時代の堅穴建物跡12号が検出されている。表1にD-15区を中心とし、C～E-14～16区の駿河湾系土器出土層と同じIVb層出土の土器についてまとめた。このように周辺の同じ層からは弥生時代～古墳時代の遺物

時期	型式	報告書掲載No (器種)	備考
弥生早期	高橋Ⅱ	18・21 (甕)	
弥生中期前半	入来Ⅰ	27・29 (甕)	
	入来Ⅱ	40 (甕)	
弥生中期後半	須玖Ⅱ	71・73・75 (壺)	掲載外の破片あり (3点)
弥生後期	高付	51・52 (甕)	
古墳時代初頭	古式土器系	560 (器台坏部)	畿内型模倣品
古墳時代前期	古式土器系	540 (布留式模倣甕)	
		543 (二重口縁壺)	
		565 (小型丸底壺)	
		566・567・569 (ミニチュア坏)	
	東原	551 (壺)	掲載外の破片あり (30点)
古墳時代中期	辻堂原	—	掲載外の破片あり (4点)
古墳時代後期	笹貫	—	掲載外の破片あり (4点)

※斜体はD-15区IVb層出土

第1表 小牧遺跡D-15区周辺IVb層出土土器一覧

が混在して出土しているため、当時は出土状況による時期の判断が難しかった。土器片から推測される形態は、南九州の弥生時代中期後半の山ノ口式の広口口縁壺に最も近かった。そこで弥生時代の遺物の項に掲載した。

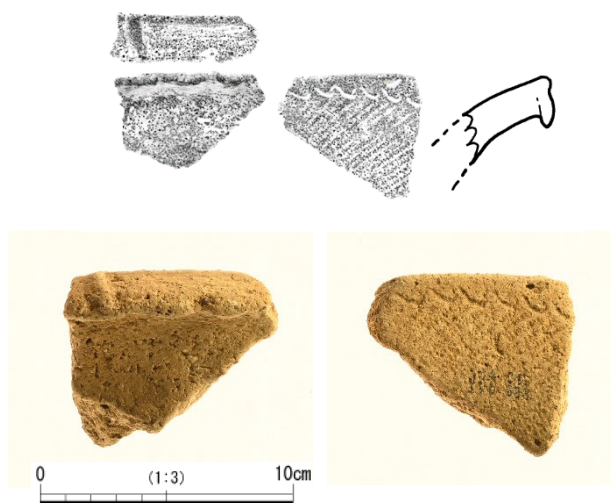
3. 駿河湾系土器の編年について

小牧遺跡で出土した土器は、単純口縁の細頸壺に該当すると思われる。そこで、小牧遺跡の出土例に関連する駿河地方の土器について、単純口縁壺に着目して帰属時期と分布の傾向に併せて、形態と施文の特徴を紹介したい。

①菊川式土器 (第5図1～3)

弥生時代後期後半に帰属し、分布域は静岡西部の中・東遠 (大井川以西、天竜川以东) である。典型的な菊川式の壺は太田川流域 (袋井市・磐田市) を分布の中心としているが、その模倣品は、南関東 (相模西部から武蔵にかけての地域) からも出土している。

口縁部の形態については、古段階はラッパ状に開く折り返し口縁のものがほとんどで、新段階になると出現する単純口縁のものは口縁部が内湾気味である特徴をもつ。施文部位は口縁部内面と肩部で、縄文原体を使用したものと楡



第3図 小牧遺跡出土駿河湾系壺実測図および写真

状の原体を使用したものの2つに大別される。縄文(LR, 結節), 櫛刺突羽状文, 扇状文などがある。

②雌鹿塚式土器 (第5図4)

菊川式とほぼ同時期にあたる弥生時代後期から終末期の土器形式として駿河湾東部に分布する(渡井 1997)。雌鹿塚式と菊川式の単純口縁の壺の法量・文様帯の位置・施文方法, 器形などから並行関係を考察した岩本氏の研究があり, 時期が下るほどに菊川式の影響を濃く受けることが示唆される(岩本 2010)。単純口縁壺の口縁部形態は菊川式の影響と考えられる内湾するものに加えて, 外反するものもある。渡井氏は『淹土遺跡』報告書中で, 「口縁端部を肥厚させて明瞭な端面を形成するもの。その端面には棒状の浮文や縄文を施す場合が多い」タイプを広口壺Dに分類し, 雌鹿塚式の新段階に比定している(1997 渡井)。

③大廓式土器 (第5図5～7)

古墳時代前期に帰属する。静岡県東部地域の古式土師器に該当し, 外来系土器の搬入の始まりを最初の段階としてI～IV式のIV期に編年される(渡井 1996・1997, 篠原 2007)。分布域は, 駿河湾沿岸部または大井川流域が中心である。古段階(大廓I・II式)は駿河地方とその周囲に集中するが, 新段階(大廓III・IV式)は南関東へと分布を広げる。有文の単純口縁壺は口縁部内面や頸部～胴部文様帯を有し, 結節縄文を施す。口縁内面や頸部～胴部文様帯中に円形の浮文を施すものもみられる。単純口縁のものは外反し

ながら開く。胎土の色調は淡黄白色～淡橙白色で特徴的なものである(2000 岩本)。

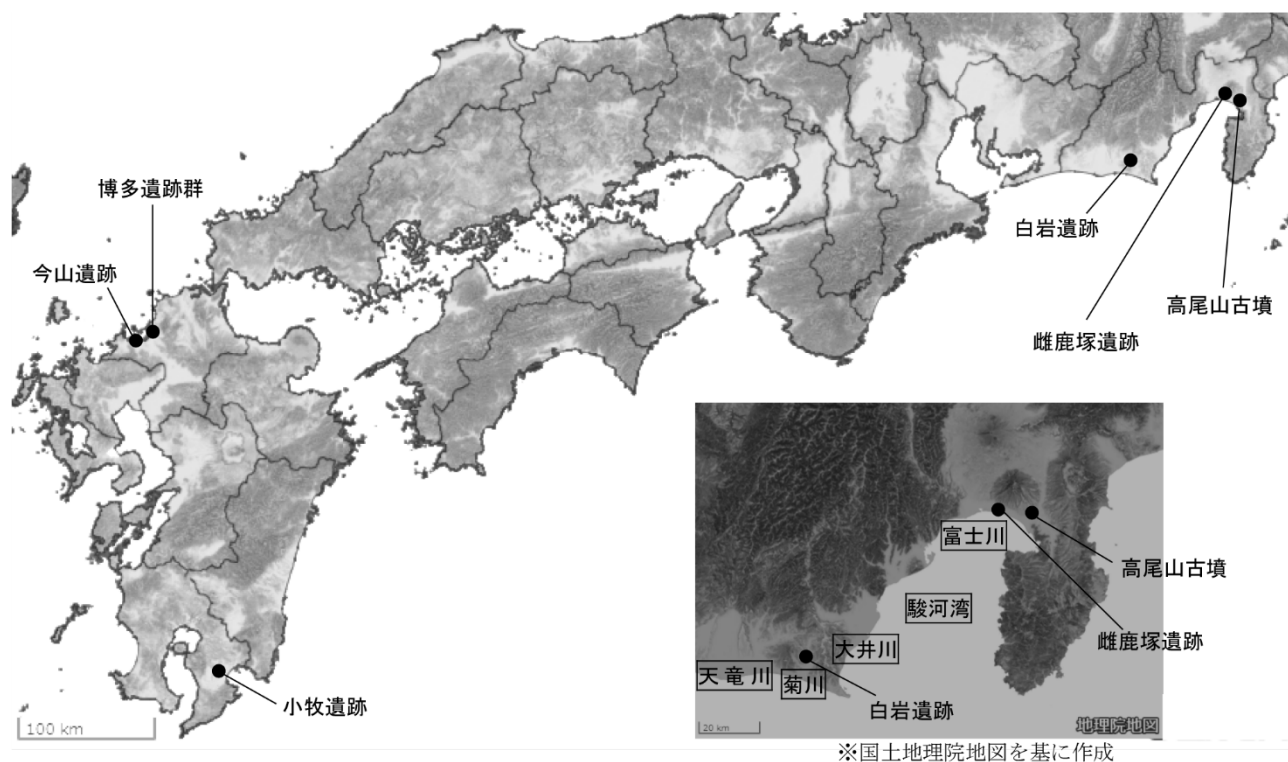
4. 九州における駿河湾系土器の出土事例について

駿河湾系の弥生時代後期から古墳時代前期の土器は, 駿河～南関東へ拡散することが知られる。そのため駿河湾周辺から西の出土例は少ない。そして九州における出土例は, 現在のところ福岡市博多湾周辺に2例がみられるのみである。2例ともに小片で全体形がわからないこともあり, 帰属時期や生産地の断定が難しいことについては小牧遺跡の例と同じである。

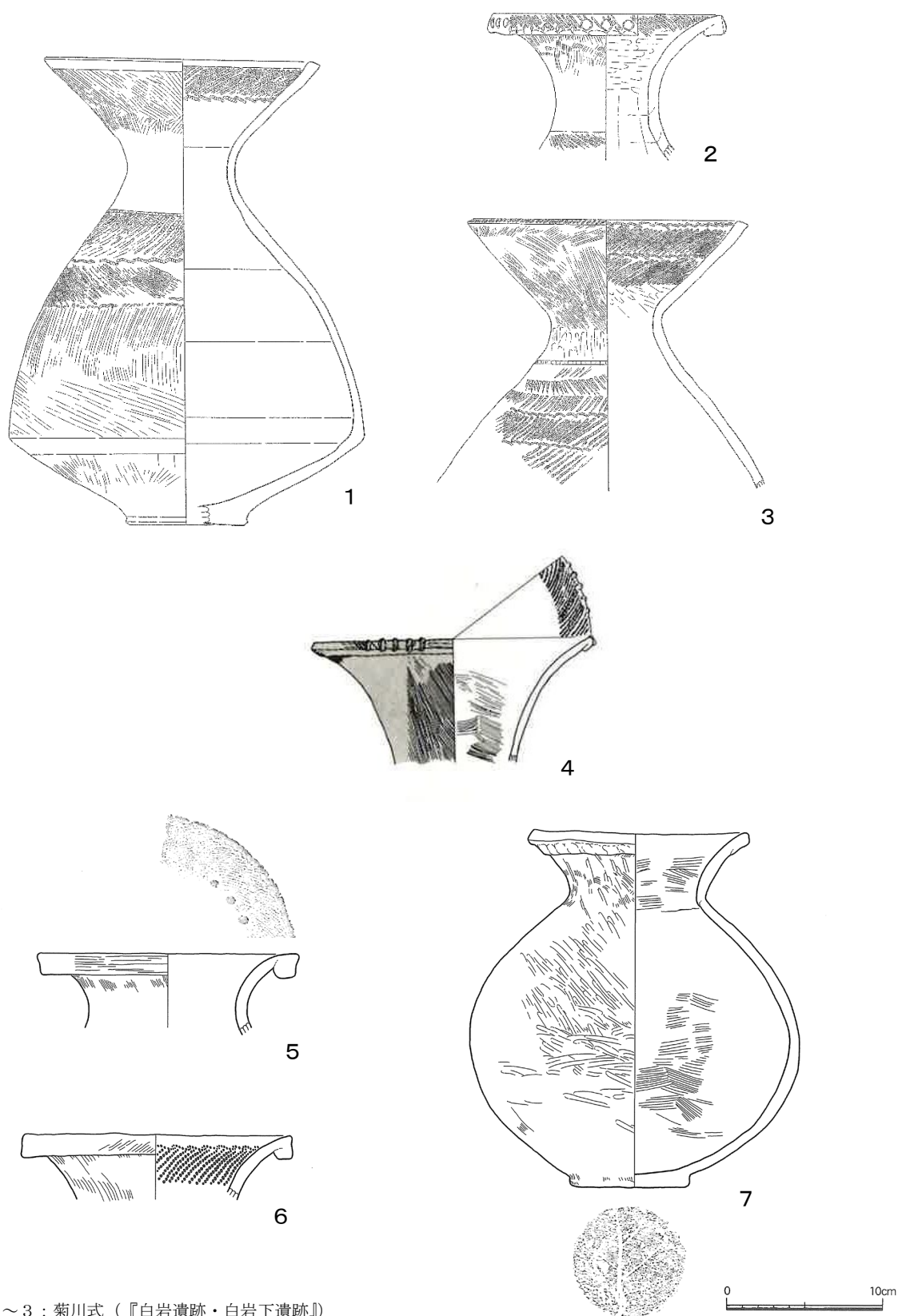
①博多遺跡群 第203次調査 (第6図1～3)

竪穴建物跡(SC091000)から複合口縁壺の口縁部片が, 後代の柱穴埋土中から甕の頸部片が出土した。(第6図1・2)。

1は大廓IV式であるとされる。口縁部内側を内側に折り曲げ肥厚させる。無文で, 器面は内外面ともにハケメ調整後不規則なミガキを施す。赤褐色を含む明橙色の胎土である。報告書第IV章のまとめにて, SC091000について出土土器の帰属時期の多くが北部九州編年のⅢA期古層(古墳時代前期中葉)であるとされる(2021 久住)。2は古墳時代前期の遺物として報告される。外面に緻密な縄文を施し, 白色粒を多く含む黄橙色を呈する胎土である。同調査他にも畿内や丹後・丹波, 播磨, 瀬戸内地方などの広範囲の土器がみつかり、交易の拠点であったことが窺える。

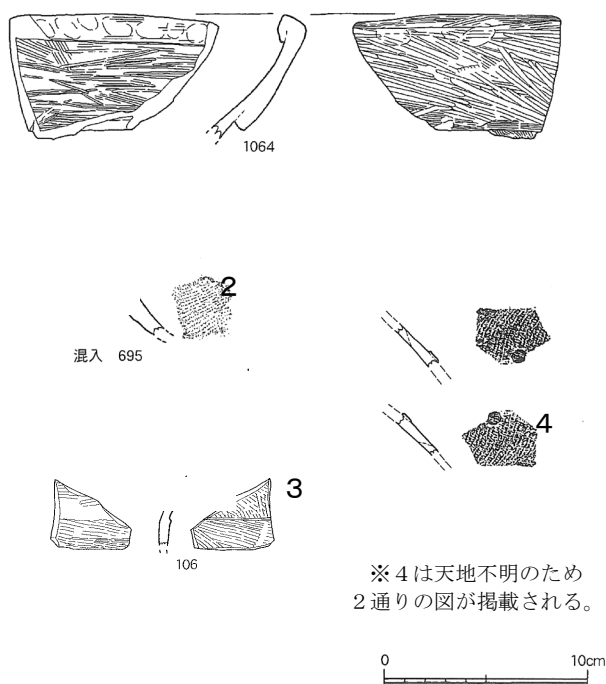


第4図 掲載遺跡位置図



※ 1～3：菊川式（『白岩遺跡・白岩下遺跡』）
 4：雌鹿塚式（『雌鹿塚遺跡』）
 5～7：大廓式（高尾山古墳）

第5図 菊川式・雌鹿塚式・大廓式細頸壺



第6図 博多 203 次調査出土土器（1～3）
今宮遺跡下段出土土器（4）

南九州産とされる土器も報告され、うち1点は外反しながら開く甕の頸部片で、外面には屈曲部を始点として刷毛によって掻き上げている（第6図3）。屈曲の角度や調整の特徴から東原式に該当すると推測される。

②今山遺跡（福岡市）第8次調査（第6図4）

包含層から壺の肩部片が出土している。

4は薄手の小片で、外面に緻密な羽状縄文を施し、ボタン状の円形突起を貼り付ける。報告書中では関東南部の土器であることが推測され、関東南部の弥生時代後期の弥生町式～前野町式である可能性が示されている。弥生町式・前野町式は在地土器との混交によって変容した菊川式系統の土器である。なお、弥生町式・前野町式は弥生時代後期後半には雌鹿塚式との関連がみられるとされる（安藤2015）。

5. 小牧遺跡の駿河湾系土器の帰属時期について

小牧遺跡出土土器の施文法の棒状の浮文や口縁部内面の結節縄文は、菊川式・雌鹿塚式・大廓式すべてにみられるものである。菊川式の単純口縁の細頸壺は内湾して開くものに限定され、外反するタイプは折り返し口縁となる。一方小牧遺跡出土土器の口縁部は外反しながら開き、口縁端部はわずかに垂下するのみであるため形態には違いがある。このような口縁部形態は雌鹿塚式～大廓式に通じる弥生時代後期から古墳時代前期の駿河湾東部の土器の特徴に類似し、胎土の色調などの特徴は大廓式に近い。

表1に示したように、この土器の出土地点であるD-15

区IV b層周辺からは東原式や古式土師器系の古墳時代初頭～前期頃の土器が多く出土している。また、小牧遺跡から検出された竪穴建物跡の多くが古墳時代前期の東原式土器を伴った。

先述した土器の特徴と出土した状況を併せて判断すると、本稿対象の土器は大廓式に該当すると捉えるのが自然であると考ええる。また静岡県東部の駿河湾周辺からの搬入品の可能性が高い。

6. まとめ

小牧遺跡は志布志湾から肝属川河口に入り、支流の串良川を舟で遡上してたどり着ける最終地点近くの高台に立地する。弥生時代中期後半以降から古墳時代前期後半にかけて、北部九州産の須玖Ⅱ式の丹塗りの広口壺、熊本平野の布留式模倣甕、宮崎平野の甕・壺の搬入が認められ、広範囲での交流が窺える遺跡である。

本稿に紹介した駿河湾系の土器片の出土は、肝属平野に高塚古墳が築造される時期より若干前に、平野奥の高台に東海地方を含む広域に関わりをもつ集落があった可能性を示すと考える。しかし本来の分布域から乖離した場所で1点のみの出土事例となり、西日本での出土例を探すことすら難しいため伝播の経路はわからない。今の段階でこの地域間に交流・交易があったかを知ることは困難である。

本稿で紹介した駿河湾系の土器は、口縁部の形態のみではなく、胴部の張り具合や胴部稜の有無などのプロポーシオン、肩部文様帯の在り方などから産地や帰属時期がより詳しく分かる。既に報告書を刊行した遺跡の土器片のなかに類例はないだろうか。そして今後の発掘調査で、残存率の高い資料が周辺に類例として加わることが待たれる。

【引用参考文献】

- 安藤広道 2015「IV各地の弥生土器および併行土器群の研究 関東」『弥生土器』ニューサイエンス社（佐藤由起男編）
- 岩本 貴 1995「菊川式土器における編年上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立 10 周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩本 貴 2000「大廓式大型壺の転用」『研究紀要』第7号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩本 貴 2010「雌鹿塚式の壺の形式変化について」『研究紀要 第16号』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岩本 貴 2012「浮文の法式 東遠江～駿河～伊豆北部の弥生後期～古墳前期の壺を中心に」『研究紀要 創刊号』静岡県埋蔵文化財センター
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2018「九州島の古式土師器」の並行関係―弥生時代終末期～古墳時代中期初頭の九州島における広域編年―『集落と古墳動態Ⅰ 第21回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集』九州前方後円墳研究会

篠原和広 2007「太平洋側（静岡県）」『考古学ジャーナル 2
月号 古墳出現期の土器交流』ニューサイエンス社
中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古 6 号』鹿児島
大学考古学研究室
松崎大嗣 2017「薩摩・大隅の古式土師器と在地土器」『九
州島における古式土師器 第 19 回九州前方後円墳研究
会長崎大会発表要旨集』九州前方後円墳研究会
松崎大嗣 2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学
研究』第 18 回号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究
科
渡井英誉 1996「東駿河における布留式併行期の様相」『静
岡県考古学研究』28
渡井英誉 1997「土器編年」『滝土遺跡』富士宮市教育委員
会編文化財調査報告書（23）
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『白岩遺跡・白岩
下遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
第 220 集
沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼
津市教育委員会 第 51 集
沼津市教育委員会 2012『高尾山古墳発掘調査報告書』沼
津市教育委員会 第 104 集
福岡市教育委員会 2005『今山遺跡 第 8 次調査』福岡市埋
蔵文化財調査報告書 第 835 集
福岡市教育委員会 2021『博多 170—博多遺跡群 第 203 次
調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1405 集
（公）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
2022『小牧遺跡 3』（46）

鹿児島県内における中世のトイレ遺構

—科学分析により裏付けされた諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構を中心に—

平嶺 浩人

Consideration about medieval toilet remains in Kagoshima Prefecture

Hiramine Hiroto

要旨

阿久根市の諏訪ノ前遺跡から中世（14世紀）のトイレ遺構が検出された。科学的に証明された県内初めてのトイレ遺構となったため、科学分析結果や形態などについて整理・検討を行うとともに、過去の発掘調査における土坑などの遺構について、トイレ遺構の可能性を検討した。

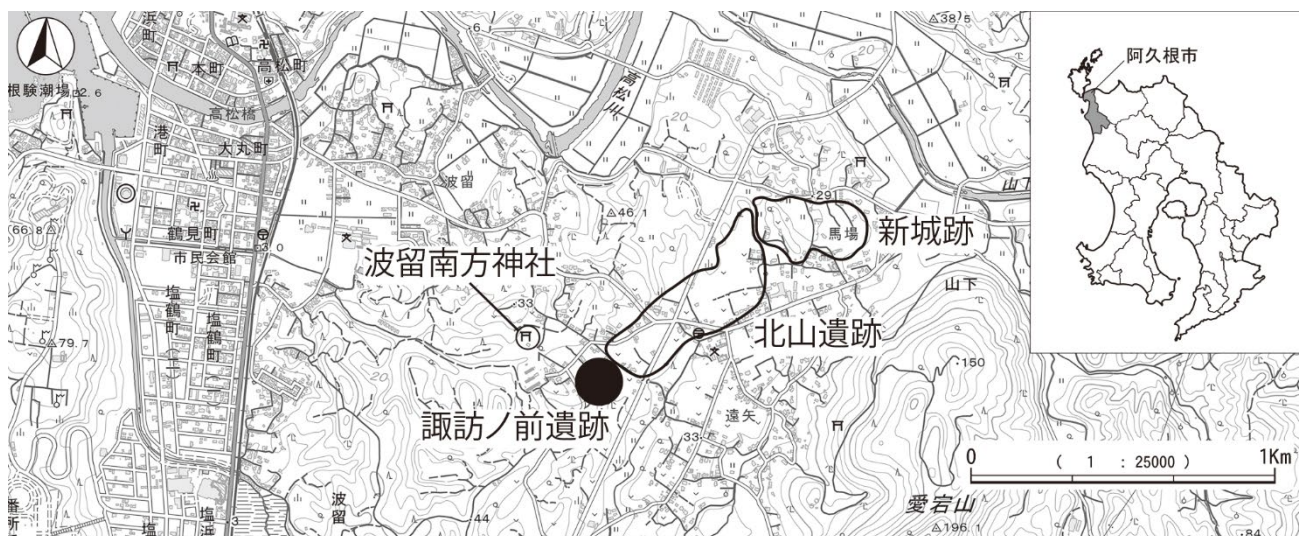
キーワード トイレ遺構、中世、寄生虫卵分析、花粉分析、リン・カルシウム分析、諏訪ノ前遺跡

1. はじめに

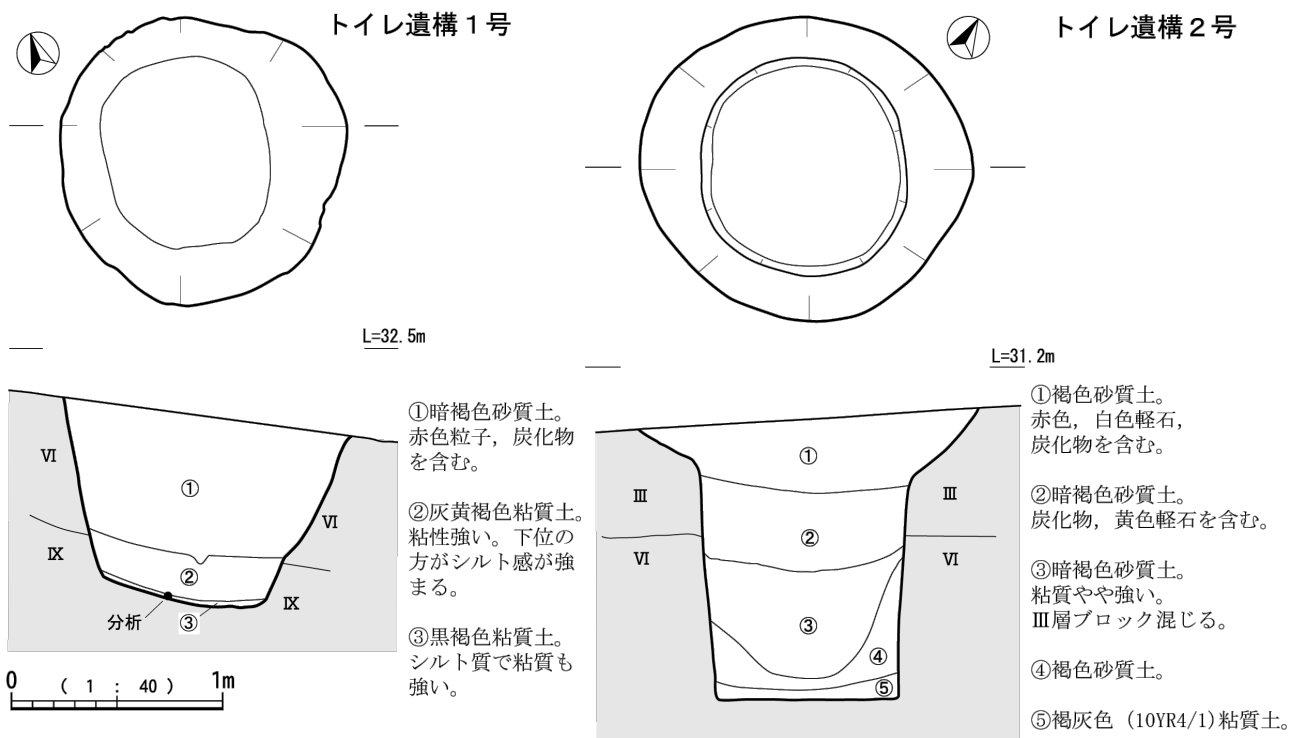
令和5年度に発掘調査を実施した阿久根市波留の諏訪ノ前遺跡（第1図、調査セ2025）において、14世紀のトイレ遺構が確認された（第2図）。遺跡周辺の地域は古代の英祢駅があったとされる比定地のひとつであり、阿久根氏の居城である阿久根城をはじめ、居城跡が点在する。そのため、特に古代～中世にかけて歴史的に重要な役割を果たした地域であるといえる。遺物の中心は、中世後半（14世紀～16世紀頃）の貿易陶磁器や、土師質及び瓦質の摺鉢・火鉢である。また、五輪塔の水輪や懸仏の本尊などの宗教的意味合いが強い遺物が出土していることもあり、阿久根氏に加え、遺跡の北西側に位置する波留南方神社との関係も深いと考えられる遺跡である。

諏訪ノ前遺跡では、6基のトイレ遺構を認定した。トイレ遺構については、以前から県内でも発掘事例の報告や議

論が行われてきた。翁長・池畑は、鹿児島県内の過去の発掘事例からトイレの可能性のあるものについて集成を行った（翁長・池畑2015）。また、志布志城跡（志布志市2012）や椿城跡（県埋セ2010）、知覧城（知覧町2006）などでは、発掘調査で土坑（大型土坑、方形土坑）が見つかり、報告書の段階でトイレ遺構の可能性について検討している。しかしながら、過去のいずれの報告書においても、寄生虫卵やリン・カルシウム分析等を実施していなかったり、同科学分析の結果、寄生虫卵や花粉などが検出されなかったりと科学的な裏付けがなく、形態や配置からの推察であった。一方で、諏訪ノ前遺跡で検出されたトイレ遺構は、科学的な分析によりトイレ遺構と認定した鹿児島県内で初めての事例である。そのため、形態と埋土状況および科学分析結果からトイレ遺構の特徴について考察を行いたい。



第1図 諏訪ノ前遺跡位置図



第2図 トイレ遺構1号・2号実測図

これを基に本遺跡におけるトイレの景観と当時の食生活の一端について検討するとともに、県内で報告されているトイレ遺構の可能性がある遺構について、再検討を行う。

2 トイレ遺構の判断基準

トイレ遺構の代表的な検証例については、福岡県の鴻臚館（福岡市 1994）や石川県の大宮坊跡（鹿野町 1995）があり、1 cm³ あたり 1 万～数万個の寄生虫卵が報告されている。トイレ遺構のパターンとして、金原正明氏は、「①寄生虫卵が非常に多い。②洗い出した種実のほとんどが食用になる群集であること。③花粉も一般的なカシやマツ等の風媒の花粉ではなく、食物に関係するような特殊な花粉が集まっている。」としている（黒崎 1998）。また、上記の3つの特徴以外にも、トイレとして検出された遺構には、「リンの値が高い」「トイレの形態や遺構の配置に特徴がある」「昆虫遺体（ハエの蛹など）が産出する」などの報告がある。

そこで、トイレ遺構の検証については、下記の6つの分析項目を組み合わせることが必要である。

- ① 寄生虫卵の多産
- ② 植物残渣（可食植物の種実・骨）の産出
- ③ 昆虫遺体の産出
- ④ 土壌理科学性（リンなどの過多）
- ⑤ 花粉分析
- ⑥ 形態・立地

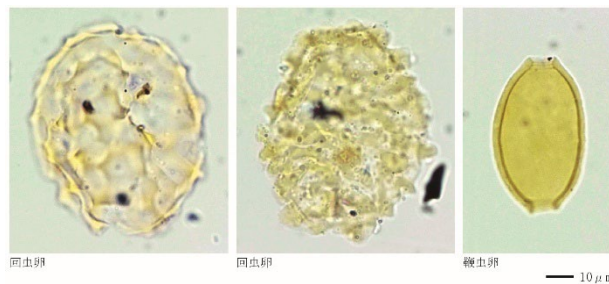
次に諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構の各項目について、検

証・報告する。なお、分析については、株式会社古環境研究所及びパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

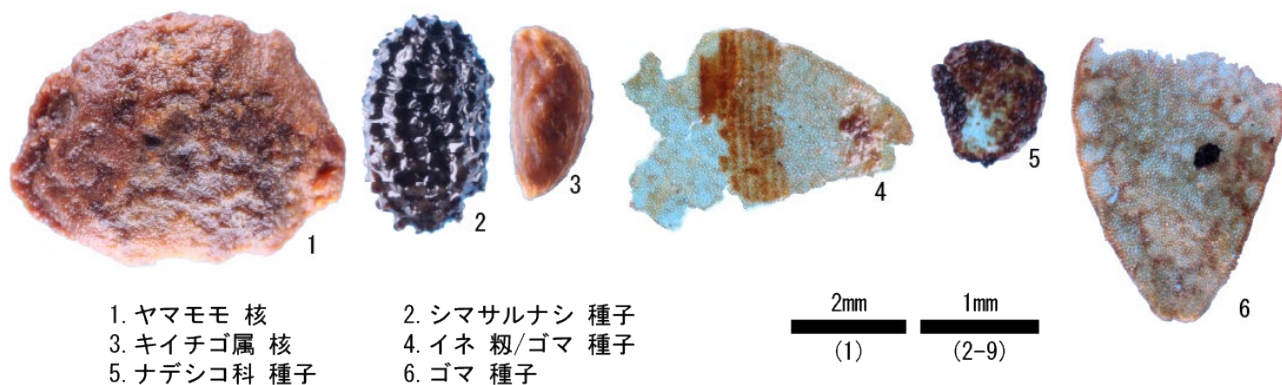
3 諏訪ノ前遺跡のトイレの検証

① 寄生虫卵の多産

寄生虫卵がトイレ遺構1号埋土③（最下部層）から検出された。寄生虫卵は回虫と鞭虫（第3図）で、1 cm³ あたり 400 個（検出）である。トイレ遺構としては通常 1 cm³ あたり 1000 個あることを判断基準としている（黒崎 1998）が、数が少ないのは立地からも寄生虫卵が分解されやすい環境であったことが想定される。分解されやすい環境とは、有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境である。寄生虫卵の分解に対する抵抗力は、花粉化石と同程度とされている（黒崎 1998）。当遺跡は、シラスを掘り抜いてトイレが作られており、非常に乾燥しやすい環境であった。そのため、今回は 400 個/cm³ であっても、有効な数字であると考えられる。



第3図 検出された寄生虫卵



第4図 トイレ遺構1号内種実遺体

検出された回虫 (*Ascaris lumbricoides*) 卵は、比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18 日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。一方鞭虫 (*Trichuris trichiura*) 卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは岐阜提灯形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6 週間で感染幼虫包蔵卵になり汚染された生ものを食すことによって感染する。鞭虫は、世界に広く分布し、現在では特に熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

なお、トイレ遺構2～4号について寄生虫卵分析を行ったが確認できなかった。下記に記載する花粉分析においても花粉が確認されない、または花粉の分解が進み傷んでいることから、堆積環境により分解された可能性が考えられる。

②植物残渣（可食植物の種実や骨）の産出

トイレ遺構1号埋土③（最下部層）の土壌 (200cc・279.7g) について、洗い出した結果、種実遺体 103 個が抽出・同定された。種実遺体は、木本3類群(ヤマモモ、シマサルナシ、キイチゴ属)39 個、草本3類群(イネ、ナデシコ科、ゴマ)に同定される。11 個は同定できず、不明である。種実遺体の保存状態は不良で、果皮・種皮を欠損する個体が多かった。栽培植物はイネの粃の破片1 個、ゴマの種子の破片が2 個確認され、イネ粃片はゴマ種皮片に接着する状態であった。栽培植物を除いた分類群には、木本として広葉樹で常緑高木のヤマモモの核 20 個、常緑または落葉低木のキイチゴ属の核 16 個、落葉籐本のシマサルナシの

種子が3 個見られる。草本には、湿った場所にもやや乾いた場所にも生育する植物のナデシコ科の種子 61 個が認められる。代表的な種実を第4図で示す。

また、二枚貝類の殻皮と考えるものが4 個、巻貝類の蓋と考えるものが6 個検出された（第5図）。貝類の殻皮については、形態から分類群の特定には至っていない。

トイレ遺構1号の種実遺体では、種子ごと食用可能なものがいくつか見られた。栽培植物のゴマは種実を食すことが多く、果実が食用可能なヤマモモ、シマサルナシ、キイチゴ属は種ごと食べる食物である。そのため、これらは人が摂取した後に排泄された可能性も想定される。

ナデシコ科は、ナデシコ属(セキチクなど)やセンノウ属(センノウ、ガンピ)、ハコベ属の一部、ウシハコベなどが食用や薬用に利用され、可食種実と共伴して一定量が確認されており（堀田 1989）、人為的行為(食用や薬用など)に由来する可能性が考えられる。

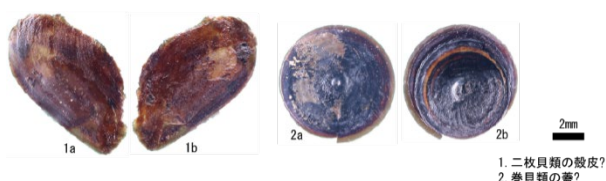
③昆虫遺体の産出

今回、トイレ遺構1号最下部層の埋土③中に昆虫遺体は認められなかった。また、他のトイレ遺構内においても発掘調査中に昆虫遺体は確認できなかった。通常、糞虫類やハエの蛹などが検出される（奈良国立文化財研究所 1992）ことが多いが、堆積場所が好気的環境下であることから、分解・消失した可能性がある。

④土壌理科学性（リンなどの過多）

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある (Bowen1983 ;



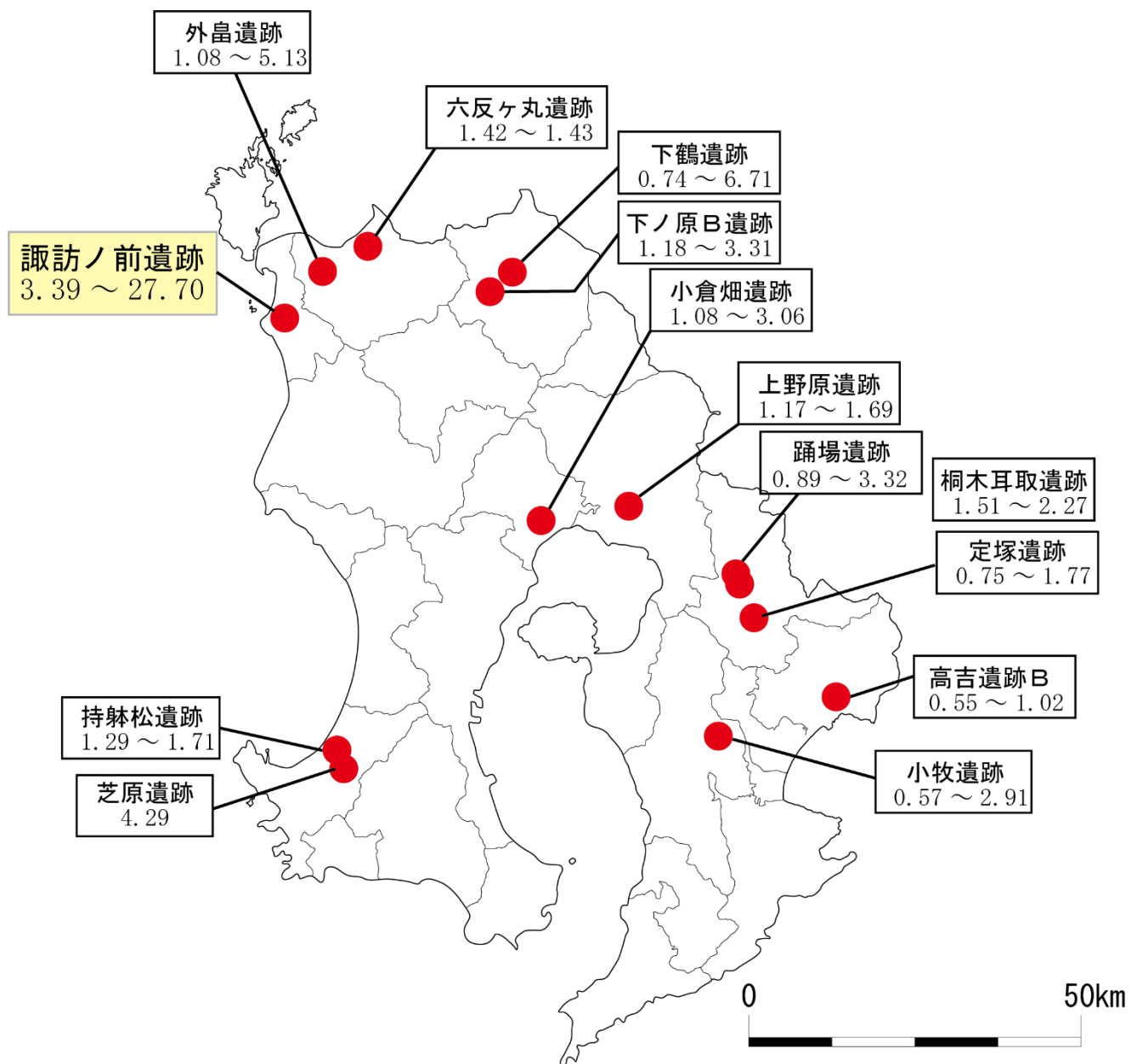
第5図 トイレ遺構1号内貝遺体

Bolt・Bruggenwert1980；川崎ほか 1991；天野ほか 1991）。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。人為的な影響（科学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例がある。また, 1994 ～ 98 年の全国調査における畑土壌のリン酸量は黒ボク土の普通畑で 0.48mg/g, 非黒ボク土で 0.97mg/g となっている（東京都 2019）。いずれの結果においても, 天然賦存量の上限は約 3.0mg/g と判断してよいと考える。

その上で, トイレ遺構 1 ～ 4 号埋土最下部層のリン・カルシウム分析の結果では, 3.0mg/g を超える高い値となった（第 1 表）。特にトイレ遺構 2 号の 27.70mg/g は特筆す

べき数値が得られた。比較試料である諏訪ノ前遺跡の包含層, 土坑 12 号及び同台地上にある北山遺跡の土坑のリン・カルシウム分析と比較してもトイレ遺構内が高い状態であったことが分かる。

さらに, 鹿児島県内の遺跡においてリン酸科学分析の報告がある遺跡（県内 14 遺跡, 100 サンプル）と比較すると 3.0mg/g を超える値となっているのは, 「外畠遺跡」「下ノ原B遺跡」「小倉畑遺跡」「踊場遺跡」「芝原遺跡」「下鶴遺跡」である（第 6 図）。このうち, 外畠遺跡, 下ノ原B遺跡, 小倉畑遺跡, 芝原遺跡, 下鶴遺跡については墓など埋葬に関する遺構を想定している。踊場遺跡は特殊なテラス状遺構で検出されており, 特異的な環境下であったことが想定される。



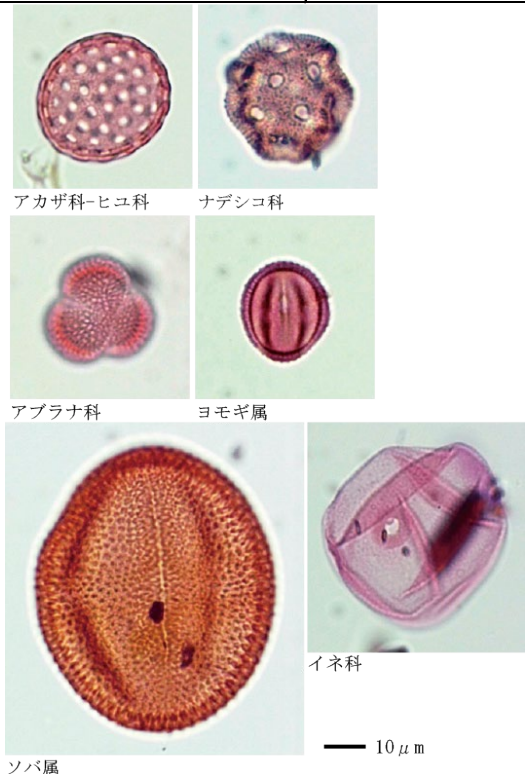
第 6 図 県内遺跡内のリン酸値

第1表 遺構内リン酸値

遺跡名	市町村	遺構名	層位	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)	備考	
諏訪ノ前	阿久根	トイレ遺構 1号	最下層 (③層)	黒褐色	3.39	トイレ遺構	
		トイレ遺構 2号	最下層 (⑤層)	灰褐色	27.70	トイレ遺構	
		トイレ遺構 3号	最下層 (③層)	黒褐色	5.46	トイレ遺構	
		トイレ遺構 4号	最下層 (④層)	褐色	3.49	トイレ遺構	
		D-11区 (基本土層)	IIa	暗褐	1.38	比較試料	
		土坑12号	埋土①	暗褐	0.84		
北山	阿久根	土坑 1号	埋土②	暗褐	2.23	遺体埋納の可能性は低い	
			埋土②	にぶい黄褐	0.60		
六反ヶ丸	出水市	埋納土器	埋土③	褐	1.13		
			外面付着	オリーブ褐	1.43		
小牧	鹿屋市	石組遺構 (土坑 1号)	内部底部	オリーブ褐	1.42		
			床面埋土	オリーブ褐	0.57		
下ノ原B	伊佐市	土坑 1号	III層	黒	2.91	比較試料	
			A	黒	2.21		
			B	黒	1.82		
			C	黒	2.47		
			D	黒	3.31		
			周辺IV層	黒	2.66	遺体埋納の可能性は低い	
高吉B	志布志	竪坑	床着付近埋土	黒褐	1.02		
			埋土	暗褐	0.90		
		基本土層	IVb層	褐	0.55		
			IVc層+VI層	黒褐	0.87		
			VI層	黒	0.99	土坑・廃棄場の可能性低い	
外畠	出水市	SK72	土師甕内埋土	黒褐	4.91	埋葬に関連	
		土坑内埋土	褐	1.08			
芝原	南さつま	SK77	土師甕内埋土	暗褐	5.13	埋葬に関連	
		中世土坑19号	埋土	黄褐	4.29	人骨があった可能性	
桐木耳取	曾於市	I-4区北側土層断面配石遺構	埋土	黒	1.65	墓坑の可能性低い	
			埋土	黒	1.81		
			埋土	黒	2.07		
			埋土	黒褐	1.52		
			埋土	黒褐	1.75		
			埋土	黒	1.77		
			埋土	黒褐	1.65		
			埋土	黒	2.18		
			埋土	黒	2.18		
			埋土	黒	2.27		
			埋土	黒褐	1.72		
			埋土	黒褐	1.78		
			埋土	黒	1.90		
			埋土	黒褐	1.54		
			埋土	黒	1.61		
			埋土	黒	1.51		
踊場	曾於市	テラス状遺構	IIIb層	黄褐	0.89	比較試料	
			IIIb層	黄褐	1.45		
			IIIb層	オリーブ褐	1.62		
			IIIb層	暗オリーブ褐	3.32		
小倉畑	始良市	周溝墓主体部	土壌	黒	2.05	遺体が存在していた可能性	
			土壌	黒褐	2.09		
			土壌	黒	3.06		
			土壌	黒	2.07		
			土壌	黒褐	1.08		
		周溝墓 竪	埋土	黒	2.34		
上野原 (第10地点)	霧島市	1号壺	土器内覆土	黒褐	1.40	リン酸の濃集部は低い	
			土器内覆土	黒	1.38		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.21		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.47		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.38		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.17		
			土器内覆土	黒	1.21		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.14		
		2号壺	土器内覆土(底部)	黒～黒褐	1.08		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.67		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.69		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.64		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.48		
			土器内覆土	黒褐	1.57		
			土器内覆土	黒～黒褐	1.62		
			土器内覆土	黒褐	1.47		
定塚遺跡	曾於市	SH18内土坑	土器内覆土(底部)	黒褐	1.37	墓坑を支持できない	
			埋土	黒褐	0.90		
			埋土	黒褐	0.84		
			埋土	暗褐	0.91		
			埋土	黒褐	0.94		
		SH37内土坑	埋土	黒褐	0.95		
			埋土	黒褐	0.77		
			床埋土	黒褐	0.87		
		SH37	床直上	暗褐	0.92		
			最下面	にぶい黄褐	0.84		
		SK245	埋土	黒褐	1.77		
			サンプル1	にぶい黄褐	0.84		
			サンプル2	黒褐	0.75		
			床面	暗褐	0.75		
持躰松	南さつま市	土坑 1号	埋土	黒褐	1.71	埋葬によるリン酸の富化なし	
		0-9区	IIIb層	黒褐	1.49		
下鶴遺跡	伊佐市	弥生土坑37号	埋土	IIIc層	黒褐	1.29	外的要因によるリン酸の富化
				暗褐色	5.21		
				暗褐色	5.35		
				暗褐色	3.97		
				暗褐色	4.44		
		弥生土坑19号	埋土	暗褐色	4.35		
				暗褐色	2.17		
				褐色	1.46		
				にぶい黄褐色	2.70		
				にぶい黄褐色	2.89		
				にぶい黄褐色	1.88		
				暗褐色	2.21		
		弥生土坑16号内壺	埋土	暗褐色	1.68		
				にぶい黄褐色	2.52		
				黒褐色	5.98		
		872内の土	A	黒褐色	6.71	腐植含量も多い	
2.81	腐植含量も多い						
0.74							
にぶい黄褐色	2.81						

第2表 花粉分析結果

Taxa(分類群)	トイレ1号	トイレ2号
	③層	⑤層
Japanese name(和名)		
樹木花粉		
マツ属複維管束亜属	1	
クマシデ属-アサダ		1
クリ		1
シイ属-マテバシイ属	4	1
コナラ属コナラ亜属	2	1
コナラ属アカガシ亜属	2	2
ハイノキ属		1
樹木・草本花粉		
マメ科	1	
ニワトコ属-ガマズミ属	1	
草本花粉		
イネ科	112	4
イネ属	119	1
タデ属	1	
ソバ属	4	
アカザ科-ヒユ科	14	9
ナデシコ科	7	28
アブラナ科	79	23
タンポポ科	1	
ヨモギ属	10	7
樹木花粉	9	7
樹木・草本花粉	2	0
草本花粉	347	72
花粉総数	358	79
試料1cm ³ 中の花粉密度	2.2	7.5
	$\times 10^4$	$\times 10^2$
未同定花粉	2	4
シダ植物胞子		
単条溝胞子	3	8
三条溝胞子	3	
シダ植物胞子総数	6	8



第7図 花粉写真

これらの結果を総合すると、諏訪ノ前遺跡のリン酸値は通常の環境下で得られる値ではなく、トイレ遺構または土坑墓などの特異的な遺構下のみで得られる数値であるといえる。

⑤花粉分析

花粉はトイレ遺構1号及び2号から検出された。産出した分類群は、樹木花粉7、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉9、シダ植物胞子2形態の計20分類群である。通常、花粉は土坑や堅穴建物跡、基本土層中においても検出され、周囲の環境を示す指標となっている。花粉数を第2表に、主要な分類群の顕微鏡写真を第7図に示す。

トイレ遺構1号については、産出率の高いイネ属をはじめ、雑穀類が含まれるイネ科、栽培植物を多く含むアブラナ科は、いずれも食用となり、ソバの花粉も含め食する際に混入する。やや産出率は低い、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属は、薬用にも食用にもなり、花粉も食する際に混入する。

トイレ遺構2号については、密度は低い、産出率の高いナデシコ科は、春の七草のハコベなど食用になる種が含まれ、薬用にも利用される。アブラナ科は、ナタネ、ダイコンなど多くの栽培植物を含む。アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属はいずれも食用や薬用になる。これらは、食用として利用する際に花粉が混入することがある。産出した分類群は少なく、ハコベ(ナデシコ科)、アブラナ(アブラナ科)の花期は3月から5月頃であることから、反映された環境は限定的である。樹木花粉は少なく、コナラ属アカガシ亜属、シイ属-マテバシイ属などの照葉樹、クリ、コナラ属コナラ亜属などの落葉樹が堆積地周辺に孤立木として生育していたと推定される。

トイレ遺構1・2号ともに風媒花の花粉だけでなく、虫媒花の花粉(ソバ属、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科)などが多かった。

なお、トイレ遺構3・4号においても花粉分析をおこなったが、極めて少ない量であった。産出が悪い場合は、遺構内に取り込まれた量が少なかったことに加え、堆積後に分解・消失した可能性が考えられる。今回の場合は堆積場所が好気的環境下であることを踏まえると、上記の両方が合わさっている可能性が高い。

⑥形態・立地

今回のトイレ遺構は、平面形は円形を呈し、断面がほぼ垂直の立ち上がり、床面は平坦である。さらに周囲の遺構に比べて深いという共通点がある(第1図)。トイレ遺構2号は直径1.6m、深さ1.36mで最大であった。掘り込み面は削平されていることを想定すると、当時の直径、深さはさらに大きかったものと想定される。トイレ遺構1~4号においてトイレを支持する科学分析結果を得られたが、その内の3基については、最下部層が粘質土であった点が共

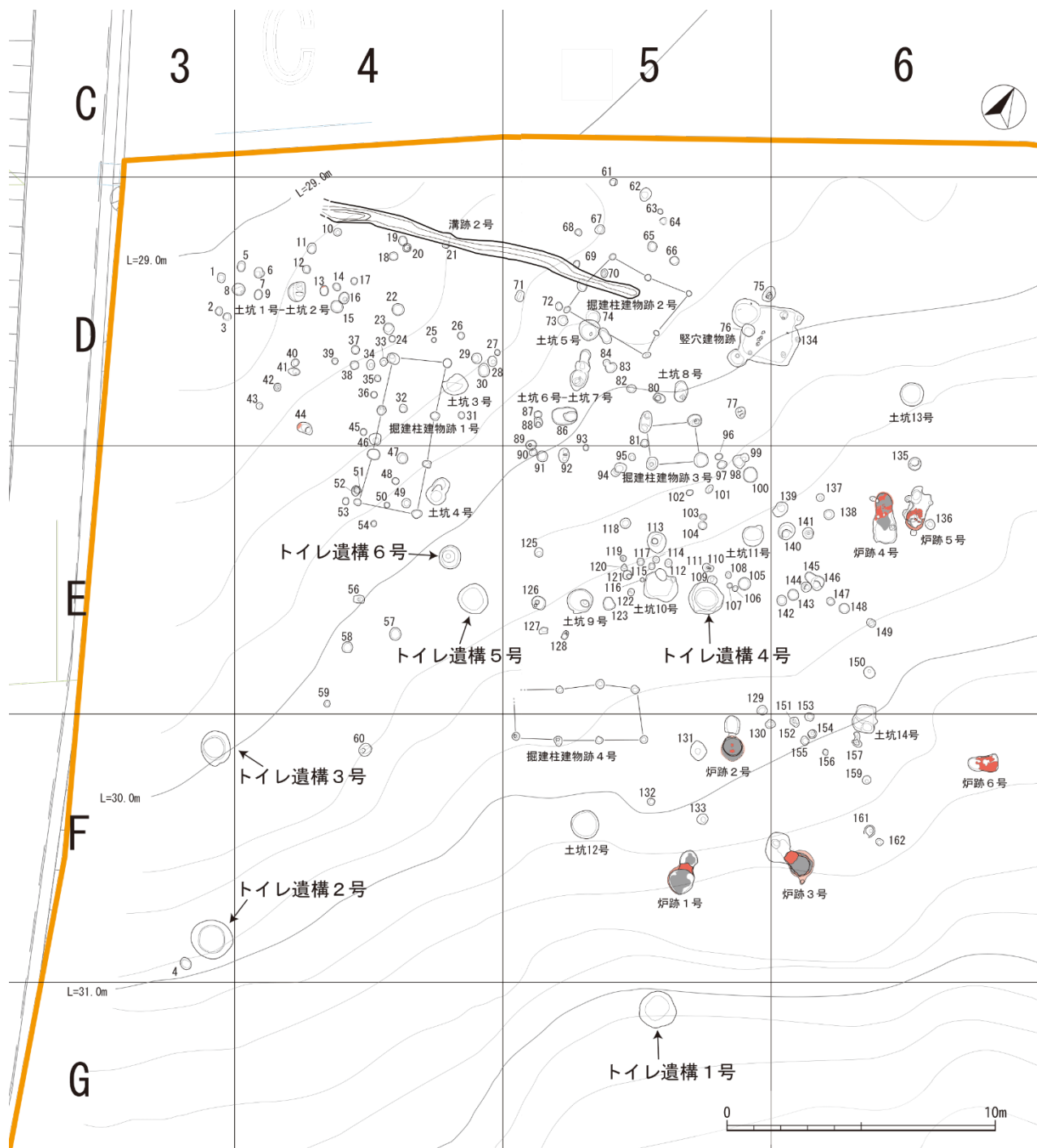
通する。また、埋土の色は黒～暗褐色または褐灰色を呈する。全国的に見られるトイレ遺構の埋土は、「黒色」が主であったが、本遺跡におけるトイレ遺構の埋土には「灰色（褐灰）色」の埋土が認められた。この灰色（褐灰）色の埋土は、トイレ遺構以外の土坑やピット中には同様の埋土がなく、科学分析の結果からも糞便堆積層に該当するため、トイレ遺構に見られる特有な色調の可能性もある。

立地については、諏訪ノ前遺跡全体では西側に集中し、掘立柱建物跡や炉跡などから少し離れた場所に位置している点が共通する。また、トイレ遺構の周辺に建物を構成

する柱穴は確認されていない（第8図）。

⑦ 小結

諏訪ノ前遺跡で検出された遺構について科学分析を行った結果、トイレ遺構として認定した。認定するにあたり、前述した判断基準においてトイレ遺構1号は、「①寄生虫卵の多産」「②植物残渣」「④リンの過多」「⑤花粉分析」の項目でトイレ遺構を支持する結果が得られた。また、トイレ遺構2号では「④リンの過多」「⑤花粉分析」、トイレ遺構3・4号では、「④リンの過多」においてトイレ遺構を支持する結果を得られた。これらの4基には垂直に掘ら



第8図 諏訪ノ前遺跡遺構配置図

第3表 トイレ遺構1号年代測定結果

層位	試料	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	
					1 σ (68.3%確率)	2 σ (95.4%確率)
③層	巻貝の蓋	-10.71 \pm 0.18	1097 \pm 20	1100 \pm 20	1360-1475 cal AD(68.3%)	1310-1525 cal AD(95.4%)
③層	炭化物	-24.26 \pm 0.24	653 \pm 19	650 \pm 20	1295-1309 cal AD(23.0%)	1287-1321 cal AD(41.7%)
					1362-1386 cal AD(45.2%)	1357-1390 cal AD(53.8%)
③層	炭化物	-26.47 \pm 0.24	590 \pm 20	590 \pm 20	1323-1357 cal AD(57.5%)	1307-1364 cal AD(73.2%)
					1392-1399 cal AD(10.7%)	1386-1407 cal AD(22.3%)

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元

れ、床面は平坦であり、他の遺構に比べて深いという形態の類似点も見られたため、総合的に判断しトイレ遺構とした。また、科学分析を実施することができなかった他の遺構を精査した結果、同様の形態を呈する2基を加え、計6基をトイレ遺構と判断した。

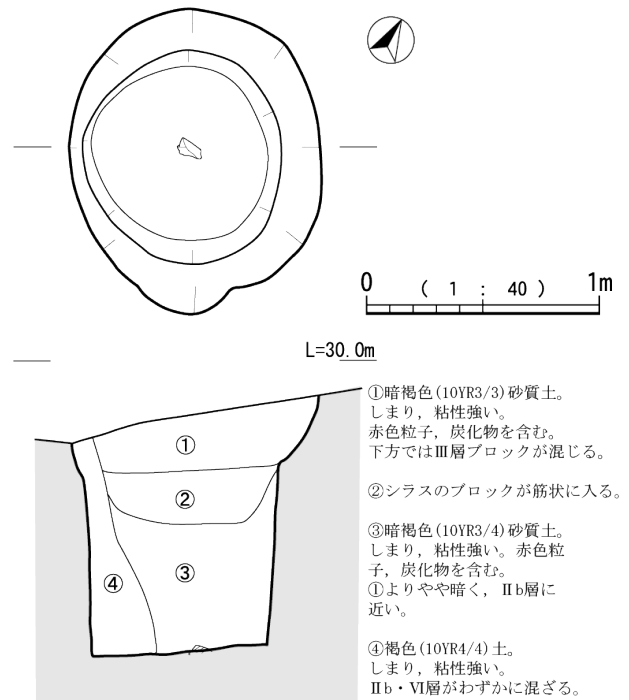
3 トイレの景観と食生活について

トイレ遺構1号の放射性炭素年代測定より14世紀の年代が得られた(第3表)。その当時の生活様式について推定したい。

トイレと聞くと現代では、「人にあまり見られたくないもの」という認識がある。一方で中世の当時はどうだったのだろうか。前述したとおり、今回の調査においてトイレ遺構の周辺に建物を構成するような柱穴は検出されていない。また、花粉分析中に風媒花の花粉が含まれる点においても、比較的オープンな場所に立地していたと考えることができる。また、永禄6(1563)年に来日したポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは「日欧文化比較」の中で、京都を見聞し「われらの便所は家屋の後方の人目のつかないところになければならない。彼らは(家屋の)前方にあり、みなに開放されている」と記している(松田ほか1983)。この記載においても、想定するオープンなトイレと矛盾しない。ただし、草むらや林の中など人目のつかない場所に穴を掘って、トイレとして利用した可能性は残る。

次に、トイレが「汲取り式」か、もしくは「埋め捨て式」か、について考察したい。中世の汲取り式トイレで有名なものが、一乗谷朝倉氏遺跡で報告されたトイレ遺構(SF1617)である。時代は15世紀末～16世紀末とされ、「枳形汲取り式トイレ」と呼ばれる(福井県1981)。長さ1～2m、幅0.5～1m、深さ0.5～1m程の枳形の掘り込みで、四方の壁に3～4段の河原石を積んだ遺構が数多く発見されている。時代は諏訪ノ前遺跡と比較すると新しく、また丁寧な作りである。汲取り式を利用するのは日本全国的に16世紀からとされ(黒崎1998)、諏訪ノ前遺跡の年代より新しい時代となる。

トイレ遺構3号



第9図 トイレ遺構3号

また、トイレ遺構2号内に堆積した花粉から比較的短期間において堆積したことがわかっている。そのため、一時的にトイレとして利用し、その後埋めた可能性が高い。同様の使い捨て式のトイレが、神奈川県鎌倉遺跡群政所跡で報告されている(政所跡発掘調査団1991)。時代は12～13世紀で、使っていっぱいになったらそのまま穴は放棄することが想定されている(黒崎1998)。

以上のことから諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構において1・2・4・5・6号については「埋め捨て式」であったと想定される。しかしながら、トイレ遺構3号のみ壁側に垂直堆積があり、堆積構造が他と異なっていた(第9図)。そのため、「汲み取り式」であった可能性もある。

最後に、食していたものであるが、トイレ遺構1号内からはゴマやイネ、ヤマモモ、シマサルナシなどが検出されている。また花粉からはソバも確認された。そのため、イネやゴマ、ソバなどは栽培し、ヤマモモやナルナシ、キイ

第4表 トイレ遺構の可能性のある遺跡一覧

基準	遺跡名	市町村	遺構番号	上端	下端	径 (長軸×短軸)	検出面からの深さ (m)	最下層の埋土	遺物	備考
	諏訪ノ前遺跡	阿久根市	トイレ遺構1号	円形	円形	1.35	0.91	黒褐色粘質土	時期不明小片3点	科学分析結果よりトイレ遺構認定、14世紀
			トイレ遺構2号	円形	円形	1.60×1.44	1.40	褐灰色粘質土	時期不明小片9点	科学分析結果よりトイレ遺構認定
			トイレ遺構3号	楕円形	円形	1.32×1.08	1.04	暗褐色粘質土	古代須恵器、石蔵	科学分析結果よりトイレ遺構認定
			トイレ遺構4号	円形	円形	1.27×1.20	0.91	褐色土。粘性強い。	時期不明土器など29点	科学分析結果よりトイレ遺構認定
			トイレ遺構5号	円形	円形	1.14×1.12	0.64	褐灰色土。粘性強い。	土師器片2点	
①	芝原遺跡	南さつま市	土坑19号	略方形	円形	1.50×1.30	1.50	不明	青磁小片、中世土師器など6点	シラス層まで掘り込み
	知覧城跡	南九州市	土坑1	円形	円形	1.30	2.90	灰褐色土	土師器皿12枚	虎口Aで検出。高い数値のリン(2.24～4.08wt%)。一挙に埋戻されている。
			土坑2	方形	方形	0.70	1.85	黒色粘質土	中国産天目碗(14・15世紀)1点	土器近くで検出。高い数値のリン(3.48wt%)。一挙に埋戻されている。
			土坑3	方形	方形	0.90	1.60	灰白土の弱粘質土	土師器杯、青磁碗、備前など	AD1290～1420年の年代。高い数値のリン(1.63～1.97wt%)イネ・ムギ類の粗が多量。
			土坑7	円形	円形	0.80	2.05	褐色土	青磁碗、イノシシの骨、土師器	短期間に埋め戻された可能性。
	市頭C遺跡	姶良市	SK38	方形	方形	0.94×0.65	0.68	暗茶褐色粘質土	中世土師器片83点	リン酸値高い(10.17～18.76wt%)、鳥類の骨片検出
	北山遺跡	阿久根市	土坑5号	円形	円形	1.36×1.26	2.76	黒褐色土・灰色粘質土	土師器71点、須恵器3点など	リン酸の値が高い(14.80wt%)。
	志布志城跡	志布志市	方形土坑1～6	方形	方形	0.60～0.90×0.80～1.20	0.5～2.00	不明	—	花粉分析結果○、寄生虫卵分析× 種実分析×
	日輪城跡	曽於市	井戸	円形	方形	1.50	>2.00	暗灰褐色土・黒褐色粘質土	白磁皿・青磁模花皿	埋没の過程で鍛冶炉等に転用した可能性 花粉分析結果○
	栢城跡	いちき串木野市	土坑3	円形	円形	0.90×0.90	1.60	淡灰黒褐色粘質土	—	雪隠の可能性
②	宇都上遺跡	鹿屋市	土坑27	円形	円形	1.16×1.08	1.84	黒色でやや軟質	—	近世の遺構の可能性
	上水流遺跡	南さつま市	4号土坑墓	隅丸長方形	方形	0.90×0.80	1.90	明茶褐色土	土師器小皿	人骨なし
	大龍遺跡D地点	鹿児島市	8号土坑	隅丸長方形	隅丸長方形	1.04×0.96	1.32	不明	陶磁器・土師器 魚骨片・貝殻	583点の遺物(17～18世紀多い) 廃棄坑の可能性もある
	上加世田遺跡	南さつま市	井戸状遺構	円形	円形	1.45×1.30	1.25	不明	縄文土器・青磁染付	シラス層まで掘り込み
	平山城跡	南九州市	筒状土坑	円形	円形	1.00	2.20	粘質土	土師器・青磁 石臼・瓦質土器など	下部に水分が多い状態
	清水城跡	鹿児島市	井戸状型遺構	円形	円形	1.20	2.20	濡っぽい土	—	シラス層まで掘り込み
	白糸原遺跡	南さつま市	土坑14号	円形	円形	1.22	1.41	不明	—	
	虎居城跡	さつま町	土坑6号	方形	方形	0.90×0.72	2.74	不明	礫	シラス層まで掘り込こんだ素掘り
			土坑8号	方形	方形	1.10×1.01	2.20	不明	—	シラス層まで掘り込こんだ素掘り
	北山遺跡	阿久根市	土坑2号	円形	方形	2.10×1.90	3.00	上位層の水平堆積	—	掘立柱建物北東側で検出

- ① 自然科学分析結果
- ② 諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構に形態が類似する

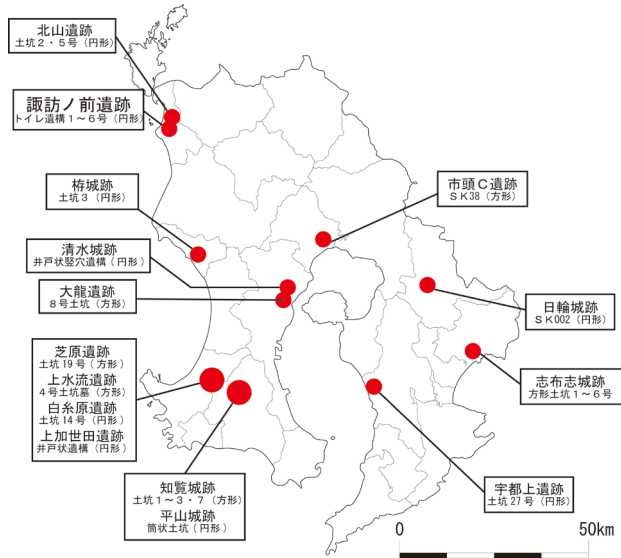
チゴなどは近くの山で採取していた可能性がある。また、貝の蓋も検出されており、遺跡の立地が海や川が近いことから、魚貝類を摂取していた可能性がある。ただし、寄生虫卵が検出されたということは、生のまま食し、一部は汚染されたことを示唆する。

4 トイレ遺構の可能性のある遺構について

前述した通り、トイレ遺構の可能性のある遺構は複数報告がある。諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構の形態や科学分析結果を踏まえて、鹿児島県内で確認されている遺構（主に土坑）について類似性の高い遺構を抽出した（第4表、第10図）。抽出基準としては、「①自然科学分析結果」、「②諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構に形態が類似する」とした。

① 自然科学分析結果

前述した諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構では「リン酸分析」「花粉分析」から遺構の判定を行った。これらの科学分析は、他の遺跡においても実施されており、その結果と形態から下記の遺跡を抽出した。形態については、諏訪ノ前遺



第10図 トイレ遺構の可能性のある遺跡

跡のトイレ遺構の平面形は円形であったのに対し、下記の遺構は方形である。方形の中世トイレ遺構は柳之御所遺跡や泉屋遺跡などでも確認されているため、諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構と平面形は異なるがトイレ遺構の可能性が高いと判断した。なお、平面形以外の垂直に掘られ、床が平面で深いなどの点は類似する。

(1) 南さつま市芝原遺跡

土坑 19 号は、長軸 1.5m、短軸 1.3m の略方形で深さは約 1.5m である。土坑内の埋土の科学分析からリン酸含量は 4.29mg/g の値が得られている。これは、天然賦存量(3.0 mg/g) を明らかに上回る。埋土情報については不明であるが、周囲の掘立柱建物跡から離れている。

(2) 南九州市知覧城跡

土坑 1～3、土坑 7 において、リン酸の値が高い。なお、知覧城跡ではリン・カルシウム含量分析を行っているが諏訪ノ前遺跡とは分析方法が異なる。ここでは、エネルギー分散型蛍光 X 線システムを用いて、元素の同定及び FP 法による定量分析を行っている。一般に、未耕作地の土壌におけるリン酸含量は 0.1～0.5% 程度とされる。

土坑 1 は、虎口近くで検出され、直径 1.3m、深さ 2.9m の円形である。埋土は砂質性の灰褐色土壌で一挙に埋め戻されたとみられる。土坑 A の土壌は高い数値のリン分(下層より 2.24～4.08wt%) が検出されている。

土坑 2 は、土塁の近くから検出され、直径 0.7m の方形、深さは 1.85m である。下から 2 番目の層である⑥層より 14・15 世紀の天目碗の破片が出土している。最下部の層は黒色(10YR1.7/1)の粘質土層で粘性が強く、諏訪ノ前遺跡に類似する。これも一挙に埋め戻された可能性がある。底部にはリン分を多く含む(3.48wt%)。

土坑 3 は直径 0.9m、方形で深さ約 1.6m である。底部には直径約 0.15m、厚さ約 0.5m の扁平な石が置かれている。VI 層中の木炭からは AD1290～1420 年の年代が得られている。また、藁や籾殻、灰などが検出している。最下部層にあたる⑥層は、灰白色を呈し、一部黒褐色弱粘質土である。リンの値も高い(1.63wt～1.97%)。

土坑 7 は、直径約 0.8m、深さ 2.05m の円形の土坑である。埋土⑨からほぼ完形の青磁碗と埋土⑩からイノシシの左足上腕骨、種子骨、貝殻片が出土している。短期間に埋め戻れたと考えられる。

(3) 始良市市頭 C 遺跡

SK38 は、リン酸値が高い。形態は長径 0.94m、短径 0.65m、深さ 0.68m で、東西に長軸をもち、長方形を呈する。床面は平坦であり、最下部の埋土は暗褐色粘質土である。ほぼ垂直に丁寧に掘られており、埋土は高い湿気のある埋土で、粘質土を側面に貼り付けた形跡があった。知覧城跡と同様の土壌分析を行い、リン酸の含量が多い(10.17～

18.76wt%)。ウォーターセパレーション分析で鳥類の骨片が検出されており、報告書中でも墓坑の可能性は低いと考えている。出土遺物は、中世の土師器が 83 点あり、イネ・ムギ類の穀類が多く検出されている。

(4) 阿久根市北山遺跡

土坑 5 号は土坑内のリン酸の値が高い。場所は諏訪ノ前遺跡と隣接する。形態は長軸 1.36m、短軸 1.26m で深さは 2.76m を呈する。埋土の蛍光 X 分析の結果からは、炭酸カルシウムが多くなく、漆喰の可能性は低い。一方でリン酸値は 14.80wt% と高い値が得られた。同遺跡内の土坑 13 号の分析結果(0.235wt%)と比較すると非常に高い。埋土の下層は水平体積を呈しており、徐々に埋まっていった状況であった。

(5) 志布志市志布志城跡

方形土坑 1～6 は、リン酸値と花粉分析結果から判断した。垂直掘りをしており、径は 0.6～1.2m、深さは 0.5～2m である。方形土坑 3・4・6 は寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定の科学分析を行っている。寄生虫卵及び明らかな消化残渣は検出されなかった。花粉分析ではトイレ遺構から検出例が多いアカザ・ヒユ科が部分的に少量認められた。

(6) 曾於市日輪城跡

SK002 は径 1.5m の円形を呈し、深さは 2m 以上である。底部は 0.66×1.08m の長方形を呈する。最下部に灰褐色土の上に黒色の粘土層が存在している。そのため、開削当初は停水していたことが想定される。また、最上層には礫が大量に投棄されている。報告書内では井戸としての機能を想定している。埋土の上層礫中からは低高台の白磁皿が、最下層からは青磁稜花皿がほぼ完形で出土している。また埋土 6 点を花粉分析した結果、イネ科、アカザ・ヒユ科、アブラナ科が優占しており、これは諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構と同様の結果といえる。一方、寄生虫卵は検出されなかった。

② 諏訪ノ前遺跡のトイレ遺構に形態が類似する

自然科学分析はしていないものの、垂直掘りをしており、深い遺構を報告する。なお、平面形は円形及び方形の 2 つのパターンが見られたが、断面形や埋土状況などから判断した。またトイレ遺構の可能性があると考えますが、形態だけでなく土坑墓、井戸跡との明確な判別は難しい。これについては、前述した科学分析を行い、より慎重に遺構について検討する必要がある。

(1) いちき串木野市梶城跡

土坑 3、土坑 4 は形態及び埋土からトイレ遺構の可能性はある。土坑 3 は直径 0.9m、深さ 1.6m の円形である。埋土は全体的にしまりがない。報告書では「雪隠の可能性も考えられる。」としている。最下部は淡灰黒褐色粘質土で

ある。土坑4は、長径3.5m、短径1.2m、深さ1.5mを呈する。埋土の下層は木炭やシラスの粒が混じる粘性のある土である。

(2) 鹿屋市花岡町宇都上遺跡（F地点）

土坑27号は外径1.16×1.08m、深さが1.84mを測るほぼ円形の土坑である。遺物の出土はなく、最下部の埋土は黒色である。

(3) 南さつま市上水流遺跡

4号土坑墓と報告しているがトイレ遺構の可能性はある。平面形はほぼ隅丸長方形の0.90×0.80m、深さ1.90m。底面から数cm浮いた状態で完形の土師器小皿と土師器皿が出土している。人骨の出土はない。

(4) 鹿児島市大龍遺跡D地点

No.8土坑は長径1.04m、短径0.96mで平面隅丸方形、深さは1.32cmである円柱状の土坑である。竖掘りで壁面も最も良く整っており、報告書内では墓坑としている。しかしながら、陶磁器を多量に包含しているため、一部に集中しているわけではなく、明確に判断ができていない。また、魚骨片や貝殻の残滓なども多く、廃棄坑の可能性もありうる。

(5) 加世田市上加世田遺跡（第Ⅰ地点・第Ⅱ地点）

井戸状遺構もトイレ遺構の可能性はある。長径1.45m、短径1.30mの楕円形を呈し、深さは1.25mである。シラス層まで掘り込んでおり、縄文土器や青磁染付などの磁器が出土している。埋土は不明。シラス層まで掘り込んでいるため、井戸としての機能が低く、トイレ遺構の可能性が高いと判断した。

(6) 南九州市平山城跡（川辺城跡）

筒状土坑はトレンチ内で確認されており、直径1m、深さ2.2mである。土坑内の下部には粘質土がみられ、水分が多い状態であった可能性が高い。遺物は出土していない。この遺構も規模と最下部の埋土状況からトイレ遺構の可能性が高いと判断した。

(7) 鹿児島市清水城跡

井戸状竪穴遺構はトイレ遺構の可能性はある。溝状遺構の北端に位置し、溝内からシラス内に掘り込まれている。円形の井戸状の落ち込みで、上面径約1.2m、深さ2.2mである。底へいくにつれてややすぼまる形である。遺物の出土は全く見られず、底面に近づくにつれて湿っぽい土となっている。上加世田遺跡と同様にシラス層内での井戸との機能は低いと考え、トイレ遺構とした。

(8) 南さつま市白糸原遺跡

土壇墓14号はトイレ遺構の可能性はある。平面形は円形、底面も円形を呈する。上端の径は1.22m、下端の径は0.68m。深さは1.41mである。埋土情報は不明で、出土遺物もない。

(9) さつま町虎居城跡

土坑6号、土坑8号は方形の土坑である。土坑6号は、長軸0.9m、短軸0.72m、深さ2.74mを呈する。土坑8号は長径1.1m、短径1.01mで深さ2.2mを呈する。土坑6号は礫がわずかに混じるが、土坑8号は何も検出されなかった。この2つの土坑を含めて周囲の土坑はシラスを掘り込んだ素掘りで、側面はほぼ垂直に、底面は水平に仕上げられている。

(10) 阿久根市北山遺跡

土坑2号についてもトイレ遺構の可能性はある。2号については科学分析を行っていないが、規模は5号と同程度であり、長軸2.1m、短軸1.9mの円形土坑で、深さは3mと深く掘り込まれている。また、土坑2号を囲むように掘立柱建物跡2号が検出されている。

5 おわりに

寄生虫卵や花粉は、乾湿の繰り返しにより分解することが知られ、リン酸は遺構外へ流出することがある。そのような中で、科学的な裏付けによってトイレ遺構が発見されことは重要である。諏訪ノ前遺跡は14世紀のトイレは、比較的オープンな立地に形成され、使用後は埋めることにより、糞便は処理した可能性が高い。トイレ遺構が比較的近い地点で複数基あることを考えると、トイレを埋めた後に、その付近に新たなトイレを設置したとも考えられる。また、トイレ内から検出された種実や花粉から当時は栽培していたと想定されるイネやソバ、ゴマなどと、採取してきた果実、貝類などを食していたことが明らかになった。

県内のトイレ遺構の可能性のある遺構は、科学分析により裏付けをされていないものも含めると、これまで発掘報告されている遺跡でもいくつか見られる。形状は、方形または円形と平面形は異なるが、垂直で深く、床面も平坦であることが多い。平面形から、遺跡の性格や地域差で大きな傾向をつかむことはできなかったが、今後新たなトイレ遺構が発見され、データが蓄積していく中で、遺跡の性格や地域差によって傾向が表れる可能性がある。

今後は中世の遺跡等の発掘において、今回検出された形態や立地を基にトイレ遺構の可能性を検討する必要がある。その際は、遺構の立地と埋土情報及び科学分析（寄生虫卵分析、花粉分析、リン・カルシウム分析、種実同定分析等）を行い、総合的に判断することが重要である。

謝辞

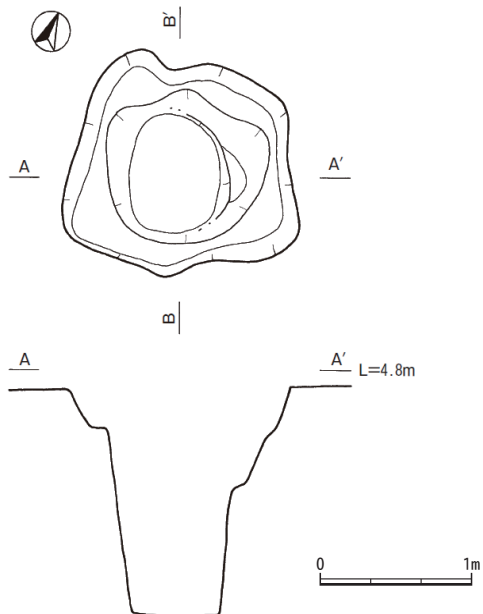
発掘調査から報告書刊行, 本論をまとめるにあたり下記の皆様よりご指導・ご助言を頂戴した。

小畑弘己 金原正明 川口雅之 川野聖人 黒川忠広
松山初音 眞邊 彩 三垣恵一 (五十音順・敬称略)

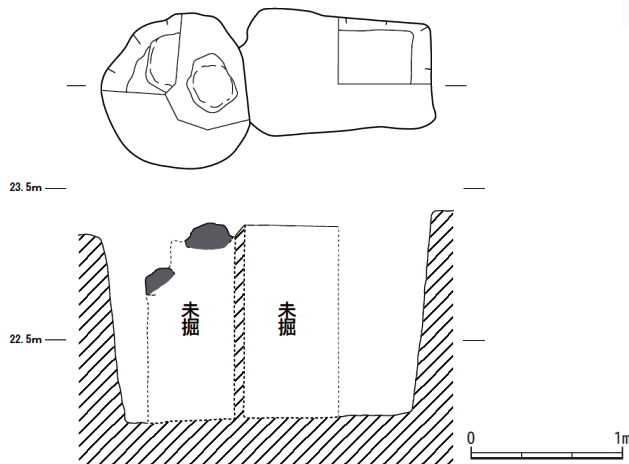
また, 査読者の建設的なコメントをいただき, 本論は大きく改善された。深く感謝申し上げます。

【参考文献】

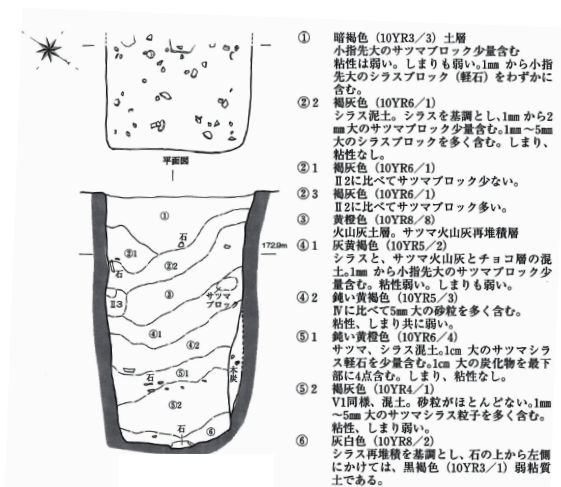
- 始良市教育委員会 2013 『市頭 A 遺跡・市頭 B・C 遺跡』
始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 1991 『中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量』農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 28-36.
- Bolt, G. H. ・Bruggenwert, M. G. M 1980 『土壌の化学
岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳』学会出版センター 309p.
- Bowen, H. J. M. 1983 『環境無機化学-元素の循環と生化学- 浅見輝男・茅野充男訳』博友社 297p
- 知覧町教育委員会 2006 『知覧城跡 (三)』鹿児島県知覧町文化財調査報告書第 12 集
- 福井県教育委員会朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ—昭和 55 年度発掘調査整備事業概報一』
- 福岡市教育委員会 1994 『福岡市鴻臚館跡 4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 372 集
- 堀田満 (代表) 編 1989 『世界有用植物事典』平凡社 1499p
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2002 『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (34)
- 2004 『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (71)
- 2005 『白糸原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (86)
- 2008 『上水流遺跡 2』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘報告書 (121)
- 2008 『鷲ヶ迫遺跡 北原中遺跡 宇都上遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (132)
- 2009 『下ノ原 B 遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (137)
- 2010 『梅城跡 第 1 分冊』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘報告書 (155)
- 2011 『下鶴遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (163)
- 2012 『芝原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (170)
- 2012 『外島遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘報告書 (175)
- 鹿児島市教育委員会
- 1993 『清水城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 (16)
- 2006 『大龍遺跡 D 地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 (48)
- 加世田市教育委員会 1985 『上加世田遺跡— 1』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
- 鹿島町教育委員会 1995 『史跡石動山環境整備事業報告書Ⅱ』
- 川辺町教育委員会 1984 『平山城跡』川辺町埋蔵文化財報告書 (1)
- 川崎 弘・吉田 濤・井上恒久 1991 『九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量』農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発 23-27.
- 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 2025 『北山 2』(公財) 埋蔵文化財調査センター発掘報告書 (58)
- 2025 『諏訪ノ前遺跡』(公財) 埋蔵文化財調査センター発掘報告書 (60)
- 黒崎 直 1998 『トイレ遺構お総合的研究—発掘された古代・中世トイレ遺構の検討—』平成 7 年～9 年度科学研究費補助金 (基盤研究 A) 研究成果報告
- 政所跡発掘調査団 1991 『神奈川県鎌倉市政所跡』
- 松田毅一・E ヨリッセン 1983 『フロイスの日本覚書』中公新書
- 奈良国立文化財研究所 1992 『藤原京跡の便所遺構—右京七条一坊北西坪—』
- 翁長武司・池畑耕一 2015 『考古資料から見た鹿児島県におけるトイレ遺構の変遷』鹿児島考古第 45 号 p 93-109
- 大隅町教育委員会 2003 『日輪城跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書 (28)
- 大田区立郷土博物館編 1997 『トイレの考古学』東京美術館
- 志布志市教育委員会 2012 『志布志城 3 内城跡 第 3・4・5 次調査』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
- 東京都産業労働局農林水産部食料安全課 2019 『土壌診断基準』



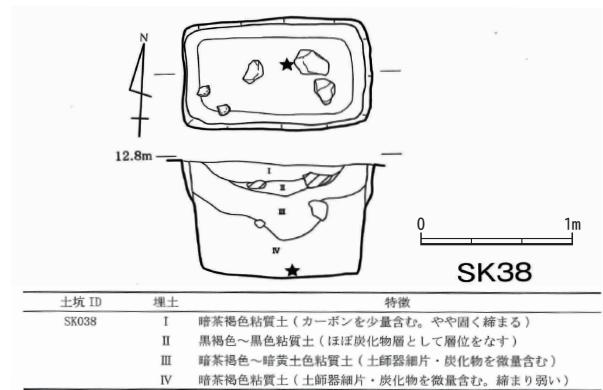
芝原遺跡（土坑 19 号）



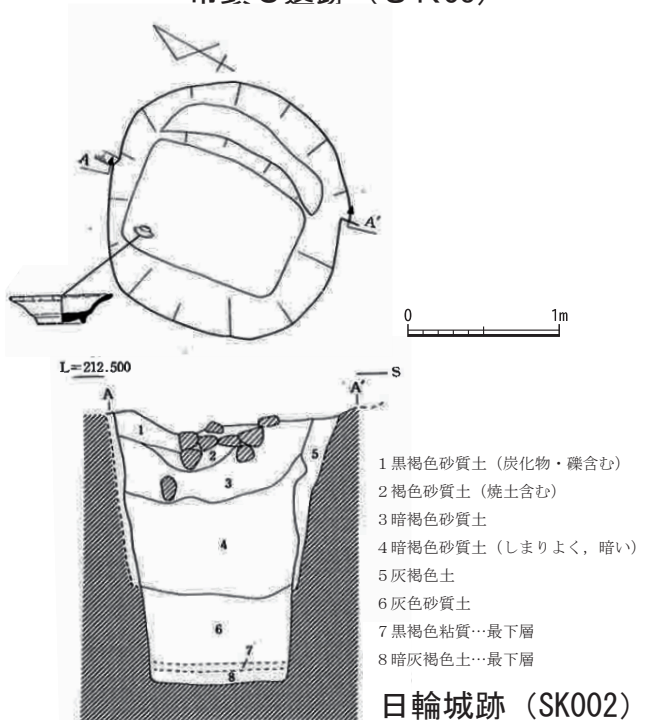
志布志城跡（方形土坑 1）



知覧城跡（土坑 3 号）

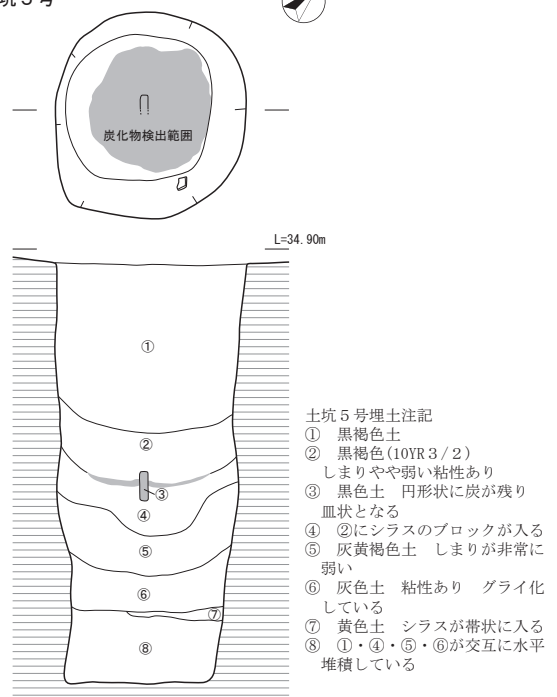


市頭C遺跡 (SK38)



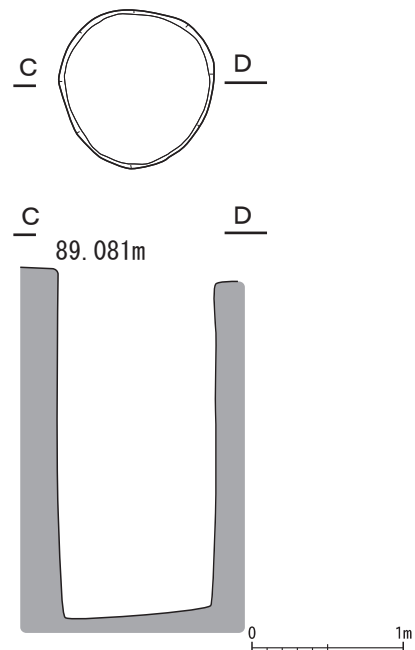
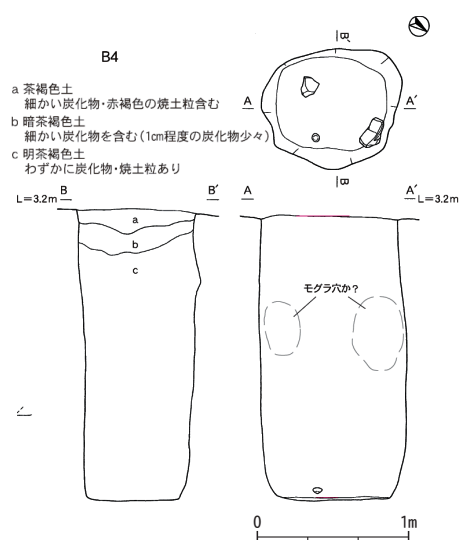
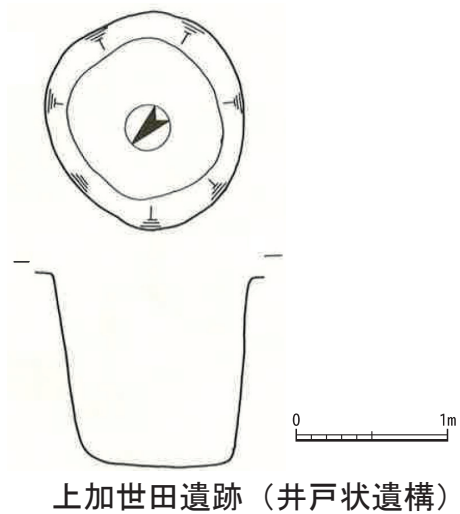
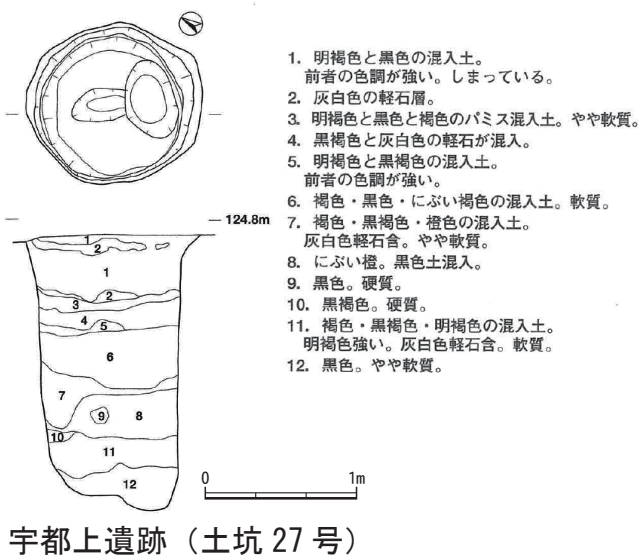
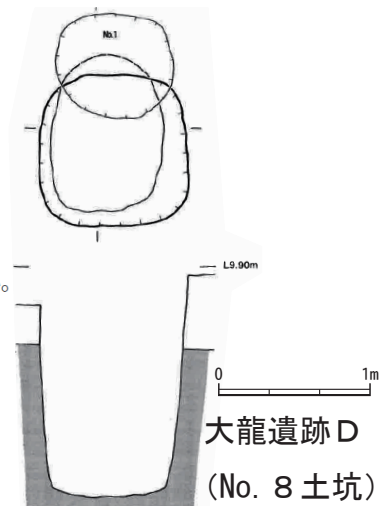
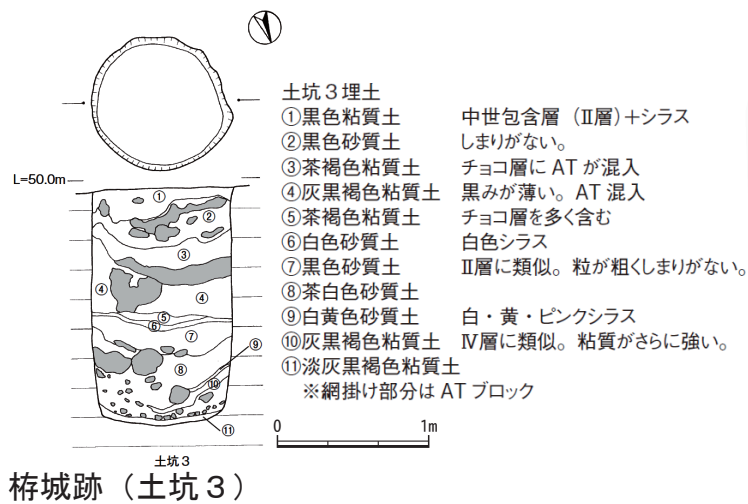
日輪城跡 (SK002)

土坑 5 号

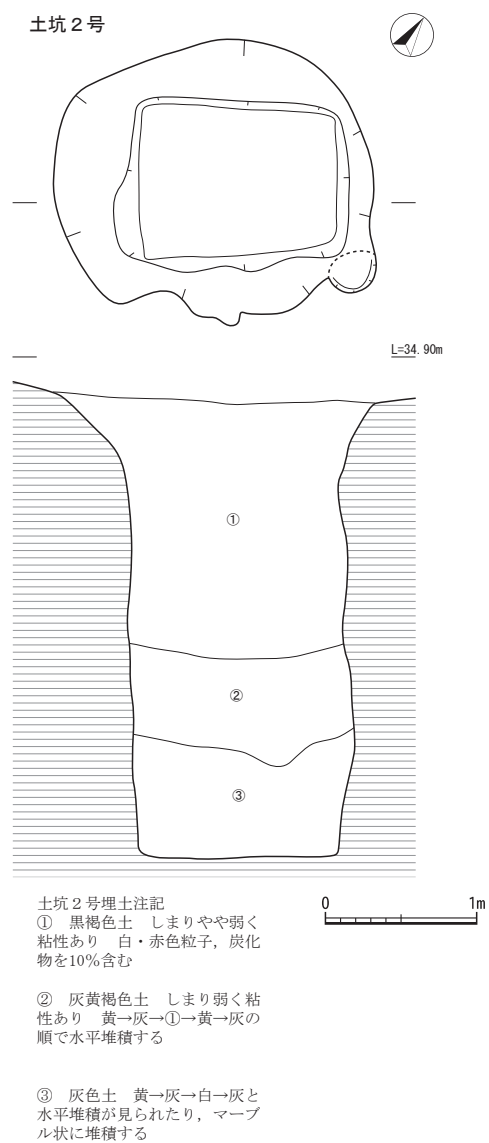
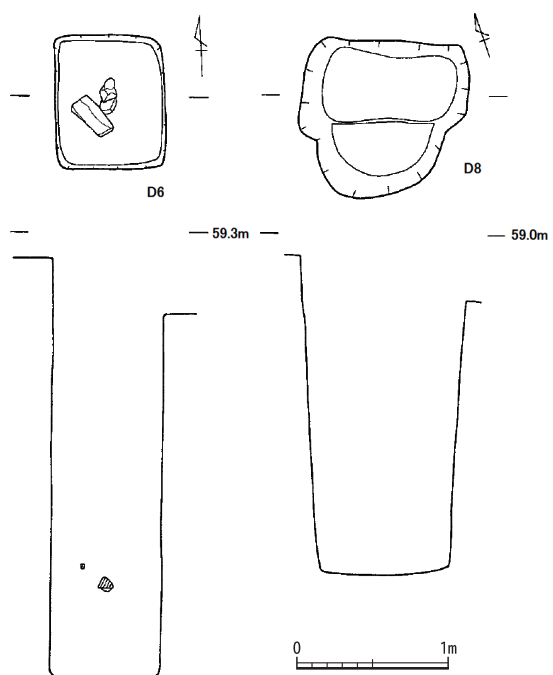
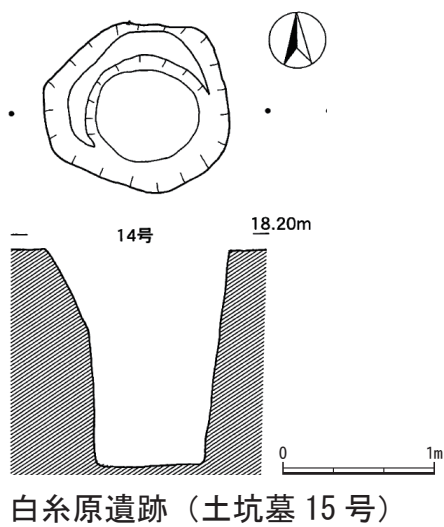
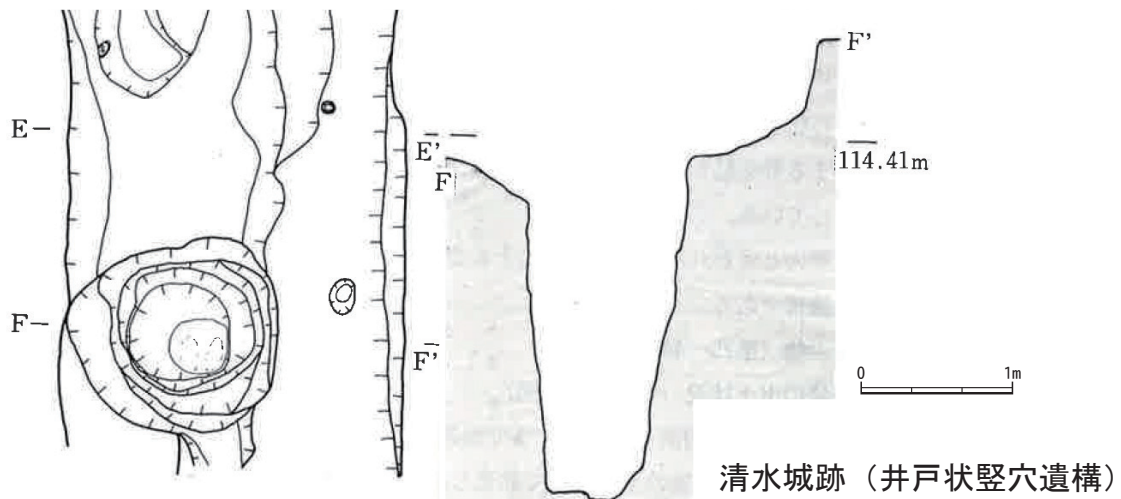


北山遺跡（土坑 5 号）

第11図 トイレ遺構の可能性がある遺構



第12図 トイレ遺構の可能性がある遺構



北山遺跡（土坑 2 号）

第 13 図 トイレ遺構の可能性がある遺構

薩摩・大隅における火打石の登場と石材

藤木 聡

The emergence and materials for flint in Satsuma and Osumi

Fujiki Satoshi

要旨

本稿では、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵資料から新たに見つかった火打石について報告する。大島遺跡の火打石は、薩摩・大隅地域における現状で最古の火打石である。また、薩摩・大隅地域の火打石石材は、石英・鉄石英・玉髄・碧玉・チャート・その他の珪質石材等があり、古代から近世に至るまで石英が用いられたこと、薩摩地域では中世に鉄石英の利用が、近世以降には玉髄の利用がそれぞれ加わっていた。

キーワード 火打石、火打金、石英、鉄石英、玉髄

1 はじめに

人と火の歴史を知るうえでは、火起こしの道具とその技術等を明らかにすることが重要である。そこで、本稿では、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵資料から新たに見つかった火打石について報告するものである（註1）。報告資料は、①発掘調査報告書未掲載品の中から見出された大島遺跡の3点・犬ヶ原遺跡の1点・鍛冶屋馬場遺跡の1点・柗城跡の5点・上野城跡の1点、合計5遺跡11点の火打石および火打石の欠片、②発掘調査報告書へ別器種で掲載されていたものの今回の調査で火打石であるとわかった小倉畑遺跡の1点・山口遺跡の2点、合計2遺跡3点の火打石、①②合わせて7遺跡14点の火打石および火打石の欠片である。

2 関係する調査・研究史

薩摩・大隅地域においては、火打石やその可能性があると考えた石器の報告例が増加している。鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵分では、小倉畑遺跡・チシャノ木遺跡・上水流遺跡・向井原遺跡・柗城跡・二渡船渡ノ上遺跡・虎居城跡・山口遺跡・大願寺跡・安良遺跡・新城跡・諏訪ノ前遺跡・北山遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2002a・2008・2009a・2010a・2010d・2011a・2011b・2013・2024、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2020・2025a・2025b・2025c）、市町村教育委員会や大学による発掘調査では、牧遺跡（有明町教育委員会2005）、志布志城跡・上苑A遺跡（志布志市教育委員会2018・2021）、高城跡（垂水市教育委員会2018）、鹿児島大学構内遺跡（鹿児島大学埋蔵文化財調査室2010、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター2015・2020・2025）が挙げられる（註2）。

これら火打石等の掲載された発掘調査報告書が2000年代以降の発行で占められることからわかるとおり、薩摩・大隅地域における遺跡出土火打石の調査・研究等の歴史は

この20年ほどと新しい。そのような中、宮田栄二氏が、先史時代の石器石材と火打石との関係や鹿児島県域の火打石産地に関していち早く言及している（宮田2003）。これは、薩摩・大隅地域の遺跡出土火打石をめぐる調査・研究史における画期であるとともに、火打石への考古学的関心が高いとは言えなかった当時の九州地方の考古学にあっても先駆的な内容であった。

この前後、筆者は、宮田氏の言及や火打石研究会のWebサイト等にヒントを得ながら火打石・火打金の出土例を検索し、九州各地の遺跡から出土した火打金16点、火打石については未図化資料を合わせて20点に満たないながら集成した（藤木2004）。同集成で薩摩・大隅地域の遺跡出土火打石として取り上げた隼人町（現霧島市）の弥勒院遺跡の18世紀後半～19世紀前半と推定される遺構出土品については、調査担当の重久淳一氏からのご教示であった。また、藤木2004を受け、渡辺芳郎氏から、有明町（現志布志市）内の遺跡で火打石の出土例があること、「三国名勝図会」に火打石産地等の情報掲載があることをご教示いただいた。

その後、上床真氏により大隅・薩摩、奄美地域の火打石が集成され、火打石については弥勒院遺跡・柗城跡・小倉畑遺跡・虎居城跡で出土していると紹介された（上床2009）。また、後世の火打石が先史時代の石核等と誤認されている例が日本各地にあるが、油免・本寺遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2010b）で縄文時代の石核と報告された資料について、古代以降の火打石であると再評価された（藤木2011）。

なお、火打金については、大隅・薩摩、奄美地域の古代以降の鉄製品集成の中で取り上げられ（川口2008）、次いで上床氏により火打石とともに集成がなされた（上床2009）。そして、最新では、大隅地域において桑幡氏館跡・安良遺跡・横川城跡の4点、薩摩地域において大島遺跡・

上野城跡・持鉢松遺跡・上水流遺跡・虎居城跡・上ノ平遺跡・中之城跡・芝原遺跡の12点、奄美地域において屋鈍遺跡の1点の火打金が知られ、8～9世紀代と推定された大島遺跡例を最古として、古代から近世までのおおよその変遷があきらかとなるとともに、考古資料の限定的な奄美地域の民俗資料が紹介されている（藤木 2019・2025、藤木・大堀・山崎 2025）。

3 新資料の報告

新資料が確認された遺跡の概要は各発掘調査報告書を参照いただくとし、ここでは、あらたに見つかった火打石等を解説していく。

（1）大島遺跡の火打石

大島遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2005）では、石英製火打石3点が出土した（第1・3図1～3）。第1・3図1は、結晶質で透光性のあるやや黄味がかかった良質の石質である。稜線の潰れはきわめて顕著で、丸みを帯びている。3.9×2.4×1.7 cm・19.2g。第1・3図2は、透光性のないやや黄味帯びた白色の石質（珪質岩に近い）である。礫面の残り具合から、円磨された礫が打ち割られて火打石とされたとわかる。稜線の潰れは部分的である。火打金と打ち付けて使用された際に擦りついた鉄分が、火打石の稜線上ほか器面に錆びた状態で付着する。4.6×3.4×2.5 cm・35.8g。第1・3図3は、透光性のないやや桃色がかかった白色の石質である。稜線の潰れは顕著で、鉄錆が付着する。2.7×2.8×2.4 cm・20.0g。発掘調査報告書によると、Ⅱb層が中世から近世、Ⅲ層が古代（8～9世紀代か）、Ⅳ層が弥生時代の包含層であり、火打石3点はいずれもⅢ層から出土したことから、8～9世紀代のものであろう。なお、大島遺跡では、火打石と同じⅢ層中から火打金1点（原報告第175図1177）も出土している。

（2）犬ヶ原遺跡の火打石

犬ヶ原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003）では、D-2区Ⅱb層から石英製火打石1点が出土した（第1・3図4）。石英は、透光性のある白色良質で、下面には六角柱の結晶体の頭が多数並ぶものである。稜線の潰れが顕著で、鉄錆が付着する。3.4×2.8×2.5 cm・28.1g。Ⅱb層からは10世紀前半の遺物が多く出土しており、火打石も同時期のものであろう。

（3）鍛冶屋馬場遺跡の火打石

鍛冶屋馬場遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2002b）では、C-9区Ⅳb層から石英製火打石1点が出土した（第1・3図5）。石英は、透光性のない白色でやや粗質のものである。稜線の潰れが顕著で、鉄錆が付着する。2.8×2.6×2.3 cm・15.0g。Ⅲa・Ⅲb層が近世、Ⅳa層が中世後半から近世、Ⅳb・Ⅴb層が古代（10世紀中頃）、Ⅵ層が弥生～古墳時代等の包含層であるとされ、火打石も10世

紀中頃ののものであろう。

（4）梅城跡の火打石

梅城跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2010d）では、発掘調査報告書で鉄石英製の“石核”と分類されたものは「火打ち石の蓋然性が高い」とされた。実見の結果、同書掲載の候補品はすべて縄文時代等の石核であったが、未掲載の鉄石英製石器の中から少なくとも5点の火打石が見出された（第1・3図6～10）。第1・3図6は石核状のもので、左縁は粗質であり、摩滅なのか自然な丸みなのか判然としない。右面は全周にわたって稜線が顕著に潰れる。4.4×2.5×2.1 cm・24.7g。第1図7は石核状のもので、稜線は全体に顕著に潰れ、左縁・右面全周の稜線は丸みを帯びる。3.7×2.1×2.1 cm・18.8g。第1・3図8は歪な形状で、各面の稜線上に顕著な潰れが残されている。4.0×3.0×2.6 cm・26.5g。第1・3図9は石核状のもので、正面中央・右～下縁の稜線が顕著に潰れ、特に右縁の稜線は丸く摩滅する。2.9×2.7×1.8 cm・15.9g。第1図10は石核状のもので、稜線の全体にわたって良く潰れ、やや丸みを帯びている。他の鉄石英よりやや朱色味を帯びる。2.5×1.9×1.6 cm・8.9g。火打石の年代については明確にしないものの、注記から出土位置を読み取れる第1・3図8・9がⅡ層（古代から中世の包含層）、第1図7が表土からそれぞれ出土している。

（5）上野城跡の火打石

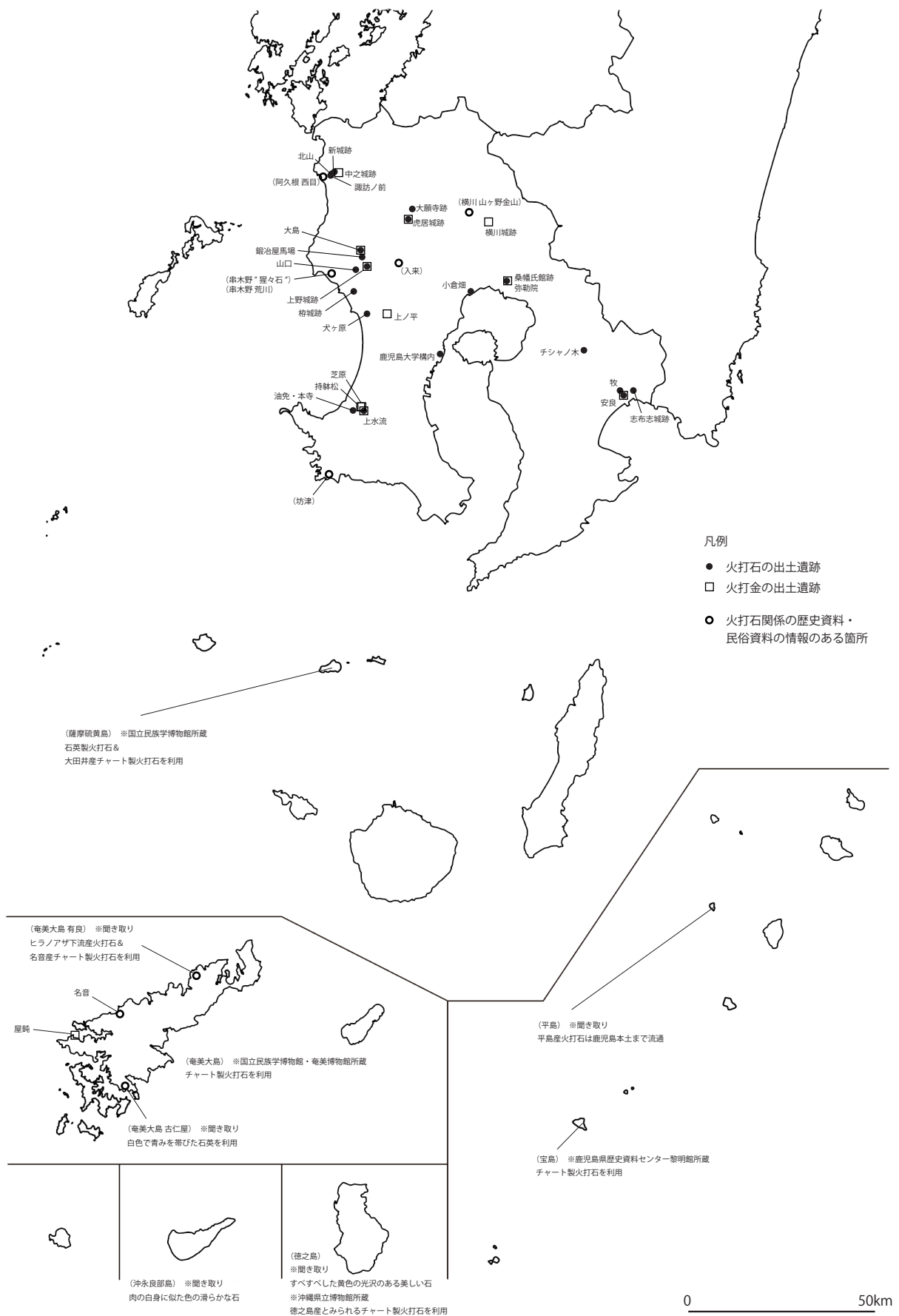
上野城跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2004A）では、B-7区の柱穴P881から乳白色半透明の玉髓製火打石の欠片1点が出土した（第1・3図11）。稜線の潰れが顕著なものである。1.6×1.0×1.0 cm・1.6g。上野城跡の火打石の年代については明確にしないものの、現時点で知られている同質石材の火打石は、いずれも近世以降のものである。なお、上野城跡からは、13世紀前半の遺構出土品1点そして包含層出土で近世以降である可能性が高い1点の計2点の火打金も出土している。

（6）小倉畑遺跡の火打石

小倉畑遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2002A）では、加治木町蔵王岳で産する珪質頁岩製という火打石1点が報告されていたが（原報告第53図561）、実見したところ、火打石としての使用痕はなく、先史時代の石核と推定される資料であった。一方で、「周縁に急角度の二次加工が施された小型石器」とされたチャート製石器（原報告第53図562）は、「二次加工」の一部が火打石として使用された際に生じた小剥離・潰れ等（註3）に相当することから、火打石であると認定された（第1・3図12）。なお、本資料は、トレンチ38のⅡ層出土である。Ⅱ層は、現代の水田の盤に相当することから、火打石の年代の絞り込みは難しい。



第1図 薩摩・大隅地域における火打石の新資料



第2図 薩摩・大隅・奄美地域における火打石・火打金の出土遺跡と関連情報



第3図 薩摩・大隅地域における主な火打石

カッコ内の数字は、今回の第1図中のNoならびに原報告の掲載No

(7) 山口遺跡の火打石

山口遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2013）では、1点の石核（原報告第76図362）について「中世以降の火打石の可能性」があると発掘調査報告書で指摘されていたが、火打石としての使用痕がないことから、石核で良いと判断された。一方で、これを含む縄文時代後期から晩期と報告された石核について火打石が含まれていないか検索したところ、石英製の2点（原報告第75図361・第76図363）について、火打石として使用された際に生じた小剥離・潰れ等（註4）があることから、火打石として新たに認定された（第1・3図13・14）。2点とも古代から中世の包含層であるⅡb層から出土しており、火打石の年代もその中に収まるであろう。

4 薩摩・大隅地域における火打石の登場と石材について

(1) 薩摩・大隅地域最古の火打石

これまでの研究により、おおよそ東北から九州本土域において遅くとも8世紀には火打石・火打金のセットによる発火具とその方法が登場していること、鹿児島県域における古代の発火具の唯一例が大島遺跡出土の8～9世紀の火打金であることが把握されている（藤木2025）。こういった研究の到達点からは、火打金とセットとなる古代段階の火打石が薩摩・大隅地域でも発見されることが期待されていた。

これを考える際に、まず、古墳時代の火打石として報告された向井原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター2010a）・上苑A遺跡（志布志市教育委員会2021）の是非が大きな問題となる。今回、実見したところ、向井原例の「水晶製火打石」は、水晶の六角柱の結晶体の上下が欠け、その断口の全体が水磨されたように丸くなっているもので、火打石ではないと判断された。上苑A例のチャート製石器もまた火打石としての使用痕がないものであった。す

なわち、古墳時代の火打石として報告された資料は2例とも火打石ではなく、現時点では古墳時代の火打石はないと結論付けられる。

したがって、今回報告の大島遺跡・犬ヶ原遺跡・鍛冶屋馬場遺跡の事例は、これまで鹿児島県で未確認であった古代にさかのぼる火打石としてたいへん注目される。この3遺跡5点とも石英製である点は、少なくとも薩摩地域の古代の火打石石材の嗜好を示す可能性がある。

また、大島遺跡は、現状で薩摩・大隅地域で最も早く火打石・火打金を採用した集落となる。同遺跡は、薩摩国府や国分寺と関連の深い人々が居住した集落と発掘調査報告書中で位置づけられており、火打石等の登場の背景の1つに、こういった遺跡の性格が関係した可能性もあろう。今後の調査等により、最古段階の火打石・火打金を出土する遺跡等について国府等の公的施設に関係するような範囲までなのか、あるいは一般集落まで浸透したのかといった、火打石・火打金等を用いた打撃式発火法の普及の度合いへも目を向けていく必要がある。

(2) 火打石の石材について

薩摩・大隅地域でこれまでに確認された火打石の石材（カッコ内にはその石材製火打石のおもな出土遺跡を挙げている）は、おもに石英（大島・鍛冶屋馬場・犬ヶ原・虎居城跡・安良・上水流・山口・大願寺跡・鹿児島大学構内・牧・志布志城跡）、鉄石英（虎居城跡・梶城跡・山口・北山・志布志城跡）、玉髓（上野城跡・チシャノ木・弥勒院・鹿児島大学構内）、碧玉（油免・本寺）、チャート（小倉畑・虎居城跡・安良・新城跡・諏訪ノ前・北山・鹿児島大学構内・志布志城跡）、特定石材名の難しい各種の珪質石材（安良・北山・志布志城跡）である（第3図）（註5）。

石英は、薩摩・大隅地域ともに広く用いられ、古代から近世まで時代的にも偏りなく採用されている。石英の石質には、水晶に近い良質のものから夾雑物・晶洞のあるもの、色調も白色を基本に透光性の有無、桃色や黄色がかかるものまであって、実に多様である。鉄石英は、赤色を基本に褐色ほか別の色味が混じることもあるもので、薩摩地域の中世段階において確実に用いられている。梶城跡・山口遺跡のように、縄文時代等の石器にも同石材が用いられていて両者が混在して出土した場合、先史時代の石核や二次加工ある石器等と古代以降の火打石との分別に注意を要する。チャートは、鹿児島大学構内遺跡出土品に大田井産（現在の徳島県阿南市）があるほかは、産地特定が十分でない。そのような中、阿久根市域の新城跡・諏訪ノ前遺跡・北山遺跡において、黒色、あるいは灰黒色に黒縞の入るチャートが特徴的に用いられており、諏訪ノ前遺跡の発掘調査報告書では近隣の五色浜産の可能性が指摘されている。玉髓は、おもに乳白色半透明のもので、チシャノ木遺跡・弥勒院遺跡・鹿児島大学構内遺跡の状況から、近世以降に用いられているとわかる。宮崎県域においても、同質の玉髓が

近世以降の火打石石材によく選択されている（藤木 2025 ほか）。

以上をまとめると、現時点の資料からみた薩摩・大隅地域における火打石石材の変遷は、古代から石英が広く長く採用され、中世段階の薩摩地域には鉄石英が、近世以降に玉髓が加わると整理される。この変遷観は、あくまで目立つ石材による大掴みであり、今後の資料蓄積による補強・再検証が必須である。

(3) 歴史資料・民俗資料にみる火打石産地

薩摩・大隅地域の火打石石材は、多様な石材環境を背景にカラフルで美しい一方で、その産地特定のハードルは高い。遺跡出土火打石の産地の解明は、直接採取なのか商業的採掘・採取なのかといった当時の経済史的側面にもアプローチ可能であり、今後の課題である。そこで、将来の調査・研究の備え、歴史資料・民俗資料に登場する火打石産地について次のとおり挙げておこう。

江戸時代以降の古文獻に登場する火打石産地を列記すると、薩摩藩が編纂した「三国名勝図絵」（五代・橋口 1843）には、①出水郡阿久根（現阿久根市）の「物産 土石類」に「燧石 西目の内、小潟に出づ」（燧石＝火打石、以下に同じ）、②薩摩郡入来（現薩摩川内市入来町）の「物産 土石類」に「燧石」、③日置郡串木野（現いちき串木野市）の「物産 土石類」に「猩々石 燧石の上品なり」が登場する。明治時代の第二回内国勧業博覧会には、④「品名 燧石 珪石 産地 薩摩国日置郡荒川村 出品者 別府源兵衛」（現いちき串木野市荒川）、⑤「品名 燧石 産地 川辺郡久志村 出品者 岡元弥四」（現南さつま市坊津）とある（明治文獻資料刊行会 1975a, b, c）。『薩隅日地理纂考』によると、⑥横川村の「物産 金石」として「金、滑石、道観石、禹余粮石、火燧石、石中黄、以上六品金山ニ産ス」（火燧石＝火打石）という（鹿児島県教育会 1898）。これに関連しそうな記事が「島津斉彬文書」（島津斉彬文書刊行会 1959）にいくつかあり、1849 年（嘉永 2 年）当時に「大隅横川村山ヶ野金鉱」（山ヶ野金山）から“火の出もよろし”い火打石が産出したという。

このほか、⑦「カドという石は平島に産する。昔はこの石を鹿児島に送っていた」（下野 1966）と 1964（昭和 39）年夏に日高栄熊氏から下野敏見氏が聞き取っている。「カド」は火打石を指す民俗的用語であり、平島（十島村）に産した火打石が鹿児島本土まで送られていたとわかる（第2図）（註6）。

①は、阿久根市西目の海岸に散見されるチャート転礫が火打石の候補となる。③の「猩々石」は「わずかに黒味を帯びた深紅色の石」を意味すると推測され、現時点の出土品との対応からは鉄石英が有力候補となる。④の珪石は白色系の石材が想起される。⑦からは、近隣に産するもののみでなく地域内外から火打石がもたらされることを示している。

こういった歴史資料・民俗資料に登場する火打石産地の情報に加え、先史時代の石器石材の産地に関する知見（宮田 1994・2002・2023, 黒川 2014・指宿市教育委員会 2013 ほか）から火打石の産地を探る試みも重要であろう。

5 おわりに

本稿では、鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵資料から新たに見つかった火打石について報告し、薩摩・大隅地域において、大島遺跡の火打石が現状で最古の火打石であること、同地域において石英・鉄石英・玉髄・碧玉・チャート・その他の珪質石材等が火打石石材となり、古代から近世に至るまで広く石英が用いられたこと、薩摩地域では中世等において鉄石英が多く用いられたこと、近世以降には玉髄が用いられた点を示した。残された課題は多いものの、本稿が、火打石という考古資料への認識と関心の高まりにつながり、今後の調査研究の一助となれば幸いである。

本稿の資料をまとめるにあたり、上床真・川口雅之・黒川忠広・相美伊久雄・寒川朋枝・重久淳一・新里貴之・関明恵・堂込秀人・富田逸郎・長野眞一・中村直子・東和幸・馬籠亮道・眞邊彩・宮田栄二・渡辺芳郎（五十音順）の各氏に資料調査や文献収集、意見交換等においてお世話になった。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい。

註 1 未掲載資料の検索は、調査年の古い方から第 80 集の大島遺跡まで、「一般 SA」コンテナ等を対象として進めることができ（第 81 集以降は未検索である）、鍛冶屋馬場遺跡・犬ヶ原遺跡・上野城跡・大島遺跡の新資料はその成果である。また、発掘調査報告書で火打石として掲載、あるいは石核と報告するけれどもその中には火打石が含まれるかもしれないと記載された遺跡について資料検索しており、杵城跡・小倉畑遺跡・山口遺跡の新資料がその成果となる。

註 2 ここに挙げた発掘調査報告書には、実見の結果、火打石でなかったというものも含め、火打石あるいはその可能性があるとした石器を報告したものを挙げている。また、第 2 図では、未実見の遺跡（高城跡）や火打石・火打金の全てがそれと異なっていたという遺跡は省くこととし、筆者が実見して火打石・火打金であると確認できた遺跡のみドットを落としている。なお、縄文時代等の先史時代の石器と石材が共通し、それらが混在して出土した場合等、火打石かそうでないのか判断に迷う事例もあって、火打石とそれ以外の石器とをいかにして分別するかが課題となる（見分け方のポイントは藤木 2025 等に示されている）。これを完全クリアするためには、該当遺跡やその周辺遺跡等から出土した石器全体の検索や出土状況の再検討を経て初めて達成に近づくものであり、十分な議論等を経たうえでの将来の課題とし

たい。

註 3 掲載した実測図は、潰れの表現が十分ではないものの、発掘調査報告書からそのまま転載した。

註 4 註 3 に同じ。

註 5 志布志城跡については、発掘調査報告書へ未掲載の火打石があることを相美伊久雄氏よりご教示いただき、実見した。その報告は別の機会に進めたい。

註 6 第 2 図のうち、徳之島で収集された火打石の情報は藤木・大堀・山崎 2025 による。それ以外の民俗資料からの情報とその原典は、藤木 2019・2025 に挙げている。

【引用・参考文献】

阿久根市教育委員会 2003『中之城跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

有明町教育委員会 2005『牧遺跡（第 1・2 次）』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

指宿市教育委員会 2013『水迫遺跡 4・西多羅ヶ迫遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第 51 集

上床 真 2009「鹿児島県内出土の火打金・火打石」『上水流遺跡 3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（136）、203-206 頁

鹿児島県教育会 1898『薩隅日地理纂考』（鹿児島県地方史学会 校訂 1971『薩隅日地理纂考』）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002a『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（34）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002b『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（39）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『犬ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004a『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004b『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『関山遺跡 鳥居川遺跡 チシャノ木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009a『上水流遺跡 3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（136）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009b『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（143）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010a『尾付野山遺跡・向井原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（147）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010b『油免・本寺遺跡』
 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (148)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010c『上水流遺跡4』
 縄文時代前期末から中期前半・補遺編, 第Ⅱ分冊, 鹿
 児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (150)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010d『柊城跡』鹿児島
 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (155)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011a『二渡船渡ノ上遺
 跡・山崎野町遺跡A』鹿児島県立埋蔵文化財センター
 発掘調査報告書 (161)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011b『虎居城跡』鹿児
 島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (162)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『芝原遺跡3』鹿
 児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (170)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『山口遺跡』鹿児
 島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (179)
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2024『光台寺跡・照信
 院跡・大願寺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘
 調査報告書 (225)
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2010『鹿児島大学構内遺
 跡 郡元団地 D-7・8 区 郡元団地 D・E-5 区 郡元団地
 C-4~6 区 郡元団地 C-6 区』鹿児島大学埋蔵文化財調
 査室調査報告書第5集
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 2015『鹿児島大学
 埋蔵文化財調査センター年報29』
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 2020『鹿児島大学
 構内遺跡』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報
 告書第16集
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 2025『鹿大構内遺
 跡-2013-1 発掘調査の報告1』鹿児島大学埋蔵文化財
 調査センター調査報告書第21集
 川口雅之 2008「鹿児島県における古代・中世鉄器の基
 礎的研究」『地域・文化の考古学-下條信行先生退任記
 念論文集-』, 637-654 頁
 黒川忠広 2014「石器石材としての大川原産珪質岩」『縄
 文の森から』第7号, 1-7 頁, 鹿児島県立埋蔵文化財
 センター
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン
 ター 2020『安良遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振
 興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (34)
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン
 ター 2025a『新城跡』公益財団法人鹿児島県文化振興
 財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (59)
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン
 ター 2025b『諏訪ノ前遺跡』公益財団法人鹿児島県文
 化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
 (60)
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査セン

ター 2025c『北山遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化
 振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (61)
 五代秀堯・橋口兼柄 1843「三国名勝図会」(五代秀堯・
 橋口兼柄 1966『三国名勝図会』上巻, 南日本出版文化
 協会へ採録)
 志布志市教育委員会 2018『志布志城跡』志布志市埋蔵
 文化財発掘調査報告書 12
 志布志市教育委員会 2021『上苑A遺跡』志布志市埋蔵
 文化財発掘調査報告書 14
 島津斉彬文書刊行会 1959『島津斉彬文書』上巻, 吉川
 弘文館
 下野敏見 1966『吐噶喇列島民俗誌』第1巻, 悪石島・
 平島篇(『トカラ列島民俗誌』として第一書房から1994
 年に再版)
 垂水市教育委員会 2018『高城跡』垂水市埋蔵文化財発
 掘調査報告書 11
 隼人町教育委員会 2003『桑幡氏館跡-第3次調査-』
 藤木聡 2004「九州における火打石・火打金-資料集成
 と基礎的な整理-」『古文化談叢』第51集, 187-200
 頁, 九州古文化研究会
 藤木聡 2011「縄文時代に火打石はあるのか」『南九州縄
 文通信』第21号, 73-78 頁, 南九州縄文研究会
 藤木聡 2019「奄美諸島周辺における火打金・火打石の
 基礎的整理」『中山清美と奄美学-中山清美氏追悼論集
 -』, 435-446 頁, 奄美考古学会
 藤木聡 2025『火打石と火打金の文化史 考古学からみた
 火起こしの研究』吉川弘文館
 藤木聡・大堀皓平・山崎真治 2025「琉球の火打石・火
 打金について-考古・民俗資料の紹介-」『博物館紀要』
 第18号, 29-36 頁, 沖縄県立博物館・美術館
 宮田栄二 1994「鹿児島県における石器の材質」『大河』
 第5号, 2-9 頁, 大河同人
 宮田栄二 2002「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」
 『Stone Sources』No.1, 21-24 頁, 石器原産地研究会
 宮田栄二 2003「火打石と石器石材」『Stone Sources』
 No.2, 巻頭言, 石器原産地研究会
 宮田栄二 2023「鹿児島の石器石材をさがしもとめて-
 地下資源鉱床付近の探索と石材の確認-」『九州旧石
 器』第27号, 橘昌信先生追悼論文集, 235-244 頁, 九
 州旧石器文化研究会
 明治文献資料刊行会 1975a『明治前期産業発達史資料』
 勸業博覧会資料 163
 明治文献資料刊行会 1975b『明治前期産業発達史資料』
 勸業博覧会資料 171
 明治文献資料刊行会 1975c『明治前期産業発達史資料』
 勸業博覧会資料 184
 横川町教育委員会 1987『横川城跡』横川町埋蔵文化財
 発掘調査報告書 (1)

令和 6 年度 年 報

県立埋蔵文化財センター
第一調査系の成果(県事業関係の調査)

発掘調査

No	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
1	名主原遺跡	鹿屋市	土木部 道路建設課	(主)鹿屋吾平 佐多線(吾平道 路)道路改築	本調査	1,974	5月 ～ 11月	弥生中期		土器(山ノ口式)	○昨年度に引き続き多数の 竪穴建物跡を検出した。 大型の建物跡の多くは花 弁型を成し、小型のものは 方形建物跡が多い。大型 の建物跡からはガラス小 玉が多く出土している。	岩永 新和技 術コン サルタ ント(株)
								弥生後期 ～ 古墳前期	竪穴建物跡63基、溝状 遺構4条、掘立柱建物跡 1基、ピット128基、硬化 面2か所	土器(高付式、中津野式、 東原式、免田式)絵画土 器、砥石、石製穂摘具、 磨・敲石、小型石ノミ、石 製紡錘車、棒状製品、鉄 鏃、鉄製穂摘具、鉄片、 不明鉄製品、ガラス小 玉、ガラス製品、管玉	○鹿児島県では初となる 鉄製穂摘具が出土した。	
								古墳後期		須恵器		
								近代	戦闘機墜落痕跡(日本軍 機)1か所	ジェラルミン片、ケーブル 類、12.5mm機銃弾(米軍)		
2	下城跡	始良市	土木部 道路建設課	(一)十三谷重 富線、北山2工 区整備	本調査	4,100	5月 ～ 2月	縄文		土器片、打製石斧、磨製 石鏃、石皿	○狭い調査範囲ながら各 曲輪・空堀等の中世面の 検出が出来た。	新保 大福コン サルタ ント(株)
								中世	掘立柱建物3棟、かまど 状遺構3基、土坑5基、 硬化面2条、空堀5、虎 口状遺構、段切岸、土 壘、ピット多数	龍泉窯系青磁碗、漳州窯 系青花碗、景德鎮窯系青 花碗、備前焼播鉢、常滑 焼片、青磁、白磁、土師 器、フイコ羽口、埴塼、金 床、鍛造剥片、基石、洪 武通宝	○各曲輪には1基ずつか まど状遺構が検出された。	
								近世		肥前系磁器碗、天保通 宝、薩摩焼播鉢、壺、土 瓶	○曲輪5においては2間× 3間を超える底を持つ、比 較的大きな掘立柱建物跡 を検出した。	
								時期不明	硬化面(J-11区)		○南九州のシラス台地の 城郭で度々検出されてい る、長さ約1.2m×深さ約 1.7mの隅丸方形型の竪穴 土坑が検出された。	

報告書作成・整理作業

No	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 年度	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
1	名主原遺跡	鹿屋市	土木部 道路建設課	(主)鹿屋吾平 佐多線改築事 業	整理	—	R4 ～ R6	縄文 ～ 弥生中期	—	土器(指宿式) 土器(山ノ口式)	○絵画土器や石庖丁、砥 石が多く出土している。 ○免田式土器やジョッキ形 土器など他地域との搬入 や模倣と考えられるものが 確認されている。 ○破鏡や線刻石庖丁、ガラ ス玉などの希少な遺物が 確認されている。	黒木 岩永 平
								弥生後期 ～ 古墳	竪穴建物跡135基、溝状 遺構9条、道路状遺構3 条、埋設土器3基、土器 集中11か所、土坑86基、 掘立柱建物跡・ピット群4 基、ピット1017基、墓・埋 葬施設3基	土器(高付式、免田式、中 津野式、東原式)、丸玉、 勾玉、紡錘車、不明土製 品、石庖丁、石庖丁未製 品、砥石、磨・敲石、台 石、軽石製品、磨製石 鏃、打製石鏃、磨製石 斧、鉄鏃、鉄斧、鉄鏃、鉄 針、鉄鑿、鉋、鉄片、鉄 塊、鍛造剥片、不明鉄製 品、破鏡、鉄製石庖丁、 ガラス玉、ガラス勾玉		
								古墳後期	溝状遺構3条、道路状遺 構3条	須恵器		
2	中組遺跡	天城町	伊仙天城線 真瀬名工区 道路改築事業	報告書 刊行	—	—	R5	古代	溝状遺構1条、道路状遺 構11条	土師器	○沖縄産の施釉陶器・無 釉陶器が出土している。 食膳具は加治木・始良系 が多く、貯成具は苗代川産 が多く出土している。	上浦 星野 黒川
								中世	—	青磁、カムイヤギ、中国・ 東南アジア産陶器		
3	柳迫遺跡	曾於市	道路維持課	特定交通安全 施設等整備事 業(深川工区)	報告書 刊行	—	R5	近世・近代	溝状遺構1条、土坑5 基、柱穴11基、石垣1基	近世陶磁器(肥前・薩摩・ 沖縄)	○文明ボラで覆われ、南北 にのびる溝状遺構が検出 された。 ○遺物では中岳Ⅱ式土器 を中心に出土している。	上浦 黒川
								縄文後期	—	土器(丸尾式、西平式、中 岳Ⅱ式)、石鏃、磨製石 斧、石皿		
								古代	土坑2基	土師器(壺)		
								中世	溝状遺構4条	—		
								時期不明	帯状硬化面1条	—		

県立埋蔵文化財センター
第一調査系の成果(県事業関係の調査)

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 年度	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
4	鹿児島城 二之丸跡	鹿児島市	商工政策課	環境保健センター・城山庁舎 跡地文化財調査事業	報告書 刊行	—	R5	近世	溝状遺構2条、瓦溜、柱 穴列、土坑、瓦列(雨樋 遺構か)	瓦(平・丸瓦・軒丸・軒平 瓦)、中国陶磁器、国産陶 磁器(薩摩焼、肥前系、琉 球)、木製品(将棋盤か)、 土師器、瓦質土器	○近世の柱穴列や溝状遺 構が検出された。中でも柱 穴列は境となる塙の控え 柱の可能性があり、二之丸 が拡大・整備された時期の 貴重な資料となる。	星野 黒木
								近代	石列、礎石、石組排水溝	瓦、陶磁器	○17世紀後半以降の将棋 盤と考えられる木製品が土 坑の中から出土した。全国 でも4例目の出土例となる 可能性がある。	
5	河口コレクショ ン〈高橋貝塚〉	南さつま市	鹿児島県教育委員会	よみがえる 「河口コレクショ ン」の世界	報告書 刊行	—	—	弥生時代前 期～中期	貝塚、住居跡1基、土坑 4基、礫集中1基	・土器類 縄文時代晩期 土器(夜臼式土器)、弥生 時代前期土器(高橋Ⅰ 式・Ⅱ式、板付Ⅰ式・Ⅱ式 を中心とする)、弥生時代 中期前葉土器、土製品 (紡錘車など) ・石器(石鏃、石包丁、磨 製石斧、柱状片刃石斧、 穿孔鏃、石鏟、石匙、打 製石斧、磨・敲石、石皿、 砥石、軽石製品など) ・骨角器(釣針、骨鏃、尖 頭器、垂飾品など) ・貝製品(貝輪、貝輪未製 品、貝刃) ・管玉・自然遺物	○前期末から後期初頭にか けての有明海沿岸部の 甕棺破片が多く出土し、丹 塗土器も出土している。 石器は剥片石器の石材とし て、腰岳の黒曜石と多久 産の安山岩が、柱状片刃 石器の石材には層灰岩 が、石包丁の石材に葦青 石ホルンフェルス製が使わ れている。有明海沿岸部か らの搬入と考えられる。弥 生前期末から、沖繩・奄美 で作られるようになる腹面 貝輪組加工品が、中継地 を介さず消費地に届くよう になると高橋貝塚の存在 価値は低下し、遺跡は衰 退するといわれていたが、 高橋貝塚の役割は終焉を むかえず、前期末～中期 初頭に有明海ルートが開 かれ、高橋貝塚を舟運窓 口とする高橋遺跡は、中期 を通じて中継地として機能 したと考えられる。	室込 宮崎
6	南の縄文文化 〈上野原遺跡ほか〉	霧島市ほか		南の縄文文化 魅力発信事業	整理 活用	—	—	縄文	—	【上野原遺跡】 平椅式土器 塞ノ神式土器 【加栗山遺跡】 加栗山式土器	○過年度に調査・報告され ている上野原遺跡・加栗山 遺跡の再整理作業を行っ た。未報告資料の接合・復 元等を行い、新たに復元し た資料を中心に、かこしま 遊楽館(東京都有楽町)や 志布志市埋蔵文化財セン ター、伊集院文化会館等で 展示を行った。また、学校 等への出前授業では、計 21校900名以上の子どもた ちへ、実際の出土品に触 れてもらった。	宮崎 上浦

県立埋蔵文化財センター
第二調査系の成果(県事業関係の調査)

発掘調査

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象 面積(m ²)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
1	二子塚B遺跡	大崎町	土木部道路建設課	黒石串良線(二子塚工区)地方特定道路整備事業	本調査	400	5月～6月	縄文早期	埋設土器1基、集石3基、土坑1基	土器(手向山式、塞ノ神A式、縄文早期後葉)、打製石鏃、磨石、剥片・チップ	○縄文時代早期後葉の集石3基(うち1基からは複数の炭化物採取)及び塞ノ神B・菅浜式土器の埋設土器1基、落とし穴の可能性のある土坑1基の検出。 ○縄文時代後・晩期の落とし穴の可能性のある土坑1基の検出。	山下 廣
								縄文後晩期	土坑1基			
								時期不明	ビッド3基			
2	栲城跡	さつま町	鹿児島県教育委員会	県内遺跡事前調査事業	確認調査	530	11月	時期不明	—	木片、種子	○加工痕のある木片や種子を検出した。 ○周辺地形踏査で、人工と考えられる尾根上の地形を10条ほど確認した。	東 山下

報告書作成・整理作業

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象 表面積(m ²)	調査 年度	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者	
1	久保田牧 遺跡	鹿屋市			整理 報告書 刊行	—	R1 ～ R3	縄文前期 ・中期	土坑17基、落とし穴6基、 集石3基、土器集中1か 所	土器(曾畑式、深溝式、 野久尾式、条痕文、船元 Ⅱ・Ⅲ式、山田平式)、打 製石鏃、石匙、磨製石 斧、打製石斧、磨石、敲 石、環石、石鏢	○縄文時代前期中葉から 古墳時代編を刊行した。 ○縄文時代前・中期では、 調査範囲の北側と南側での 出土状況から、野久尾式と 船元式は異なる伴出状況 がみられ、野久尾式の型式 変化について検討を行っ た。 ○刻目突帯文土器は立塚 遺跡に近接する北側から多 く出土し、遺跡間で接合し た。 ○古墳時代は竪穴建物跡 から篋貫式段階の壺と丸底 甕が出土し、折衷型もみら れた。また、篋貫式段階の 壺と丸底甕を合わせ口にし た土器棺や、土器溜まりか ら杓子形土製品も出土し た。	森 敏 田	
								縄文後期	—	土器(市来式、丸尾式、 西平式、中岳Ⅱ式)			
								縄文晩期 ～弥生	土坑4基	土器(黒川式、刻目突帯 文、組織痕)、打製石斧、 紡錘車			
								古墳	竪穴建物跡19軒、土坑4 基、土器棺1基、土器溜 まり1か所	土器(成川式)、須恵器、 杓子型土製品、勾玉、ガ ラス小玉、紡錘車、軽石 製有孔製品、棒状礫、炭 化材、鉄製品			
2	立塚遺跡	鹿屋市	土木部道路 建設課	(主)鹿屋吾平佐 多線改築事業	整理	—	R2 ～ R4	縄文晩期 ～弥生	環状配列土坑群48基、 石皿片または礫等を伴う 土坑61基、土坑24基、柱 穴・ビッド1505基、巨大柱 穴13基、遺物集中1基	土器(黒川式、干河原段 階、刻目突帯文)、土製 勾玉、打製石斧、石鏢、 打製石鏃、磨製石鏃、石 胞丁、石皿、台石、剥片 石器、磨石、敲石、軽石 製品、管玉	○縄文時代晩期から弥生 時代の遺構・遺物の基礎整 理作業を実施 ・個別遺構図と遺構配置図 の作成 ・環状配列土坑の時期と性 格等について検討 ・遺物の実測 ・年代測定等の自然科学分 析を実施	倉 元 藤 島 山 下	
								弥生中期	—	土器(山ノ口式)			
					報告書 刊行			古墳	柱穴・ビッド1基	土器(中津野式、東原 式、辻堂原式)			○古墳時代以降編を刊行 ○古墳時代 ・須恵器の坏蓋や、丸底甕 の出土 ○古代 ・自然災害(紫コラ)前後の 土地利用の推移 ・他遺跡の成果と合わせ た、台地上の土地利用の様 相 ○近世 ・薩摩焼や肥前焼等の出土
								古代	畝間状遺構626条、掘立 柱建物跡5棟、柱穴・ビッ ト1359基、土坑14基、古 道9条、紫コラ堆積14 基、溝状遺構3条	土師器(杯・皿・埴・鉢・ 壺・紡錘車・墨書土器 等)、須恵器(壺・杯・は そう・壺・甕等)			
								近世	—	陶磁器(龍門司・苗代川・ 肥前系等)			
								時期不明	柱穴・ビッド299基、土坑 5基	—			

県立埋蔵文化財センター
第二調査系の成果(県事業関係の調査)

No	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査対象 表面積(m ²)	調査 年度	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
3	二子塚B遺跡	大崎町	土木部道路 建設課	黒石串良線(二子 塚工区)地方特定 道路整備事業	整理 報告書 刊行	—	R4 ～ R6	縄文早期	竪穴建物跡1軒、土坑12 基、ピット62基、遺物集 中1か所、集石遺構12 基、埋設土器1基	土器(前平式、加栗山 式、吉田式、辻タイプ、石 坂式、下刺釜式、手向山 式、平裕式、塞ノ神式、 吉浜式)、石鏃、石槌、石 匙、磨製石斧、打製石 斧、磨・敲石、石皿・台 石、チップ、フレーク	○縄文時代早期(主に後 葉)の集石の検出や落とし 穴、埋設土器を検出。一部 の集石内炭化材や種実の 分析により種類を特定。他 に、当該期と考えられる落 とし穴、埋設土器の検出。 ○縄文時代後期の中岳Ⅱ 式土器を埋土内に含む竪穴 建物跡や土坑の検出。ほか に、落とし穴を検出。 ○古墳時代の竪穴建物跡 の検出。一括資料による土 器の属性変化(宮崎平野の 遺物との関係性を含む)を 知る資料と評価。 ○現道と並行する古道の検 出。当地における道の位置 の推移。	廣 中野
								縄文後期・晩 期	竪穴建物跡2軒、立石遺 構2基、土坑3基、遺物 集中4か所、ピット40基 (内、6基遺物含む)	土器(中岳Ⅱ式、入佐 式、黒川式、組織痕)、打 製石鏃、石鏃、石匙、打 製石斧、磨製石斧、磨・ 敲石、台石・石皿、チッ プ、フレーク		
								弥生	—	土器(刻目突帯文、山ノ 口式)		
								古墳	竪穴建物跡3軒、土坑11 基、ピット133基	土器(辻堂原式、東原 式、世賀式)		
								時期不明	溝状遺構5条	刀子、陶磁器(近世)、古 銭		
4	八重石遺跡	西之表市	防衛省	馬毛島基地(仮 称)建設事業	整理 報告書 刊行	—	R5	縄文草創期 ～早期	土坑1基	土器(条痕文)、磨製石 鏃、磨製石斧、磨・敲石、 ハンマーストーン、石皿・ 台石、剥片、チップ、フ レーク、二次加工剥片、 石核、礫器	○縄文草創期～早期の連 穴土坑1基が検出。 ○縄文早期の条痕文土器と 縄文晩期の黒川式土器、縄 文草創期～早期の石器が 出土。 ○時期不明の遺物は、旧石 器の可能性もある。	中野 堂込
								時期不明	樹痕29基、噴鏢	—		

市町村支援

No	市町村名	遺跡名	支援要件	時代	注目される成果・支援内容等	市町村担当	センター担当者
1	出水市	出水城跡	整理作業 (市内古墳調査等事業)	中世 ～ 近世	【支援内容】 ・整理作業遺物指導 ・報告書作成技術支援	外村 さゆり	関 明恵 黒木 梨絵
2	垂水市	垂水島津家墓所	確認調査 (垂水島津家墓所災害復旧 事業)	近世	【支援内容】 ・確認調査技術支援	高嶺 光佑	黒川 忠広
3	さつま町	宗功寺跡	本調査 (町単独発掘調査事業)	中世 ～ 近世	【支援内容】 ・発掘調査技術支援	佐藤 真人	平 美典
4	南種子町	野木田遺跡	本調査 (経営体育成基盤整備事業 基永地区)	古墳	【支援内容】 ・発掘調査支援 ・民間委託積算支援	小脇 有希乃	隈元 俊一 飯島 えりな 黒川 忠広
5	志布志市	福山氏庭園	整理作業 (市内遺跡発掘調査等事 業)	近世	【支援内容】 ・整理作業遺物指導	川路 卓太郎	関 明恵
6	伊佐市	浜場遺跡	試掘調査 (開発対応)	古墳	【支援内容】 ・試掘調査技術支援	中村 守男	黒川 忠広
7	肝付町	塚崎1号墳	確認調査 (町内遺跡発掘調査等事 業)	古墳	【支援内容】 ・確認調査技術支援	清田 祥之	堂込 秀人
8	徳之島町	大谷山遺跡	整理作業・報告書作成支援 (町内遺跡発掘調査等事 業)	中世	【支援内容】 ・報告書作成技術支援	大屋 匡史	宮崎 大和
9	和泊町 知名町	沖永良部島の墓所群	報告書作成 (町内遺跡発掘調査等事 業)	近世	【支援内容】 ・報告書作成技術支援	北野 堪重郎 仲田 真一郎	黒木 梨絵

(公財)埋蔵文化財調査センター
調査第一係の成果

発掘調査

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因 事業名	調査の 種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
1	南水ヶ迫B	志布志市 志布志町 帖	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	国道220号油津・夏井道路建設	本調査	8,700	5月～2月	旧石器時代 ナイフ形石器文化期(XⅥ層) 旧石器時代 ナイフ形石器文化期(XⅢ層) 旧石器時代 ナイフ形石器文化期(XⅡ層) 旧石器時代 ナイフ形石器文化期(XⅠ層) 旧石器時代 細石刃文化期(X層) 縄文時代早期 縄文時代後期 弥生時代 古墳時代 中世 近世・近代	遺物集中部2か所 — — — 炭化物集中部 遺物集中部1か所(X層) 土坑(連穴土坑)1基 集石10基 — — — 土坑3基 溝状遺構2条 古道(硬化面)2条 土坑11基 溝状遺構2条	剥片・礫片 スクレイパー、加工痕のある剥片、剥片、砥石、礫 黒曜石剥片 三稜尖頭器、ナイフ形石器、使用痕のある剥片 細石刃、細石刃核、ブランク?、スクレイパー、剥片、石斧基部 前平式土器、石坂式土器、平裕式土器、ミニチュア土器、打製石鏃、磨・敲石 中岳Ⅱ式土器、打製石鏃 刻目突帯文土器 成川式土器 — —	旧石器時代では、複数の層から三稜尖頭器や剥片などが出土した。また、遺物集中部や炭化物集中部などを検出した。縄文時代早期では、集石10基を検出した。南西～北東方向に検出されており、掘り込みがあり礫数の多いものと、礫数の少ないものに分けられる。 また、連穴土坑1基を検出した。 中世では、昨年度検出された遺構に続く、溝状遺構と古道(硬化面)を数条検出した。	林田 中原
2	野首	志布志市 志布志町 帖	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	国道220号日南・志布志道路建設	本調査	9,200	5月～2月	旧石器時代 縄文 弥生時代 古墳時代 古代 中世 時期検討中	— 土坑1基 集石1基 — — 土坑1基(炭化物集中) 道状硬化面3条 土坑4基 溝状遺構(数条) 焼土	細石刃核(Ⅳ層出土) 早期土器、丸尾式土器、指宿式土器、西平式土器、打製石鏃、磨製石斧、打製石斧、敲石、石皿、石鏝 土器片 成川式土器 土師器、土鏝 白磁、青磁、華南三彩、土師器、大目碗、瓦器、刀子、四耳壺、国産陶磁器 鉄製品、鉄鏃、水晶片、古銭	旧石器時代は、縄文時代の層から遺物が1点出土した。縄文時代早期は、前年度の調査地で多数の集石が検出したが、今度は1基のみを検出した。地点・地形により遺構密度に濃淡があることが分かった。土器型式は複数あるが遺物量は少ない。 古代は、炭化物が集中する土坑を1基検出した。今後、分析等を行い、遺構の性格を把握する予定。 中世の遺構は道跡と考えられる道状硬化面を検出し、調査区の広範囲から外国産陶磁器、国産陶磁器などの遺物が多数出土した。 このほか、平行する溝状遺構を数条検出しており、時期検討中である。また、雁股鏃をはじめとする鉄製品が出土している。	岩澤 川野

整理作業

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因 事業名	調査の 種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 年度	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
3	野首	志布志市 志布志町 帖	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	国道220号日南・志布志道路建設	整理	—	R5 R6	旧石器時代 ナイフ形石器文化期 縄文時代早期 縄文時代前期～後期 古墳時代 古代以降 時期検討中	礫群2基 土坑2基 集石85基 — — 土坑墓1基 落とし穴1基 土坑2基 (1基は貝殻入り) 掘立柱建物跡1軒	三稜尖頭器 石坂式土器、下剥峯式土器、打製石鏃、スクレイパー、チップ、磨石、敲石、凹石、石皿 — — 成川式土器(辻堂原式) 土師器、須恵器、陶磁器 陶磁器、貝殻	旧石器時代は、礫群2基が検出され、三稜尖頭器などの遺物が出土した。 縄文時代早期は、河岸段丘による傾斜地から、大小様々な規模の集石85基が検出され、打製石鏃や磨石、敲石、スクレイパーなどの遺物が出土したが、土器の出土は少ない。 縄文時代前期～後期は、深浦式(日木山段階)、丸尾式、中岳Ⅱ式、西平式など、様々な型式の土器が出土した。 古墳時代は、竪穴建物跡1基を検出した。 古代は、副葬品と考えられる土器を伴った土坑墓が1基検出された。 このほか、時期は特定できていないが、掘立柱建物跡1基、落とし穴1基、埋土中からイボキサゴと考えられる貝殻が塊で出土した土坑などが検出された。	相良 西園

※これらの成果は、今後、整理作業を進めていく中で再評価される可能性があります。
利用の際は、埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センターへ確認、使用承諾を得てください。

(公財)埋蔵文化財センター
調査第二係の成果

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因 事業名	調査の 種類	調査対象 表面積 (㎡)	調査 期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
4	新城跡	阿久根市 山下	国土交 通省九 州地方 整備局 鹿児島 国道事 務所	南九州 西回り自 動車道 阿久根 川内道 路建設	整理・ 報告書 刊行	—	R4 R5	中世 近世以降	掘立柱建物跡5軒 柵列2基 土坑3基 炉跡10基 溝状遺構1条 ピット72基 虎口状遺構1基 土塁1基 炉跡1基 集石1基	土師器、中世須恵器、播鉢、国産 陶器(常滑焼、古瀬戸、備前焼 等)、輸入磁器(青磁、白磁、青花 等)、輸入陶器(沖縄Ⅲ類、Ⅴ類 壺、東南アジア系鉢)、瓦質土器、 土鍾、台石、滑石製品、鉄製品、碁 石、羽口、木製品 陶器(肥前系、薩摩焼等)、磁器(染 付等)、石皿、煙管	遺跡は、阿久根市山下に位置 し、高松川左岸の標高約30～ 35mの台地上に所在する。東 側に位置する愛宕山には、中 世莫祢氏の本拠地である阿久 根城跡がある。新城跡は、その 西麓の台地上に点在する山城 の一つであり、中世において歴 史的に重要な役割を果たした地 域といえる。 発掘調査では、西台地で虎口 (出入口)の可能性のある大型 土坑と通路状遺構から成る虎 口状遺構など中世山城の特徴 をもつ遺構が発見された。虎口 状遺構は、防御施設と考えられ る。他にも播鉢、鉄器、近世の 陶磁器、石皿などの遺物も出土 した。 近隣の北山遺跡や諏訪ノ前 遺跡の遺構や遺物と類似点が 多く、阿久根の中世の歴史を知 る上で貴重な資料である。	弓場 川口 (北園)
5	諏訪ノ前	阿久根市 波留	国土交 通省九 州地方 整備局 鹿児島 国道事 務所	南九州 西回り自 動車道 阿久根 川内道 路建設	整理・ 報告書 刊行	—	R5	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世・近代 時期不明	— — 埋壘1か所 溝跡2条 段状遺構1か所 (道跡1条含む) 礫集積遺構1か所 掘立柱建物跡1軒 掘立柱建物跡5棟 炉跡21基 トイレ遺構6基 土坑19基 ピット227基 — —	曾畑式・市来式・西平式・上加世田 式・三万田式土器、石鏃、磨穀石、 石斧、石鍾、石製品 成川式土器(東原式・笹貫式) 須恵器、土師器、紡錘車、土鍾 須恵器(瓦質・土師質含む)、土師 器、中国磁器(青花・白磁・青磁) 陶器(備前・常滑・国産)、土鍾 砥石、石製礫片、碁石、滑石製品、 水輪 懸仏本尊、洪武通宝、角釘、指貫 陶器(薩摩焼・肥前等)、磁器(肥 前系等)、土製品、青磁獅子香炉脚 部 土製品、金属製品	諏訪ノ前遺跡は阿久根市波 留に所在し、阿久根市内を流れ る高松川左岸の標高約35m～ 30mの斜面上に立地する。遺 跡周辺の地域は古代の英祢駅 があったとされる比定地のひと つであること、阿久根氏の居城 である阿久根城をはじめ居城跡 が点在するなど、特に古代～中 世にかけて歴史的に重要な役 割を果たした地域であるといえ る。 今回の調査では、中世の溝状 遺構、炉跡、掘立柱建物跡、土 坑などが検出された。その中で も、科学分析によって裏付けら れたトイレ遺構は南九州で初め ての例となり貴重な成果となっ た。遺物は、縄文～近代までの 幅広い遺物が出土しているが、 中心となるのは中世後半(14世 紀～16世紀頃)の貿易陶磁器 や、土師質及び瓦質の播鉢・火 鉢である。特筆すべきは五輪塔 の水輪や懸仏の本尊などの宗 教の意味合いが強い遺物が出 土していることであり、阿久根氏 に加え、遺跡の北西側に位置 する波留南方神社との関係も 深いと考えられる遺跡である。	松山 平嶺
6	山借シ	喜界町 川嶺	農林水 産省九 州農政 局 喜界島 農業水 利事業 所	喜界島 農業水 利事業 川嶺第2 ファーム ボンド建 設	整理・ 報告書 刊行	—	R5	古代 中世 近世以降	— 掘立柱建物跡1棟 柱穴54基 土坑7基 炉跡10基 石積遺構1基 溝跡1条 溝跡1条	青磁(龍泉窯系)、白磁、青花、瑠 璃釉、カムイヤキ、輸入陶器(中国 産、タイ産)、初期唐津焼、滑石二 次加工品、石器、鉄器、ガラス玉、 鍾、獣骨 国産陶磁器(沖縄産陶器、薩摩焼、 肥前陶磁器)、鉄器、古銭	遺跡は、喜界島の標高約80m の海岸段丘上に位置する中世 の集落遺跡である。 発掘調査では、掘立柱建物 跡、土坑、炉跡、溝跡、石積遺 構などが検出され、溝跡から は、14世紀後半から15世紀前 半頃の中国産青磁や白磁ととも に、ウシを主体にウマやイノシ シ等の大量の獣骨が出土した。 出土したウシの歯のストロンチ ウム分析により、ウシは島内で 出生された個体と島外から搬入 された個体を家畜としていたこ とが確認された。獣骨には多くの 解体痕が確認され、食用として いたと考えられる。また、喜界 島の遺跡で初めて確認された 瑠璃釉の破片や、14世紀～16 世紀頃の中国華南産の鉛で作 られたガラス玉、17世紀前半の 沖縄産無釉陶器が出土するな ど、中世後半から近世初頭にか けての食文化や人々の交流を 理解する上で重要な遺跡であ る。	小野

※これらの成果は、今後、整理作業を進めていく中で再評価される可能性があります。
利用の際は、埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センターへ確認、使用承諾を得てください。

(公財)埋蔵文化財センター
調査第三係の成果

整理作業・報告書作成

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象の面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
7	北山	阿久根市山下・波留	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所	南九州西回り自動車道阿久根川内道路建設	整理・報告書刊行	—	R2 R3 R4 R5	縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世 鍛冶・製鉄関連遺構 その他	土坑1基 落とし穴2基 集石5基 東原式土器(甕、壺、高坏)等 — 掘立柱建物跡12棟 竪穴建物跡1軒 土坑35基 炉跡3基 溝状遺構8条(溝内) 石列4基(溝内) 掘立柱建物跡1棟 土坑9基 製鉄炉4基 竪穴建物1棟 土坑13基 炉跡19基 土坑20基 炉跡7基 柱穴・ピット974基	加栗山式、小牧3A、吉田式、別府原式、政所式、中原1類、中原2類、中原5類、塞ノ神B式、その他早期土器、春日式、阿高系(南福寺式含む)、西平式、その他後晩期土器 石鏝、スクレーパー、石鏟、二次加工のある剥片、石核、打製石斧、磨製石斧、石皿、台石、砥石、石鏟、敲石、磨敲石、磨石、凹石、軽石製品、その他石製品 土師器(甕・坏・壺等)、須恵器(壺・碗等)、黒色土器B類、越州窯系青磁、土製品、文字資料(へら書き・墨書)【へら書き:土師器、墨書:須恵器】 土師器(坏・皿等)、中世須恵器(東幡系・産地不明等)、瓦質土器(摺鉢・火鉢・風炉等)、国産陶器(摺鉢・甕等)【備前・常滑等】、青磁(碗・皿・坏等)【龍泉窯系・同安窯系等】、白磁(碗・皿・含子等)【中国を基本として朝鮮も含む】、青花(碗・皿等)【景德鎮窯・漳州窯等】、輸入陶器(壺・甕・瓶等)【中国南部・タイ産等】、滑石製石鏟、石鏟(石鏟転用)、茶臼、銭貨(洪武通宝)、火打石、天草砥石 陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前、古伊万里等)、金床石 陶器(薩摩焼・備前焼等)、磁器(肥前、古伊万里等)、鉄製品、鉄滓、羽口、炉壁等 天草砥石、打欠石、碁石、硯、銅製品、古銭、鉄製品	遺跡は、阿久根市山下及び波留に位置し、阿久根市内を流れる高松川左岸の標高約30～37mの台地上に所在する。遺跡周辺は古代の英祢駅比定地のひとつと考えられ、東側に位置する愛宕山には、中世莫祢氏の本拠地である阿久根城跡があるなど、古代から中世において歴史的に重要な役割を果たした地域といえる。 調査区では、縄文時代から近世までの遺構・遺物の検出・出土を確認した。縄文時代早期では、集石・土坑に伴う政所式土器のほか、腰岳系・針尾島系・姫島系の黒曜石が出土しており、他地域との交流が行われていたことが窺える。中世は、遺構の検出状況、遺物の出土状況から、溝による土地区画に伴う大規模な開発が13世紀後半以降に行われていたことが想定される。また、中世後半から近世前半にかけての製鉄炉4基を含む製鉄関連遺構を確認した。立地や形態がこれまでに確認されている製鉄炉とは異なっており、今後の検討課題である。近世における出土陶磁器の帰属時期は、16世紀末以降から19世紀の年代幅に収まる。なかでも17世紀後半～18世紀前半の陶磁器が主体を占め在地系陶器に加え、肥前系の陶器が多く見られるのが特徴である。	辻山川(上床)
8	玉利	指宿市十町	国土交通省九州地方整備局 鹿児島国道事務所	国道226号北十町歩道整備	整理・報告書刊行	—	R5	弥生時代 古墳時代 時期不詳	ピット40基 土坑1基 — —	土器 弥生時代中期 弥生時代後期～古墳時代初頭 古墳時代後半 石胞丁、凹石、砥石、軽石製品 石匙、鉄製品	遺跡は、指宿市街地の北部に所在し、西側の山裾から東側の海岸へ緩やかに傾斜する火山性扇状地上に位置する。遺跡では、開聞岳の噴出物である紫コラ、青コラ、暗紫コラの堆積も確認された。 主な遺構としてピットが検出され、遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭を主体とする多量の土器片が出土した。 出土遺物のうち、炭化物が付着しているものは年代測定及び安定同位体分析を実施し、内容物の検証を行った。また、土器圧痕分析により当時集落に存在した植物についても考察を行った。石器については、石胞丁の使用痕分析を依頼し、使用対象物を検討した。	眞邊

整理作業

No	遺跡名	所在地	事業主体	起因事業名	調査の種類	調査対象の面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	遺物	注目される成果	担当者
9	南水ヶ池B	志布志市志布志町帖	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	国道220号油津・夏井道路建設	整理	—	R5 R6	旧石器時代 ナイフ形石器文化期 旧石器時代 細石刃文化期 縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代後期 弥生時代 古墳時代 中世 時期検討中	— — 連穴土坑1基 集石4基 落とし穴1基 — — — — 溝状遺構13条 古道(硬化面)13条 —	石鏟、搔器、剥片、ブランディングチップ 細石刃 倉園B式土器、石坂式土器、桑ノ丸式土器、打製石鏝、磨敲石、石鏟 中岳Ⅱ式土器 刻目突帯文土器、高橋式土器 成川式土器 玉縁口縁白磁、青磁碗、華南三彩鳥形水注、青白磁双耳壺、青花(碗・皿)、土師器 溝状遺構4条 古道(硬化面)5条 土坑14基(中世以降)	遺跡は、市街地の東側、志布志湾を望む標高約55mの台地上に位置し、南西約1.5kmには国史跡の志布志城跡がある。中近世の古道及び溝状遺構が多数検出された。志布志方面から夏井を通り串間方面へ向かう交通の要だったと推定される。遺構周辺や溝内からは、中国製陶磁器の華南三彩鳥形水注や青白磁等が出土した。縄文時代早期には、調理用施設と思われる連穴土坑や集石が検出された。集石の隣と周辺の礫が接合して、台石等の石器になることも確認された。また、旧石器時代の層からは、細石刃と呼ばれる石器や、動物の皮をなめすスクレーパー、穿孔具である石器などが出土している。	大保上床

※これらの成果は、今後、整理作業を進めていく中で再評価される可能性があります。
利用の際は、埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センターへ確認、使用承諾を得てください。

1 資料調査・貸出等

資料調査受け入れ数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	研究会	合計(件)
8	4	14	0	0	0	3	29

調査遺跡数	調査遺物数
のべ118	(4452) ほか一式

写真・図版貸出数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	研究会	合計(件)
4	5	2	7	0	1	2	21

写真・図版・遺物・剥ぎ取り資料貸出数

遺跡数	点数
のべ165	1,843

遺物・剥ぎ取り資料貸出数

博物館等	行政	大学	小中高	自治会等	企業	研究会	合計(件)
12	9	3	0	0	0	0	24

主な貸出先

国立歴史民俗博物館, 九州国立博物館, 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 ほか各博物館等

2 ホームページ(<https://www.jomon-no-mori.jp>)アクセス数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
アクセス数	7,755	21,033	18,613	17,237	9,496	13,903	16,052	13,555	11,013	12,232	10,471	10,912	162,272

3 データベース登録数(ホームページにて検索可能)

No	登録遺跡名		登録遺物		登録遺構	
			登録実測図	登録写真	登録実測図	登録写真
1	黒川洞穴		553	254	17	9
2	廣牧遺跡		429	270	669	15
3	久保田牧遺跡2		57	57	14	13
4	立塚遺跡		11	10	0	0
5	光台寺跡		30	26	3	3
6	照信院跡		56	51	22	6
7	大願寺跡		19	19	11	6
8	平佐焼窯跡		737	0	16	16
9	六反ヶ丸遺跡 4		293	177	17	11
10	萩ヶ峰遺跡		587	422	18	13
11	白水B遺跡		20	20	4	2
12	山ノ上A遺跡		44	43	0	0
13	白AB遺跡		13	13	0	0
令和5度合計		遺跡数：13	2, 849	1, 362	791	94
累計		遺跡数：516	635, 687			

4 分析・保存処理点数(令和6年度中に処理が完了した遺物数)

No	処理名	処理点数	遺跡名
1	金属器処理	83点	川久保, 数領, 尾長谷迫, 平佐焼窯跡群, 萩ヶ峰, 照信院跡, 光台寺跡, 西田橋移設復元工事
2	木器処理	52点	鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)
3	分析(蛍光X線, 赤外線, レントゲン)	298点	立塚, 北山, 名主原, 鹿児島城二之丸, 新城跡, 久保田牧, 柳迫, 諏訪ノ前, 南水ヶ迫B

5 研修・講座等

埋蔵文化財専門職員養成講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	埋蔵文化財基礎講座	7月19日	5市4町のべ14人
2	埋蔵文化財技術研修講座(調査技術)	8月22日～8月23日	5市6町のべ14人
3	埋蔵文化財技術研修講座(調査研究法)	2月13日～2月14日	13市8町のべ32人

教員の研修講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	フレッシュ研修講座 「体験・体感 縄文の森」	8月8日～8月9日	初任者4人 9日のみ3人
2	パワーアップ研修(10年経験者研修) 「体験・体感 縄文の森」	7月25日～7月26日 8月1日～2日	小・特・養・栄:10人 中・高:10人
3	地域体験研修(フレッシュ研修)・課題研究Ⅱ(パワーアップ研修)	8月19日～8月20日・8月22日	教職員:10人

6 普及・啓発関係

鹿児島県立埋蔵文化財センター遺跡フォーラム2024

開催日	会場	内容	参加者数
令和6年11月2日	鹿児島市	かごしま遺跡フォーラム 新発見かごしまの遺跡2024	80人

遺跡公開(現地説明会等)

遺跡名	場所	期日	内容	見学者数
名主原遺跡	鹿屋市	8月27日	現場公開	57
下城跡	始良市	12月22日	現地説明会	160
合 計				217

(公財)埋蔵文化財調査センター実施分

遺跡名	場所	期日	内容	見学者数
南水ヶ迫B遺跡	志布志市	12月7日	現地説明会	105
南水ヶ迫B遺跡	志布志市	1月22日	遺跡見学	1
野首遺跡	志布志市	1月22日	遺跡見学	1

発掘体験等

遺跡名	場所	期日	内容	学校名等	員数
下城跡	始良市	6月19日	遺跡見学・発掘体験	始良市立北山小学校5・6年生	16 人
名主原遺跡	鹿屋市	7月23日	遺跡見学・発掘体験	鹿児島市立西陵小学校3年生	1 人
合 計					17 人

職場体験学習・インターンシップ等

期 日	体験者等	内容	員数
5月7日～9日	霧島市立国分中学校3年生	職場体験学習	3 人
5月14日～16日	霧島市立隼人中学校3年生	職場体験学習	3 人
5月14日～16日	霧島市立国分南中学校3年生	職場体験学習	3 人
5月22日～24日	霧島市立舞鶴中学校3年生	職場体験学習	4 人
7月30日～31日	霧島市立横川中学校1年生	インターンシップ	1 人
合 計			14 人

まいぶんキット貸出事業(ワクワク考古案を含む)

貸出内容						貸出対象数
本物の遺物(土器や石器など)をセットにしたものを学校等に貸出し、授業で本物に触れる機会を提供						対象25件, 1,154人以上
	貸出期間	学校等名	市町村名	対象		内容
				学年	児童・生徒数	
1	4月19日	国分南小学校	霧島市	6	88	縄文人の暮らし
2	5月17日	国分南中学校	霧島市	1	140	縄文人の暮らし
3	5月27日	秦野小学校	志布志市	6	8	縄文人の暮らし
4	5月29日	伊敷小学校	鹿児島市	6	62	縄文人の暮らし
5	5月31日	尾野見小学校	志布志市	6	10	縄文人の暮らし
6	6月1日	県歯科医師会			18	廃仏毀釈
7	6月1日	東谷山小学校	鹿児島市	6	125	キット貸出のみ(土器・石器等)
8	6月3日	和泊小学校	和泊町	6	34	キット貸出のみ(土器・石器等)
9	6月3日	波野中学校	肝付町	1	3	キット貸出のみ(土器・石器等)
10	6月14日	国分西小学校	霧島市	6	116	縄文人の暮らし
11	6月15日	小山田小学校	鹿児島市	6	11	キット貸出のみ(土器・石器等)
12	6月19日	米ノ津東小学校	出水市	6	58	縄文人の暮らし
13	5月29日	野神小学校	志布志市	6	22	縄文人の暮らし
14	7月5日	細山田中学校	鹿屋市	1	32	縄文人の暮らし
15	7月10日	伊作小学校	日置市	6	35	縄文人の暮らし
16	7月12日	花岡中学校	鹿屋市	1	38	縄文人の暮らし
17	10月2日	古田小学校	西之表市	1～6年	20	種子島の遺跡
18	10月3日	現和小学校	西之表市	3～6年	21	種子島の遺跡
19	10月3日	上西小学校	西之表市	3～6年	13	種子島の遺跡
20	11月27日	鹿児島南特別支援学校	鹿児島市	中学部 1～3年	18	縄文人の暮らし
21	12月5日	面縄中学校	伊仙町	1～3年	66	徳之島の歴史
22	12月6日	喜念小学校	伊仙町	1～6年	18	徳之島の歴史
23	12月6日	面縄小学校	伊仙町	5・6年	40	徳之島の歴史
24	1月22日	国分小学校	霧島市	6	134	国分小周辺の遺跡や歴史
25	1月27日	ジュニア・リーダー研修会		中1～高3	24	縄文人の暮らしと県内の遺跡
合計					1154	

※「ワクワク考古案」とは、専門的な知識を持ったセンター職員が、学習指導案を作成し、本物の資料や発掘調査の成果等を効果的に使用して行う授業支援。

おでかけ体験隊支援

支援内容						対象数
土器、石器等の実物資料を活用した教育活動の支援と郷土教育推進を目的とした「上野原縄文の森」主体の出張講座で、埋文センター職員は随時支援を行う形で関わっている。						対象6件, 432人以上
	出期間	学校等名	市町村名	対象		内容
				学年	児童・生徒数	
1	5月17日	国分南中学校	霧島市	1	140	火おこし
2	5月29日	伊敷小学校	鹿児島市	6	58	火おこし
3	6月14日	国分西小学校	霧島市	6	119	火おこし
4	6月19日	米ノ津東小学校	出水市	6	51	火おこし
5	7月5日	細山田中学校	鹿屋市	1	31	火おこし
6	7月10日	伊作小学校	日置市	6	33	火おこし
合計					432	

7 刊行物等

発掘調査報告書

No	シリーズ	発掘調査報告書名	所在地	執筆担当	発行月
1	セ227	柳迫遺跡	曽於市末吉町	上浦麻矢・黒川忠広	令和6年12月
2	セ228	立塚遺跡2	鹿屋市吾平町	藤島伸一郎・山下智沙子	令和7年2月
3	セ229	高橋貝塚2	南さつま市金峰町	堂込秀人・宮崎大和	令和7年3月
4	セ230	中組遺跡	大島郡天城町	上浦麻矢・星野清・黒川忠広	令和7年3月
5	セ231	鹿児島城二之丸跡	鹿児島市	星野清・黒木梨絵・平美典	令和7年3月
6	セ232	久保田牧遺跡3 (縄文時代前期中葉～古墳時代編)	鹿屋市吾平町	森えりこ・楸田岳志	令和7年3月
7	セ233	二子塚B遺跡	曽於郡大崎町	廣栄次・中野智也	令和7年3月
8	セ234	八重石遺跡	西之表市馬毛島	中野智也・堂込秀人	令和7年3月
9	財57	玉利遺跡	指宿市十町	眞邊彩	令和7年3月
10	財58	山借シ遺跡	大島郡喜界町	小野恭一	令和7年3月
11	財59	新城跡	阿久根市山下	弓場隆章・北園和代・川口雅之	令和7年3月
12	財60	諏訪ノ前遺跡	阿久根市波留	松山初音・平嶺浩人・北園和代・川口雅之	令和7年3月
13	財61	北山遺跡2	阿久根市山下	辻明啓・山川正樹・上床真	令和7年3月

埋文だより(各2,400部発行)

No	シリーズ	内容	発行日
1	93号	黒川洞穴里帰り展、発見！発掘速報、わくわく考古楽授業支援(出前授業)、現地説明会を実施(名主原遺跡)、暑さに負けずパワーアップ！各種研修を実施、令和6年度発掘調査予定遺跡、自宅で遺跡を見学しよう	9月30日
2	94号	かごしま遺跡フォーラム、発見！発掘速報、現地説明会を実施、ワクワク考古楽in徳之島、河コレ遺跡巡り(宇宿貝塚)、自宅で遺跡を見学しよう	2月28日

8 鹿児島県立埋蔵文化財センター来所者数(令和6年度)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
個人	小学生	14	155	3	97	161	3	77	27	6	7	0	30	580
	中学生	46	29	1	13	54	5	0	0	0	1	1	3	153
	高校生	1	3	36	3	16	5	2	36	0	0	0	3	105
	一般	145	147	81	149	248	95	153	194	133	156	140	293	1,934
	その他	12	3	4	16	59	6	9	13	6	14	3	16	161
	計	218	337	125	278	538	114	241	270	145	178	144	345	2,933
団体	小学生	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	中学生	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校生	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	小学生	14	155	3	97	161	3	77	27	6	7	0	30	580
	中学生	46	29	1	13	54	5	0	0	0	1	1	3	153
	高校生	1	3	36	3	16	5	2	36	0	0	0	3	105
	一般	145	147	81	149	248	95	153	194	133	156	140	293	1,934
	その他	12	3	4	16	59	6	9	13	6	14	3	16	161
	計	218	337	125	278	538	114	241	270	145	178	144	345	2,933

9 (公財)鹿児島県上野原縄文の森との連携

企画展・特別展関係

No	開催期間	企画展テーマ	講演会期日	職名・講師	講演会参加者数	総来園者数
第69回	4月27日 ～9月23日	「歴史のかけはし ～「史跡」でたどるかごしまの歴史」	6月1日	(公財)上野原縄文の森事業推進員	49	9,716
			9月7日	(公財)上野原縄文の森事業推進員	38	
第70回	10月5日 ～12月8日	「新発見！かごしまの遺跡2024～発掘調査速報展～」	11月2日	鹿児島県立埋蔵文化財センター職員 (公財)埋蔵文化財調査センター職員	80	5,982
第71回	12月21日 ～3月9日	「人と遺跡のものがたり ～かごしまの考古学研究史～」	2月8日	鹿児島県文化財保護審議会 会長 本田 道輝 氏 文化庁文化財第二課 主任文化財調査官 近江 俊秀 氏	112	2,375

考古学講座

No	期日	タイトル	講師	参加者数
第1回	4月20日	「探検！上野原遺跡」	上野原縄文の森職員	22
第2回	5月25日	「はじめての考古学～かごしまの平安時代～」	(公財)埋蔵文化財調査センター 調査第三係長 上床 真 氏	29
第3回	6月22日	「南の縄文文化」	上野原縄文の森職員	59
第4回	10月26日	「古の海岸線を歩こう～鹿児島神宮周辺を巡る～」	鹿児島大学 名誉教授 森脇 広 氏	34
第5回	2月22日	「埋文センターの30年」	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 中村 和美 氏	46

テーマ展示(常設展示コーナー)

	期日	展示内容
第1回	10月5日～5月13日	テーマ展示Ⅰ「弥生」

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第18号

発行年月 2025年10月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 18 CONTENTS

Introduction of excavated materials at the Hoshizako site,
Kajiki-cho, Aira City (2)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

The Suruga Bay-type pottery fragments excavated from
the Komaki site in Kanoya City

Kitazono Kazuyo

T Consideration about medieval toilet remains
in Kagoshima Prefecture

Hiramine Hiroto

The emergence and materials for flint
in Satsuma and Osumi

Fujiki Satoshi

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
6nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2025

研究紀要・年報

縄文の森から

第
18
号

二〇二五

鹿児島県立埋蔵文化財センター